野尻町文化財調査報告書第5集

AMAGATANI

天ケ谷遺跡

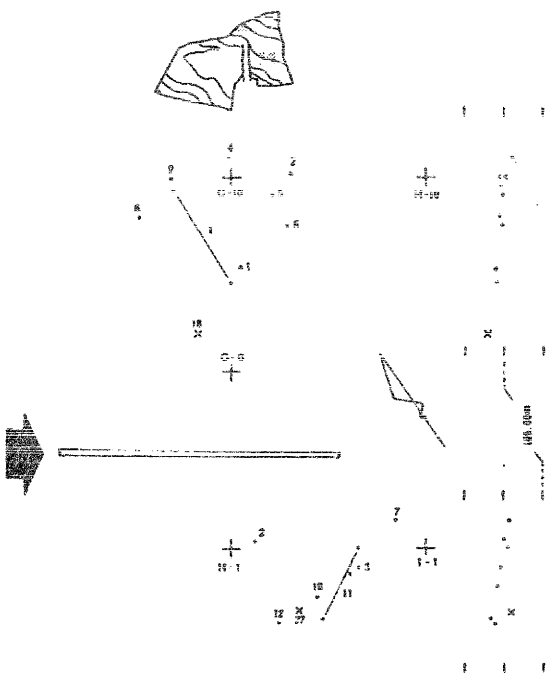
1992

宮崎県西諸県郡
野尻町教育委員会

『天ケ谷遺跡』正誤表

P	l	誤	正
11	4	3号集石は、	この5号集石は、
15	16	5号集石実測図（1／20）	5号集石実測図（1／40）
17	11	図は示した	図に示した
64	3	(Fig.44－3)	(Fig 44－4)
64	9	(Fig 44－4)	(Fig 44－3)

P 28のFig.21に、
矢印部分の線を
入れること



野尻町文化財調査報告書第5集

AMAGATANI

天ケ谷遺跡

1992

宮崎県西諸県郡
野尻町教育委員会

序

ふるさと創生特別対策事業等により、平成元年度から平成３年度にかけて開発された「のじりこぴあ」の本オープン（平成４年４月５日）も目前に迫っています。

この町営多目的広場建設計画が具体化される直前に、この計画を知った町教育委員会にはどよめきと緊張の空気がみなぎりました。

それは天ケ谷の建設計画地に立地条件から考察して遺跡発掘調査の必要性を予感したからであります。

県教育委員会文化課に試掘を依頼した結果はまさに予感が的中し、縄文時代遺物包含層が確認され、緊急発掘なくしては建設計画をストップせざるを得ないことでありました。

陸上自衛隊による土地造成工事計画の進捗（しんちょく）状況との関連もあり、困難な諸条件は承知で県文化課にお願いをし、埋蔵文化財関係の皆様のご理解・ご協力を得たときは涙の出るほどの感動を味わいました。

二年度にわたる発掘調査も無事終了し、その後の開発諸事業も順調に進み「のじりこぴあ」の本オープンを迎えることになりましたことは、県文化課関係各位のご厚情とご理解、厳寒の中で協力いただきました町内発掘作業員の皆様の献身的なご協力の賜と心から感謝いたしております。

天ケ谷遺跡からは縄文時代早期の石器・土器や集石遺構等の貴重な遺物が発掘され、幾千年も眠り続けた文化財に学術的なメスを加え、科学的な解明をしていただきました。

代表的な遺物は野尻町歴史民俗資料館に保存展示いたします。この報告書とともに野尻町の原始社会を知るため、広く活用されることを念願し、関係の皆様全員にお礼を申し上げまして序文といたします。ありがとうございました。

野尻町教育委員会

教育長　今　吉　忠　義

例　言

1．本書は、野尻町町営多目的広場(のじりこぴあ)建設事業に伴い、昭和63年度、平成元年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．調査体制は次のとおりである。

調査主体　野尻町教育委員会

教育長	今吉　忠義
教育課長	吉田　哲幸
同課長補佐	川野　昭夫
同文化財担当	吉野　貴弘
調査員	岩永　哲夫（宮崎県教育庁文化課埋蔵文化財係係長）
	吉本　正典（同主事）

3．本書の執筆、編集は吉本が行なった。

4．本書中の方位は1988・89年における磁北である。ただしFig. 2のみはグリッド北である。またレベル値は、海抜絶対高である。

5．土器について井ノ上秀文氏（鹿児島県教育庁文化課）、宮田栄二氏（同）、桒畑光博氏（都城市文化課）から御教示をいただいた。

6．石器の石材、遺跡の地質的特徴について、宍戸章氏（元宮崎県教育庁文化課）から御教示をいただいた。

7．集石遺構の考察に関して、徳永貞紹氏（佐賀県教育庁文化財課）の御協力を得た。

8．出土遺物は野尻町教育委員会で保管している。

目　次

Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1

Ⅱ　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 1

Ⅲ　調査区の設定と調査の概要 …… 5

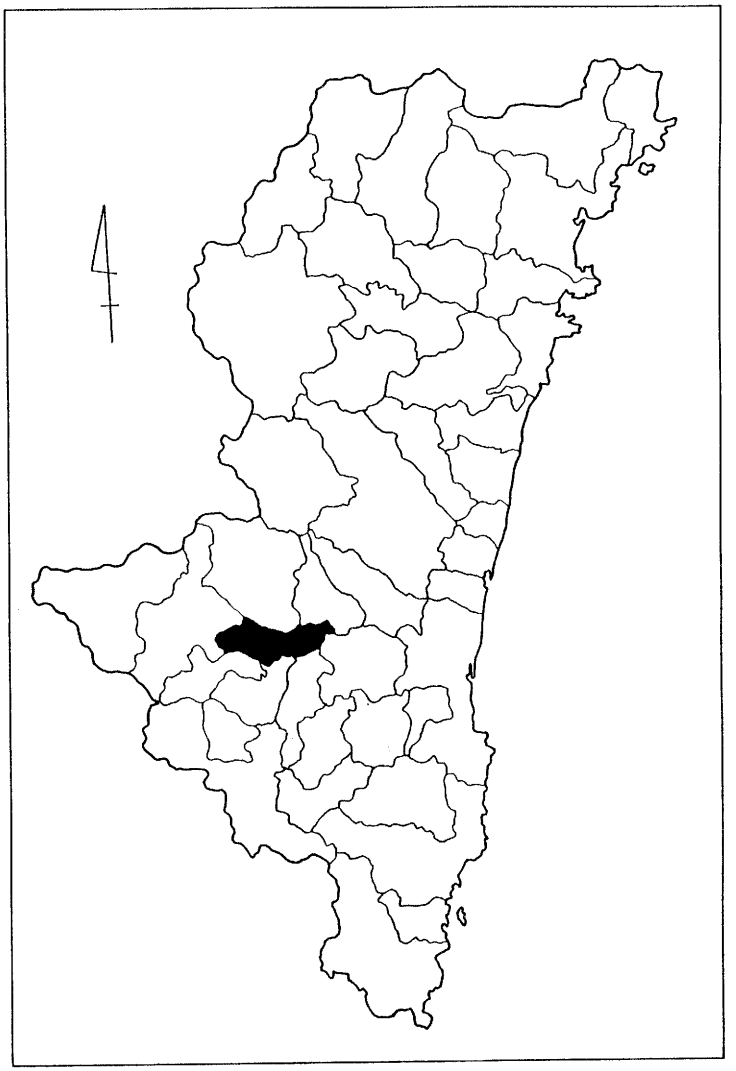
Ⅳ　層序 …… 5

Ⅴ　検出遺構 …… 9
1．概要 …… 9
2．土坑 …… 9
3．集石遺構 …… 9

Ⅵ　出土遺物 …… 17
1．概要 …… 17
2．土器 …… 17
3．石器 …… 58

Ⅶ　まとめと考察 …… 63
1．遺構と遺物 …… 63
2．縄文時代早期の集石遺構について
—東部九州南半地域の資料の検討— …… 64

Ⅷ　写真図版 …… 68



巻頭Fig　宮崎県略図

Ⅰ　調査に至る経緯

宮崎県西諸県郡野尻町において、町営の多目的広場を建設する計画がもちあがったが、当該地には埋蔵文化財が包蔵されていることが予想された。このため野尻町企画課、宮崎県教育委員会、野尻町教育委員会の三者による協議を受け、平成元（1989）年１月30日に試掘調査が野尻町教育委員会によって行なわれた。その結果、アカホヤ層（後述）以下に縄文時代早期の遺物包含層が認められたため、さらなる協議を経て、同年の２月16日から３月29日と、平成２年度の２月27日から３月30日の２ケ年度にわたって、宮崎県教育委員会文化課埋蔵文化財係係長岩永哲夫、同主事吉本正典の担当により発掘調査を行ない、記録を後世に残すことになった。

Ⅱ　遺跡の地理的・歴史的環境

天ケ谷遺跡は、宮崎県西諸県郡野尻町大字東麓字天ケ谷に所在する。

野尻町は、九州の南東部に位置する宮崎県の、中央よりやや南西寄り、霧島連山の北東側に位置する。西方は西諸県地方の中心都市の小林市に接する。

当地は四万十層群を基盤とする高峻な九州山地と、標高300m以下のやはり四万十層群より成る「諸県山地」[(1)]にはさまれた凹地にあたり、姶良カルデラ起源の入戸火砕流堆積物（シラス・約22,000年前）が平均標高約200mの平坦面を形成して凹地を覆っている。その入戸火砕流堆積物や、いわゆる二次シラスによる平坦地が南九州特有のシラス台地であり、流水の開析作用によって形成された急崖をなす谷壁と、平坦な谷底による特徴的な景観を展開している。さらに、このシラス台地の上には、小林軽石層、アカホヤ層といった火山噴出物およびその土壌化層が広がる。このように火山灰土壌が卓越することから、概して農耕には不向きな地域であり、町域の約60%が山林という。[(2)]

一方、町内を流れる小河川は、町域南端部を東流する岩瀬川に集まり、さらに高崎町、高城町との境界部で北流してきた大淀川に合流する。

天ケ谷遺跡は、戸崎川左岸の南に向かって張りだした小丘陵の端部に立地する。標高は約165mを測る。もっとも調査開始以前は国道により丘陵基部を切断されており、独立丘陵状になっていた。さらに戸崎川の下流には、昭和42年に岩瀬ダムが建設され、深い谷を刻んでいた遺跡直下は人造湖に変わっている。[(3)]

周辺に位置する遺跡としては、戸崎城、高松城といった中世山城跡、縄文時代早期の遺跡で、集石遺構が多数検出された梯遺跡が挙げられる（Fig. 1）。さらに東方に位置する漆野原地区には、ほ場整備事業に伴って発掘調査の行なわれた新村遺跡、高山遺跡、東城原遺跡があり、ここでも縄文時代早期の集石遺構が多数確認されている。[(4)]当該期の周辺遺跡の内容、特に土器相

は当然のことながら本遺跡と共通する点が多く、本遺跡の検討を進める際に欠かすことのできない関連資料と言える。

その後当地には、古代駅制における「野後駅家」が存在したとされ、また鹿児島藩領となった近世には紙屋に関所が置かれるなど、肥後方面との交流の中継点と位置付けることができよう。

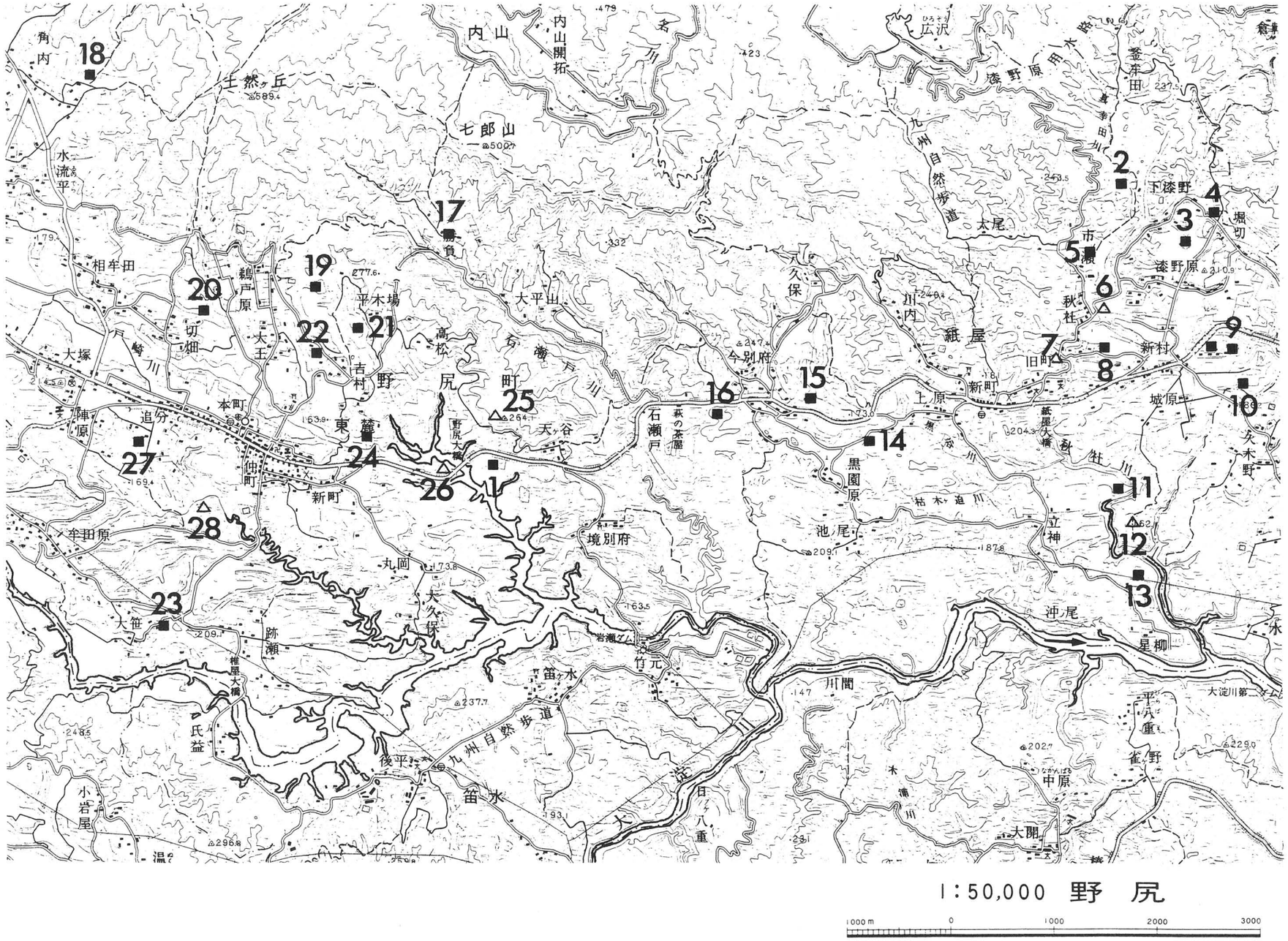
〔註〕

1) 遠藤　尚　1981「宮崎県西諸県郡高原町日守遺跡の地形的・地質的背景」『宮崎県文化財調査報告書』24　宮崎県教育委員会

2)　1986『角川日本地名大辞典』45　宮崎県　角川書店

3) 面高　哲郎　1981「梯遺跡発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』24　宮崎県教育委員会

4) 北郷泰道他　1990『野尻町文化財調査報告書第４集　新村遺跡・高山遺跡・東城原遺跡・紙屋城祉』　野尻町教育委員会



1．天ケ谷遺跡
2．真幸田遺跡
3．清野原遺跡
4．堀切遺跡
5．高山遺跡
6．漆野城跡
7．紙屋今城跡
8．新村遺跡
9．東城原
　第１・第２遺跡
10．東城原第３遺跡
11．神立遺跡
12．紙屋城跡
13．星柳遺跡
14．池ノ原遺跡
15．今別府遺跡
16．萩の茶屋遺跡
17．勝負遺跡
18．角内遺跡
19．平木場遺跡
20．切畑遺跡
21．梯遺跡
22．吉村Ａ遺跡
23．大笹遺跡
24．吉村Ｂ遺跡
25．高松城跡
26．戸崎城跡
27．九塚古墳
（県指定史跡）
28．野尻城跡

Fig. 1　遺跡の位置と周辺遺跡

Ⅲ　調査区の設定と調査の概要

遺跡は、標高約167mの丘陵端部の最高位地点を中心として広がっており、谷に面する南西方向は急激に、北東方向は比較的ゆるやかに下って遺物包含層が消滅していく（Fig. 2）。

調査に際しては、まず近年の耕作土であるⅠ層、アカホヤ層に相当するⅡ層までを重機で剥ぎ、それから10mのグリッドを設定した。杭の名称を北東から０・１・２…（ただし北東端は10となる）、北西からＡ・Ｂ・Ｃ…としてその組み合わせで表示し、グリッド名は南隅の杭の名称で代表させている（Fig. 3）。２ケ年度にわたる調査では、Ⅳ層とした縄文時代早期の包含層の調査が中心となった。遺構は土坑３基、集石遺構６基を検出している。遺物については、平面・垂直的分布についての検討を加えるため、原則として全てについて位置の記録を行なった。掘り下げ面積は、約3700㎡である（Fig. 7）。

尚、調査開始以前、遺跡は畑地として利用されていた。また、調査区のほぼ中央部には北東―南西方向に走る旧道があり、伝承によれば、南西方向に谷側に下って戸崎川を渡っていたものらしい。

Ⅳ　層　序

基本層序は、基盤の入戸火砕流堆積物を含めて、７層確認している（Fig. ４・５）。以下、各層の特徴を述べる。

Ⅰ層は、前述の通り比較的新しい時期の耕作土である。Ⅱ層はアカホヤと通称されるオレンジ色を呈する火山灰層で、下部には、ところどころに降下軽石の小さな粒の堆積が認められる。Ⅲ層は牛の脛ロームと呼ばれる青灰色の火山噴出物で、土器の小片をわずかに含む。Ⅳ層は褐色を呈する縄文時代早期の遺物包含層で、炭化物粒を含む。下位のⅤ層とは不整合となり、Ⅳ層下部にⅤ層土塊が混入する状況が見られる。計６基検出された集石遺構はⅣ・Ⅴ層の層界付近に構築されている。Ⅴ層は黒褐色土層で、上端面で縄文時代早期の遺物を出土するが、層中には遺物の包含は見られない。Ⅵ層は暗褐色砂質土で、黄色の軽石粒（小林軽石層か）を多量含む。無遺物層である。尚、各層の残存状況の比較的良いＣ－４区での厚さは、Ⅱ層が20cm、Ⅲ層が15cm、Ⅵ層が25cm、Ⅴ層が30cmである。Ⅵ層の下端部は捉えていない。Ｃ～Ｆ－２区付近はⅥ層以上の削平が著しい。

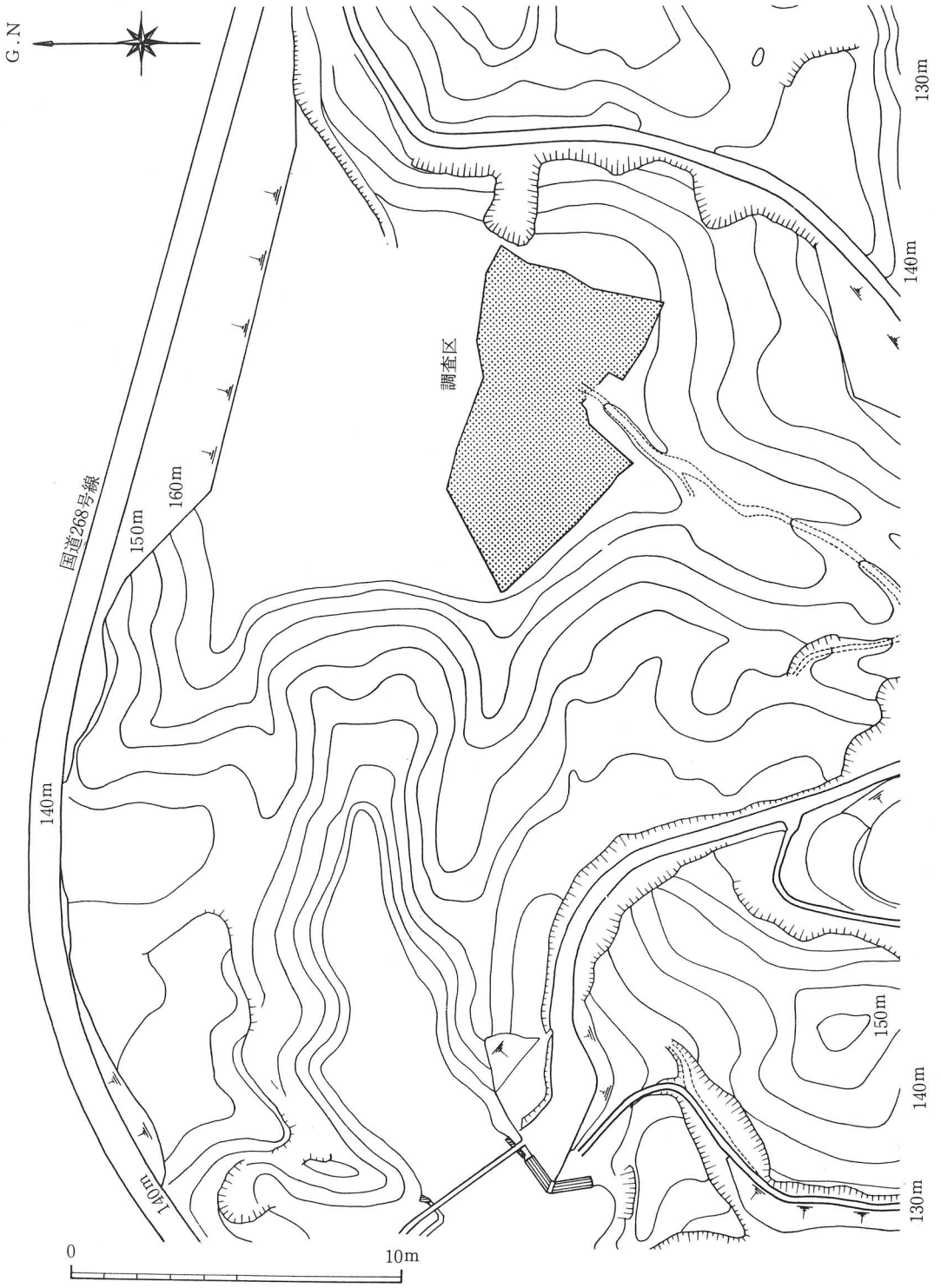
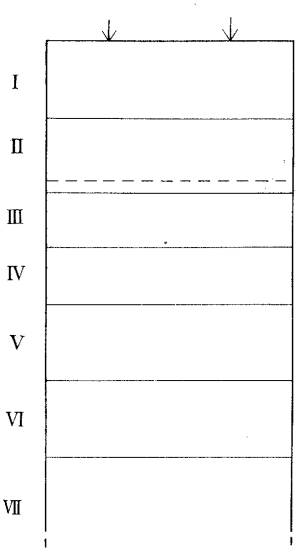


Fig. 2　調査区周辺地形図（1／2000）

Fig. 3　杭と地区の名称



II　明黄褐色。サラサラしている。アカホヤ火山灰を母胎とする。下部は粒子の大きな軽石層

III　褐灰色。ただし断面観察時はもう少し黒味が強い。

IV　褐色。粘性大。
（IV-b　IVとVの漸移層）

V　黒褐色。粘性大。径５㎜程の橙色パミス含む。

VI　暗褐色砂質土。径２～３㎜の黄橙色の火山灰ブロックを含む。

Fig. 4　基本層序模式図

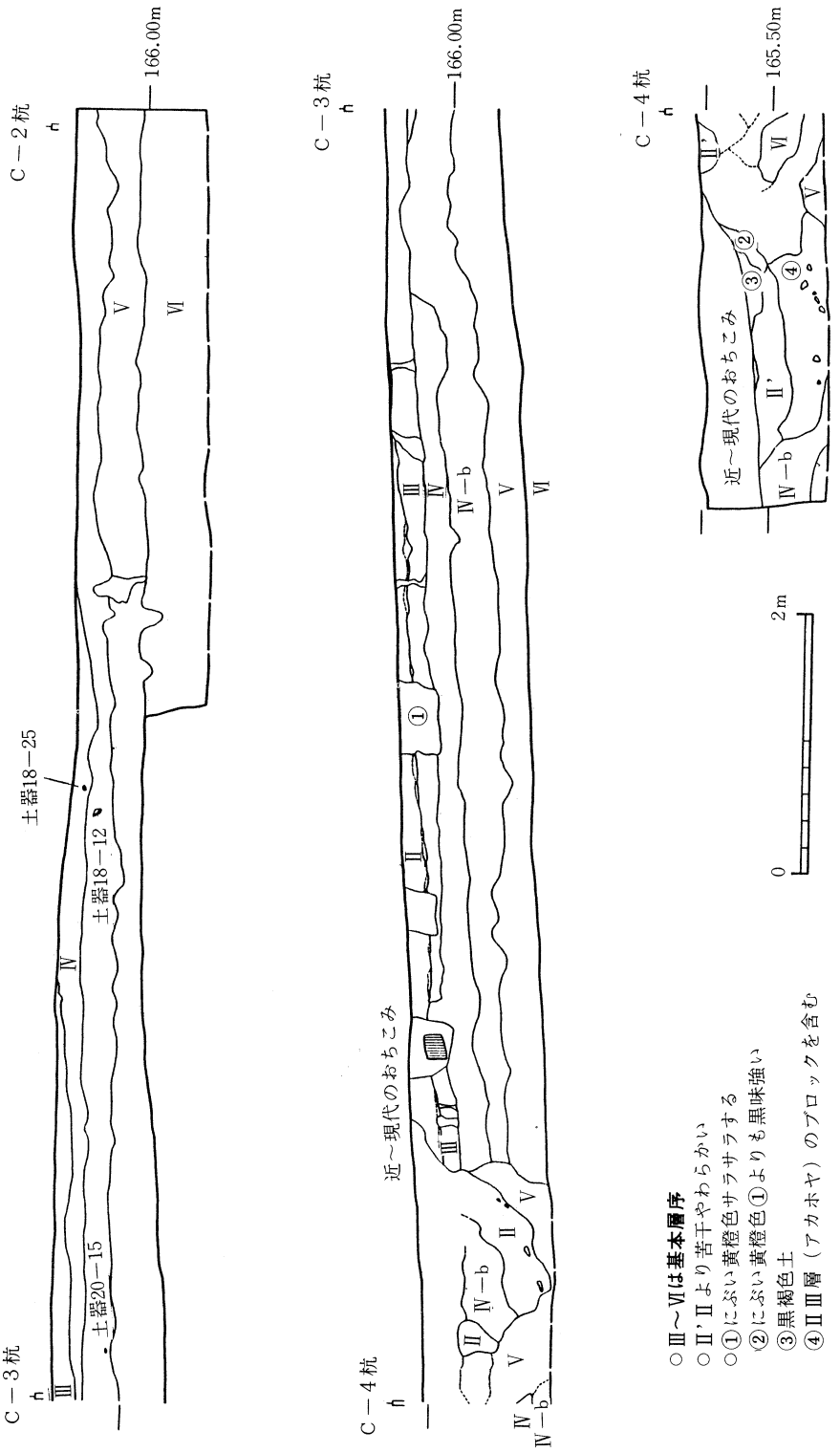


Fig. 5　C－3～5区北西壁層位図（1／60）

V　検出遺構

1．概要

アカホヤ層の上面で検出した土坑１基を除いて全て縄文時代早期の所産と考えられる。土坑は３基検出したが、Ｖ層上面で検出した１号のみが人為的と考えられるものである。この他、Ⅳ層上面において、いわゆる層位の横転、自然の営力によるとみられる撹乱の箇所が３ケ所認められた。

集石遺構は６基検出されたが、形態、特徴は多様である。尚、集石遺構の構成礫の赤変・付着物の有無、破砕の度合い等については、調査時の問題意識の欠如により記録が十分ではないことを断わっておかねばならない。また用いられる岩石の種類は砂岩が主となるようであるが、これも全てについて観察している訳ではない。

2．土坑

１号土坑（Fig. 7）

調査区の端部のＥ－１区に位置する。140cm×40cmのややいびつな楕円形を呈し、検出面からの深さは約35cmを測る。出土遺物は皆無であるが、埋土がⅣ層土であることから大きくはⅣ層の層準期の所産と捉えられる。

3．集石遺構

１号集石（Fig. 8）

Ｃ－１・２区の境界に位置する。集積度は弱く、配石、掘り込み等は見られない。礫は挙大のものが多い。礫間からは土器16が出土している。

２号集石（Fig. 9）

Ｃ－３区にあり、10～20cm程度の角礫が40個程度集まる。形態は１号集石に似る。礫間の土中には炭化物粒が混じる。また明瞭ではないが、浅い掘り込みが認められる。

３号集石（Fig. 10）

Ｆ－５区にある長径70cm、短径50cm程の礫の集中箇所で、構成礫のほとんどは赤変している赤変している礫の割合は１・２号よりも高い。また、径15cm程の比較的大きめの礫が多く、完形度も高い。掘り込み、配石等は存在しない。

４号集石（Fig. 11）

Ｆ－５区に位置する。径約70cmのほぼ円形を呈する。形態等の特徴が３号集石に類似しており、礫は大部分が赤くなり、もろい。礫の完形度は高く、15～20cm大のものが多い。これも掘り込み、配石は見られない。

５号集石（Fig. 12）

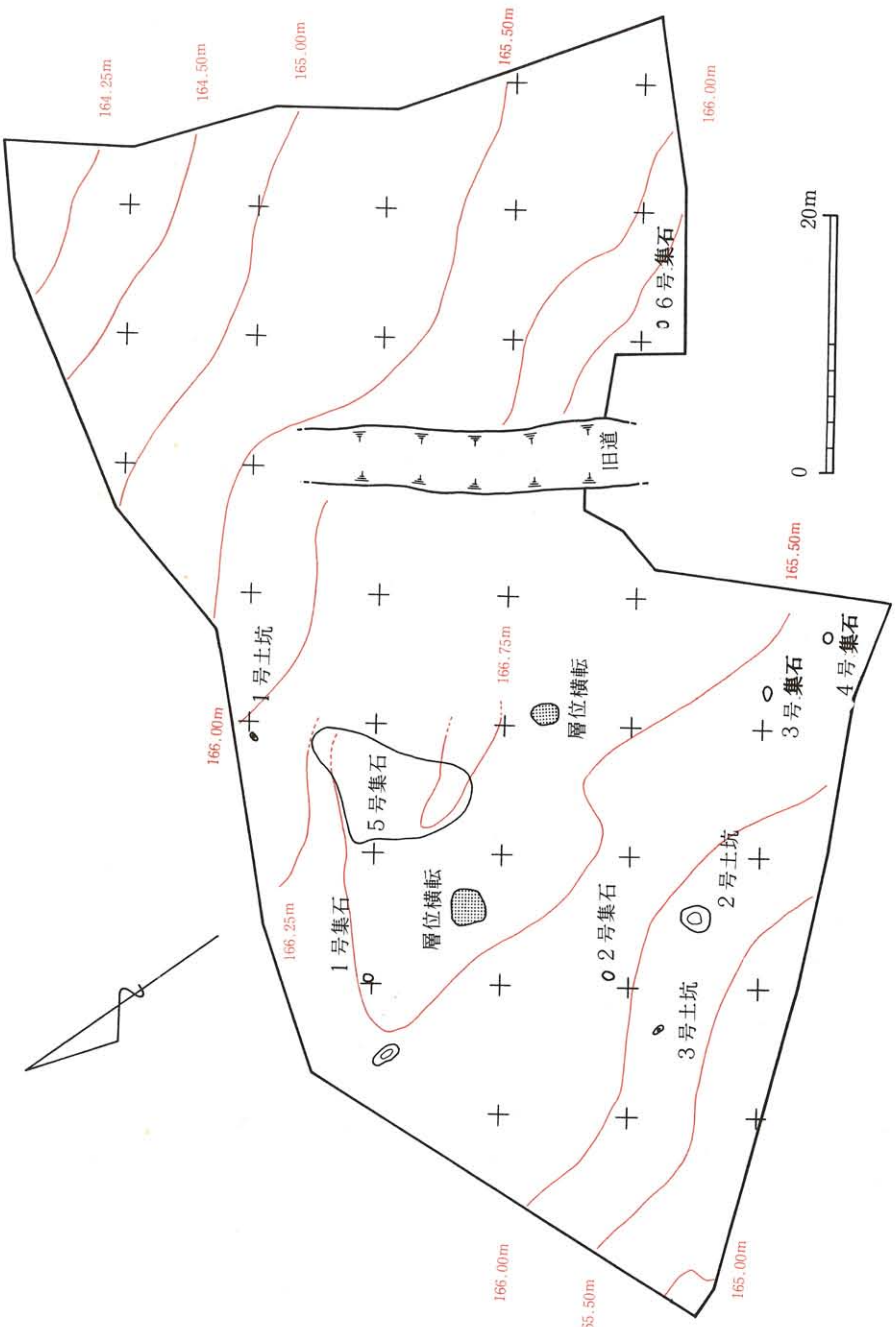


Fig. 6　遺構分布図（1／600）

E-1・2区に広く分布する礫群、集石遺構を総称している。このため、数基の集石遺構とそれに関連する礫群を含む集石遺構群と捉える方が適当であろう。中程が、平成元年度と2年度の調査区の際となったために多少の破壊を受けてしまった。

この3号集石は、遺跡内でも最高所近くに位置していることが注目される。

掘り込みを有する集石遺構は中央部附近に3箇所認められ、他に南西部に弱い集中箇所がある。掘り込み内の礫はほとんど赤くなり、もろくなっている。礫群は、特に礫が上下に重なることはなく平面的に分布する。礫の状況は集石遺構内のものと大きな違いはない。礫間には炭化物が認められる。

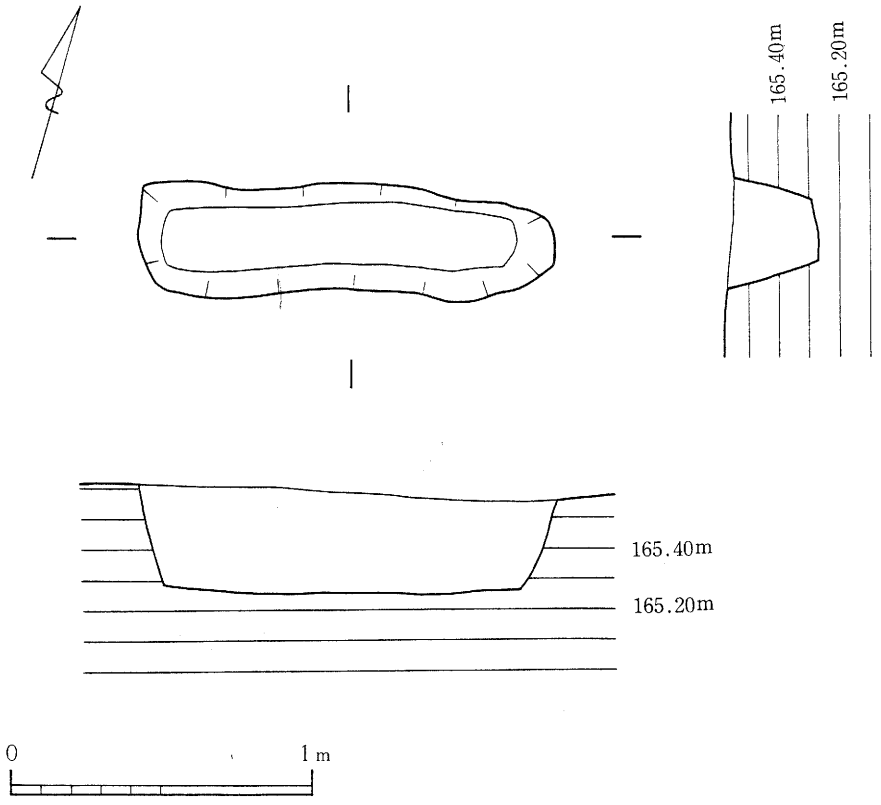


Fig. 7　1号土坑実測図（1／25）

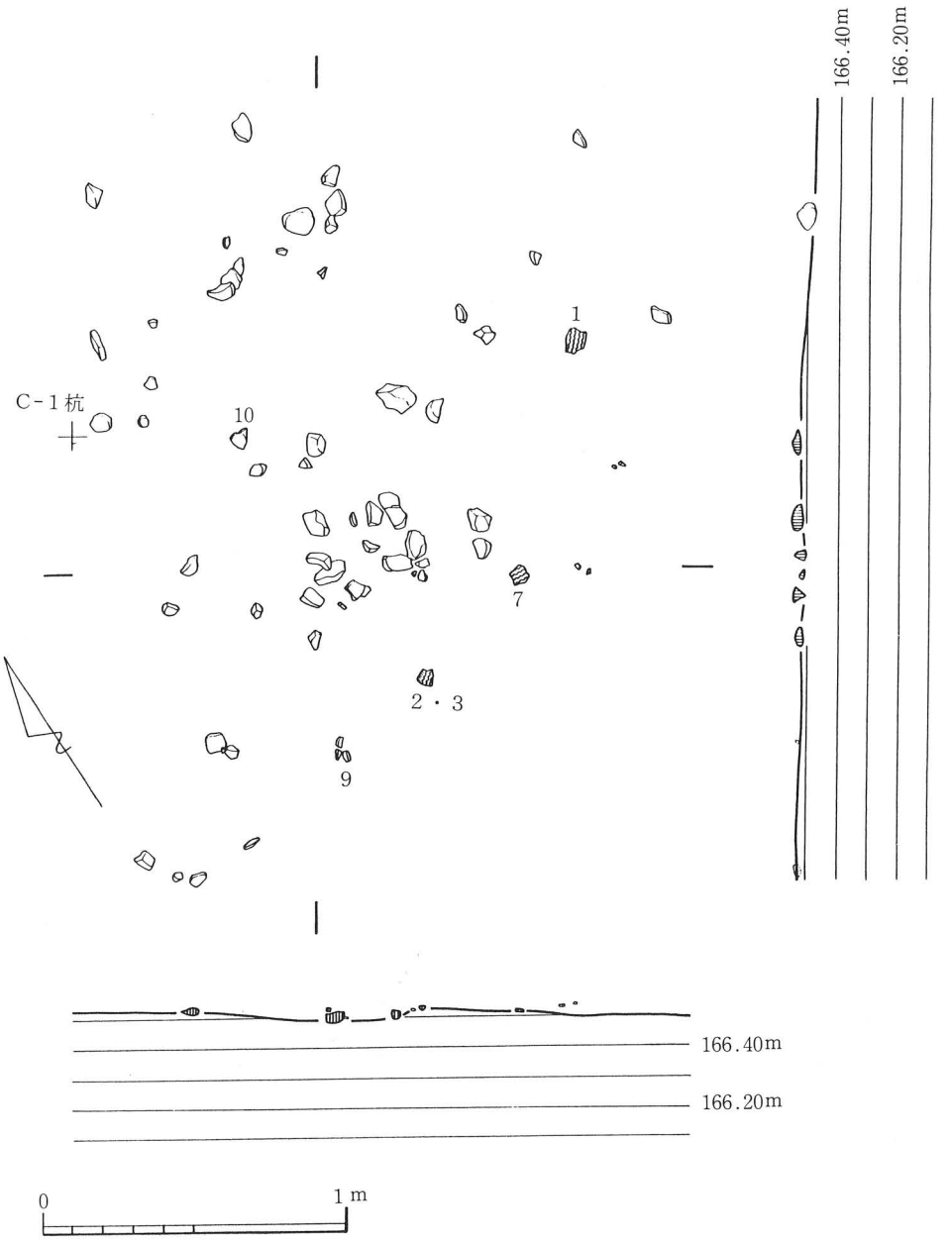


Fig. 8　1号集石実測図（1／25）

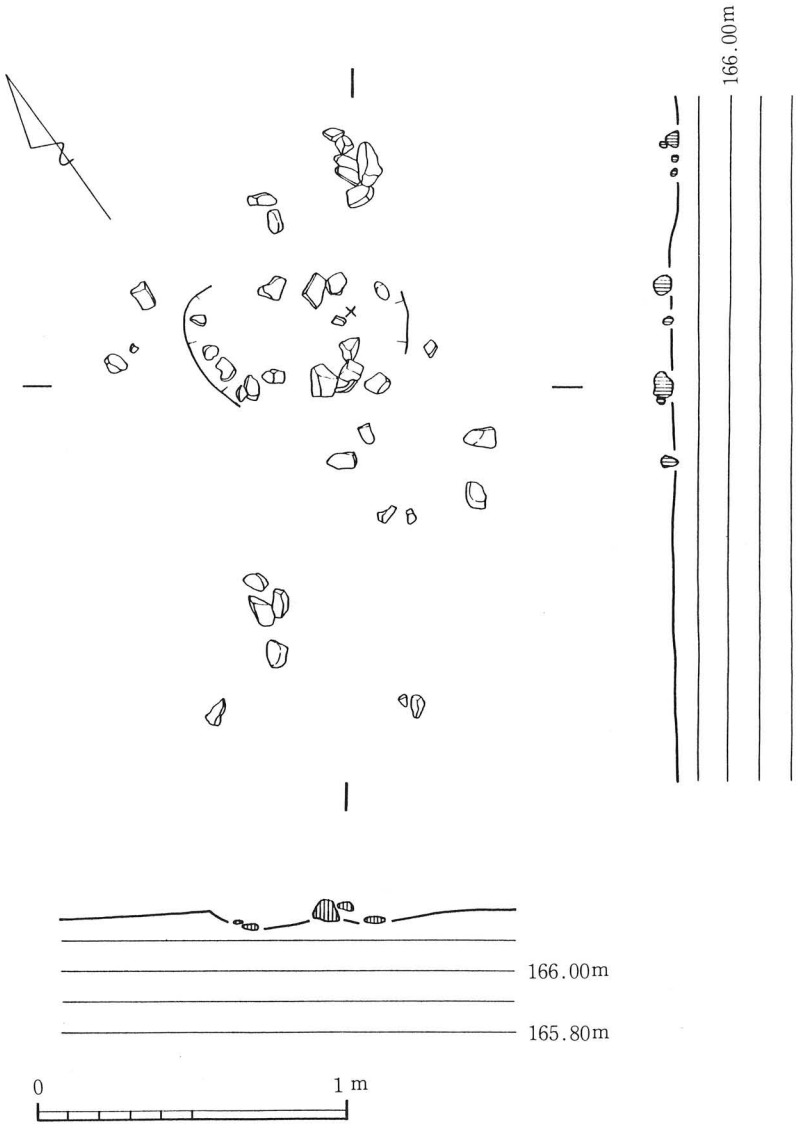
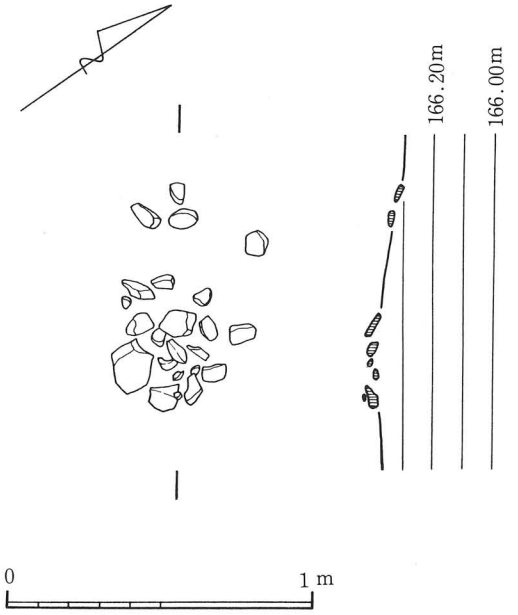


Fig. 9　2号集石実測図（1／25）



6号集石

I－4区で検出された。掘り込み、配石等は見られない。

尚、集石遺構実測図中の×印は、炭化物出土地点を示す。

Fig. 10　3号集石実測図（1／25）

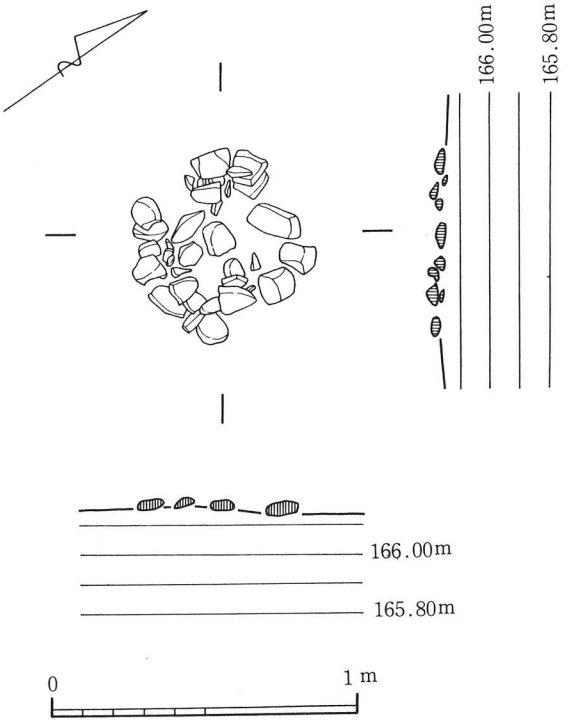


Fig. 11　4号集石実測図（1／25）

Fig. 12　5号集石実測図（1／20）

VI　出土遺物

1．概要

遺物のうち大多数を占めるのは、前述の通りⅣ層中（Ⅳ層とⅤ層の層界付近のものも含む）から出土した縄文時代早期の土器・石器である。その他、Ⅰ層、Ⅲ層中からも若干数の縄文早期土器が出土している。縄文時代早期以外の時代・時期の遺物は、Ⅰ層中より出土した、弥生土器あるいは土師器と見られる小破片２片のみであった。

縄文早期土器は、器形・文様により円筒形土器系統と押型文土器系統に大別できよう。その他、縄文、撚糸文を施すものも見られる。認識できた土器の総個体数は26個程度であった。次節においては、個体ごとに出土状況、特徴等を記していく。

石器は、15を除いてⅣ層中より出土している。図は示した石鏃、石匙、磨製石斧、掻器の他、石核や不定形の剥片（使用痕のあるものも見られる）が若干数見られた。尚、明瞭な磨石、石皿の類は皆無であった。

2．土器

土器１（Fig. 13・24）

Ｂ－３区を中心に出土している。他の土器と比べると出土にまとまりが見られ、残存の度合いも本遺跡では高い方である。出土層位はⅢ層、Ⅳ層上部に集中する。特にⅢ層出土の破片は摩滅、表面の剥落が著しい。レベル値は、上下50cm程の高低差の内にほぼ収まる。

器形は円筒形で、口縁部はわずかに外反する。口唇部は狭小な平坦面を作りだしている。

文様は、口縁部に集約される。口縁端部に縦位の貝殻腹縁刺突文を、その下部に二列の横位の貝殻腹縁刺突文を施す。胴部以下は、横・斜方向の粗いナデの痕跡が見られるのみである。内面調整も、外面と同様の粗いナデとなる。外面には、二次的火熱を受け赤変している箇所がある。

土器２（Fig. 13・24）

胴部片のみ４破片認められた。Ｂ～Ｄ－３・４区で出土している。外面は綾杉状の貝殻条痕を施し、内面は丁寧なナデとなる。器形は知り得ない。

土器３（Fig. 24）

Ⅰ層中出土の破片である。従って、縄文早期土器という確証は得られていないが、外面に貝殻条痕が見られるためここでとり挙げた。

外面の貝殻条痕は縦方向で幅が細く鋭い。内面はミガキに近い丁寧なナデとなる。

土器４（Fig. 14・25）

Ｄ－４区を中心に分布する。垂直方向には、上下50cm程の幅が見られる。

器形は、口縁部が直になる円筒形で、口唇部は半円形に近い。外面の調整は、縦・横の両方向の貝殻条痕である。縦方向の後に横方向になされたと見られる。内面はナデ。外面には二次的火熱を受けた痕跡が認められる。

土器５（Fig. 13・25）

B－３区で出土している。２片のみであるが、土器１より下位で出土している点が注目される。

１は口縁部で、外面にナデ（貝殻条痕をナデ消したものか）の後、貝殻腹縁刺突による連点文を斜位・横位に施す。また口唇部は内傾し、ここにも貝殻腹縁刺突による連点文を一列巡らせる。２も口縁部の近くで、貝殻条痕の後に、横位の同様の文様を施している。どちらも内面は丁寧なナデが施される。

土器６（Fig. 15・25）

F－３・４区の、遺跡内での最高所附近で出土している。平面的には、最大で約15mの間隔をもって分布する。レベル値はほぼ一定となる。

口唇部はやや角のとれた器形を呈し、口縁部外面に横位の貝殻腹縁刺突による連点文を５列にわたって巡らせる。胴部には、綾杉状の短沈線文を施す。胎土では、ウンモ（器表面では金色に光る）、長石と見られる白色粒など、花崗岩質の土壌に起因する混入物の存在が注目される。

土器７（Fig. 16・26・27）

C・D－２・３区に散在する。20は、約20m離れた３つの破片が接合したものである。出土層位は、Ⅳ層上部～中部に集中する。18はⅢ層下部からの出土である。

器形は、１に見るように口縁下部で若干内側に屈曲する。口唇部は、あまり明瞭ではないが平坦部を形成する。外面の文様を見ると、貝殻腹縁によると考えられる３～５条単位の平行沈線文を斜位に施文しているが、口縁部～胴部では連続して鋸歯状に、底部近くでは非連続の同一方向の施文になるようである。内面調整はナデで、20は炭化物の付着が見られる。

土器８（Fig. 16・27）

C・D－２区の北側と、D－４区から出土している。いずれも小破片である。

文様は、斜位の細かい平行沈線文を密に施すもので、施文原体はヘラ状のものであろうか。内面は丁寧なナデが施される。胎土中にはウンモが少量混入している。

土器９（Fig. 16・28）

C－２区を中心に分布する。土器７と分布域が重なる。出土層位、レベル値にはかなりのばらつきがあり、３はⅢ層、１、５、７、８、11、12はⅣ層下部出土である。

器形は、輪切りにした断面形が正方形を呈する、いわゆる角筒土器で、口縁部は波状になる。口唇部には細かい刻みが施される。器壁は薄く５㎜程度である。外面は、まず貝殻条痕

による調整がなされていることが５などから観察できるが、ナデ消されたためか全体に不明瞭である。その後、縦位の貝殻腹縁刺突文を平行に、かつ密に施す。四隅の稜線の部分には、横位の貝殻刺突文が付される。内面調整は、剥落しているものが多く明瞭でないが、粗いナデと観察される。胎土は花崗岩質で、ウンモ、長石の粒子を含む。

土器10（Fig. 29）

２破片が、C・D－２区より出土している。底部は不明であるが、椀形のものであろう。外面は横・斜位の工具によるナデ調整で、細かい条線の痕跡が残る。内面は丁寧にナデがなされる。焼成は極めて良好で、かたく仕上がっている。

土器11（Fig. 29）

C－５区の調査区の端部で出土したもので、外面には調整痕、文様とも認められない。無文土器の口縁部と見られる。

土器12～14（Fig. 29）

いずれも平底の底部である。12がD－４区、13がC－２区、14がD－５区出土である。外面文様は不明である。

土器15（Fig. 15・29）

F－４区とG－４区の区境で出土している。レベル値は６と近似する。

塞ノ神式土器と分類されているもので、口縁部が外側に屈曲し、胴部がやや張る器形を呈する。口唇部外側の稜に刻みを、屈曲部以上の口縁部に４列の連点文を施文する。胴部以下は網目状撚糸文で、沈線による区画はない。施文原体は、１段Ｌを左巻き後右巻きに巻きつけたもので、軸の径は２㎜程度と推定される。内面調整は、屈曲部以上は丁寧なナデ、以下は横位の工具ナデとなる。

土器16（Fig. ８・30）

D－２区からC－３区にかけて分布するが、特にC－１杭付近の１号集石の周辺に集中している。とは言うものの、１号集石の礫の在り方と同様に、まとまりなく分布するという状況である。土器７・８の分布範囲と概ね重なる。

口縁部は若干外反する。胴部はわずかに張ることが確認できるが、底部は不明である。口唇部は先細りで、丸くおさまる形状で、外面はナデ、内面は原体条痕が施される。以下は、外面が横・斜方向の山形押型文、内面が同様の山形押型文とナデ調整となる。

土器17（Fig. 17・31・32・33）

D－３・４を中心に分布する。２号集石をはさんで広範囲に広がっており、20m程離れた破片の接合例がある。レベル値も高低の差が大きい。

器形を見ると、口縁部の外反、胴部の張りともわずかで、ほぼ直行する。口唇部は、狭小な平坦面を形成し、ヨコナデ調整がなされる。外面には横方向の山形押型文が、内面はナデ

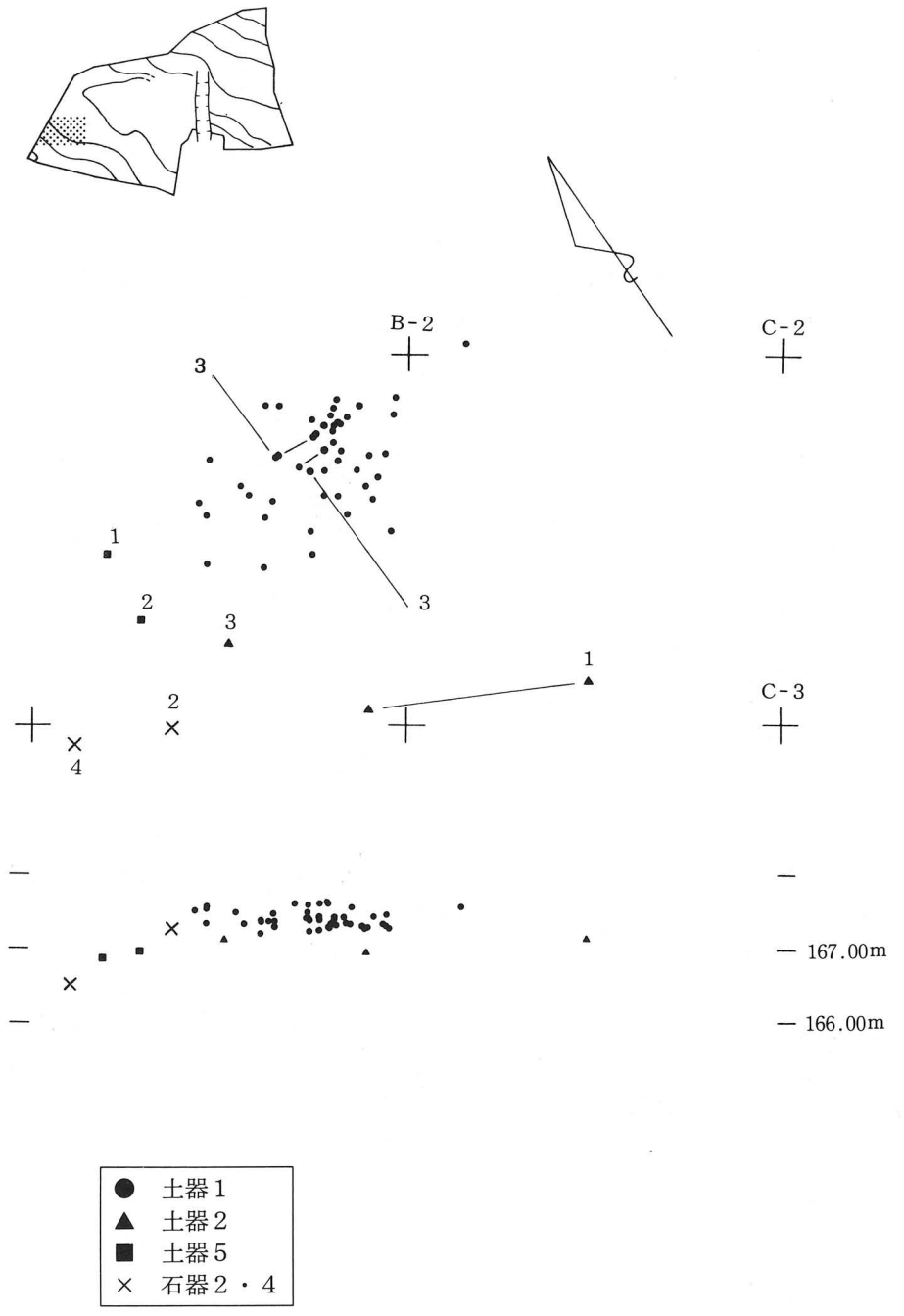


Fig. 13　遺物分布図(1)（1／200）

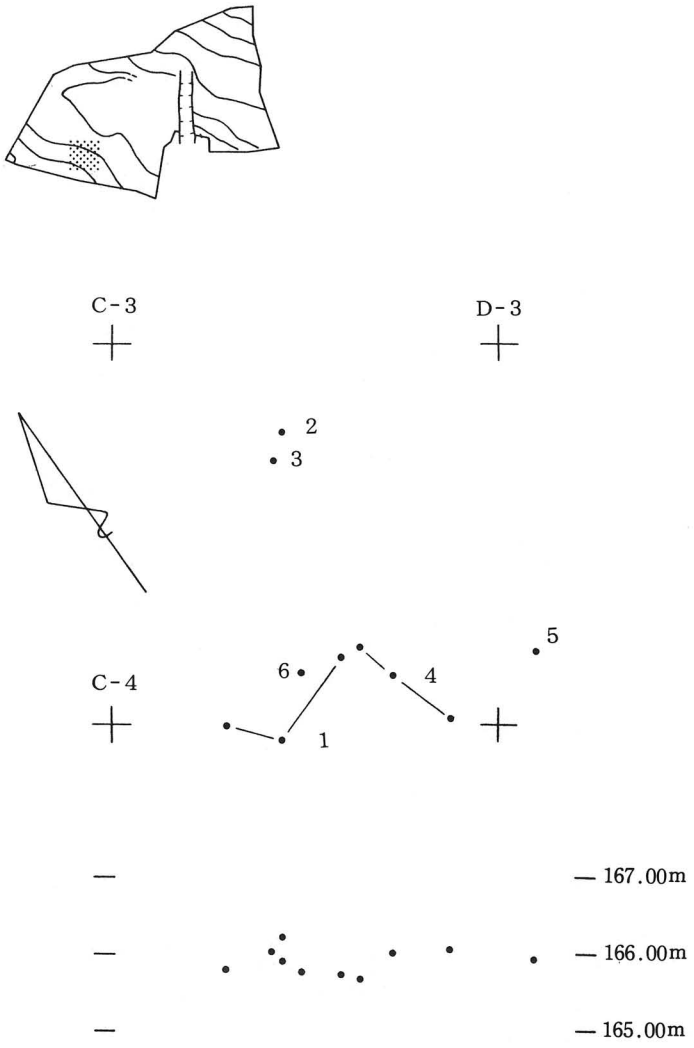


Fig. 14　遺物分布図(2)（1／200）

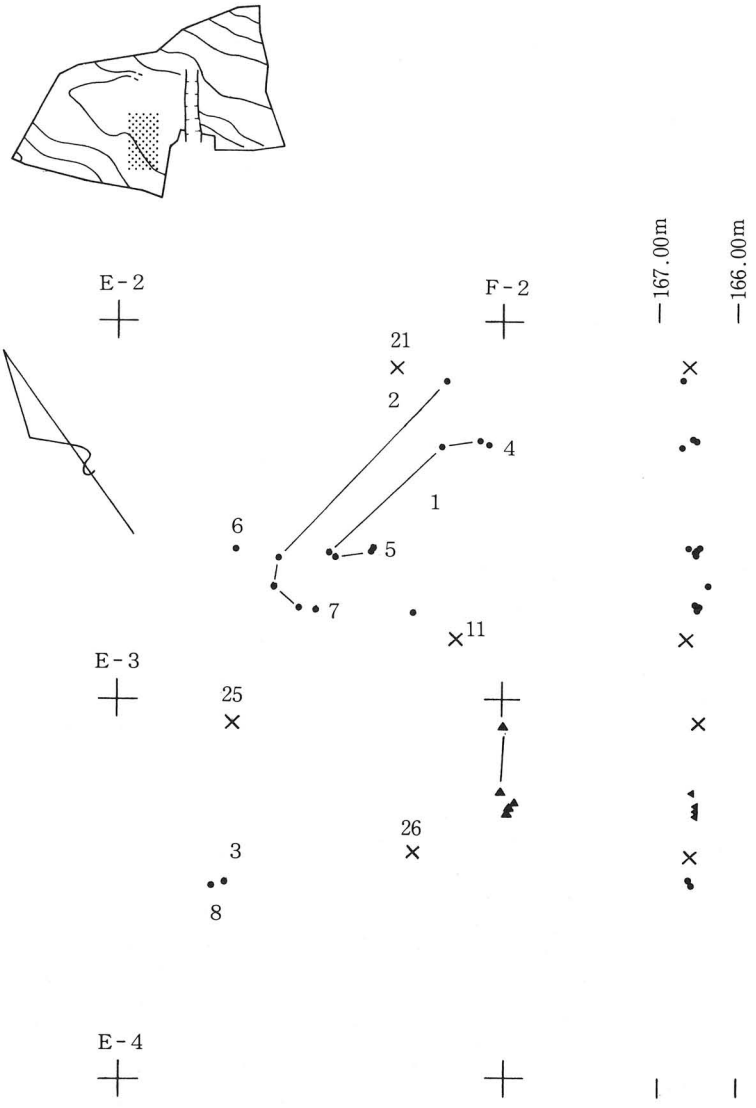


Fig. 15　遺物分布図(3)（1／200）

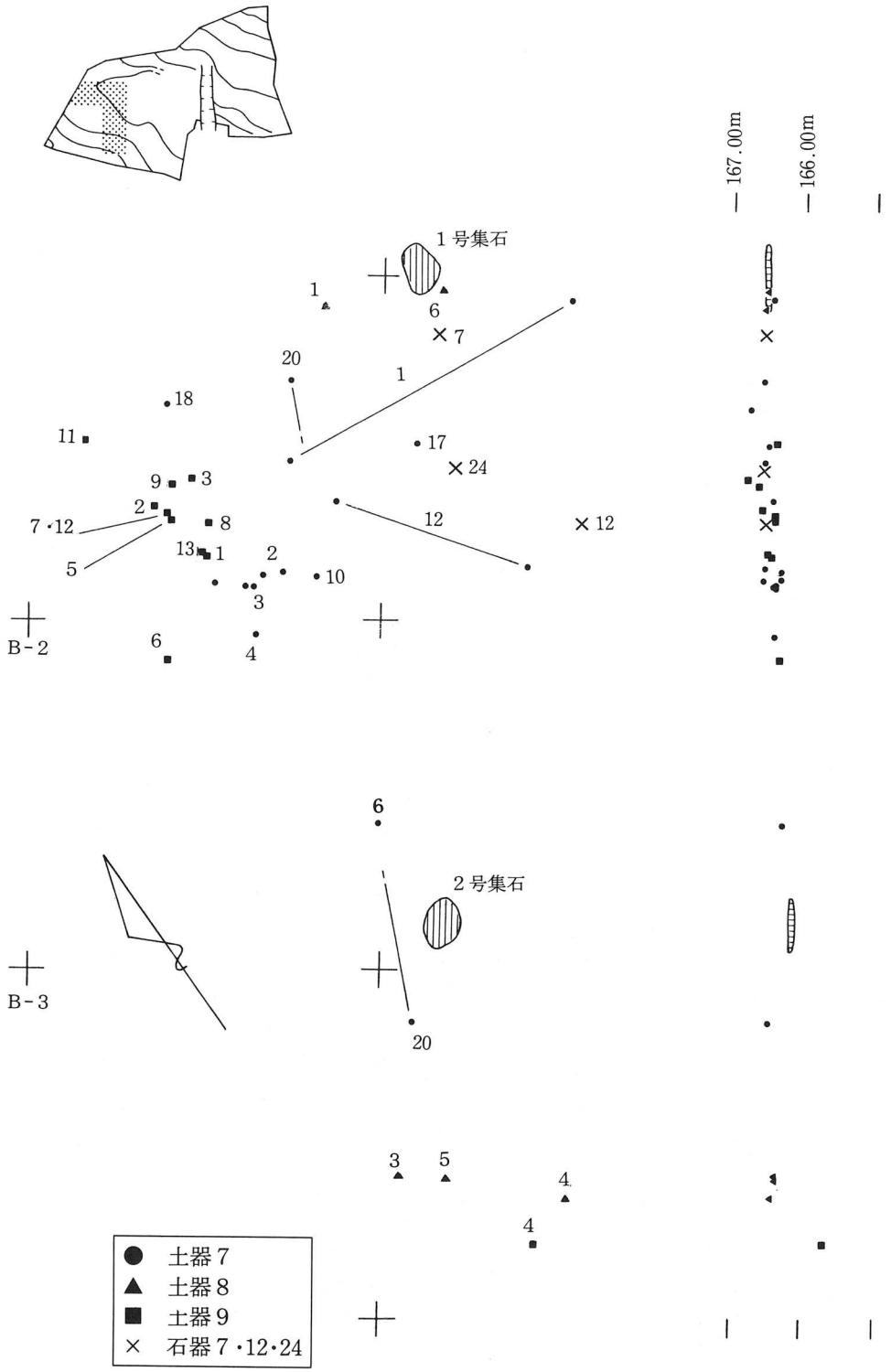


Fig. 16　遺物分布図(4)（1／200）

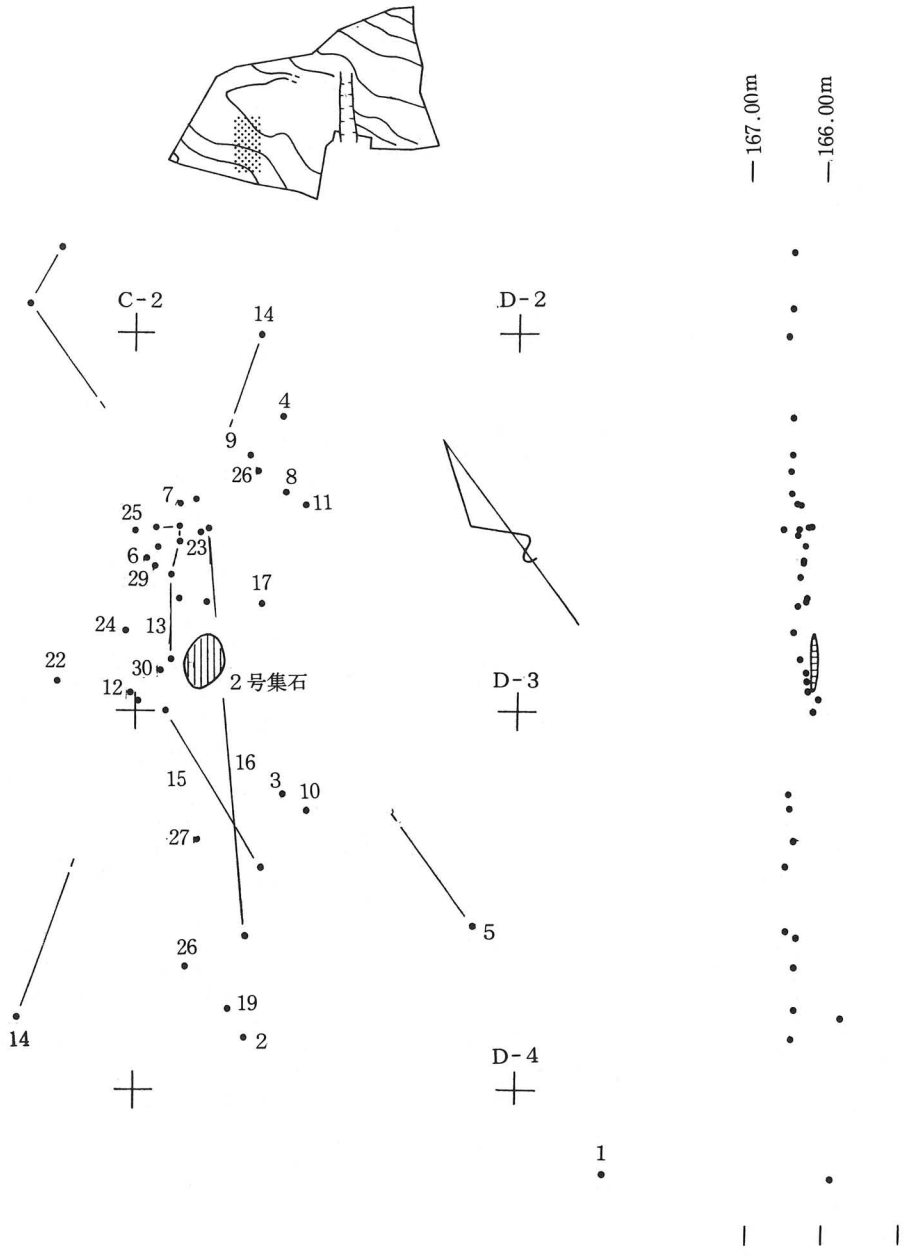


Fig. 17　遺物分布図(5)（1／200）

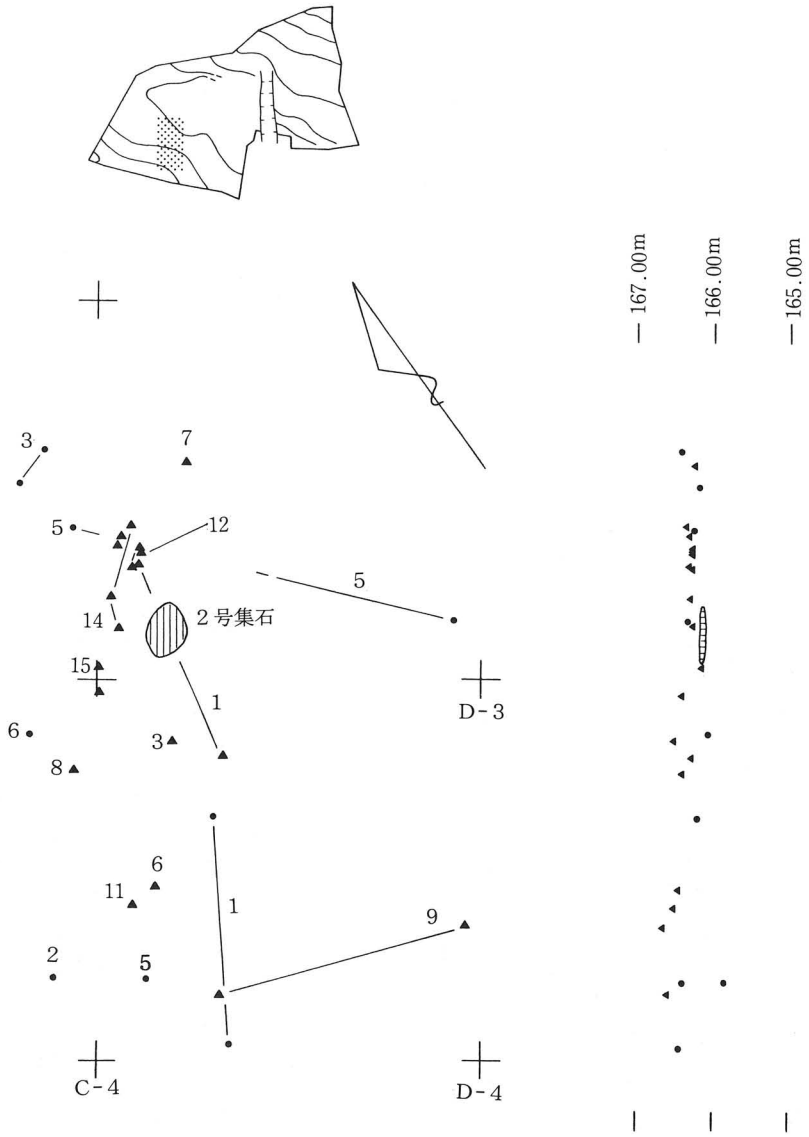


Fig. 18　遺物分布図(6)（1／200）

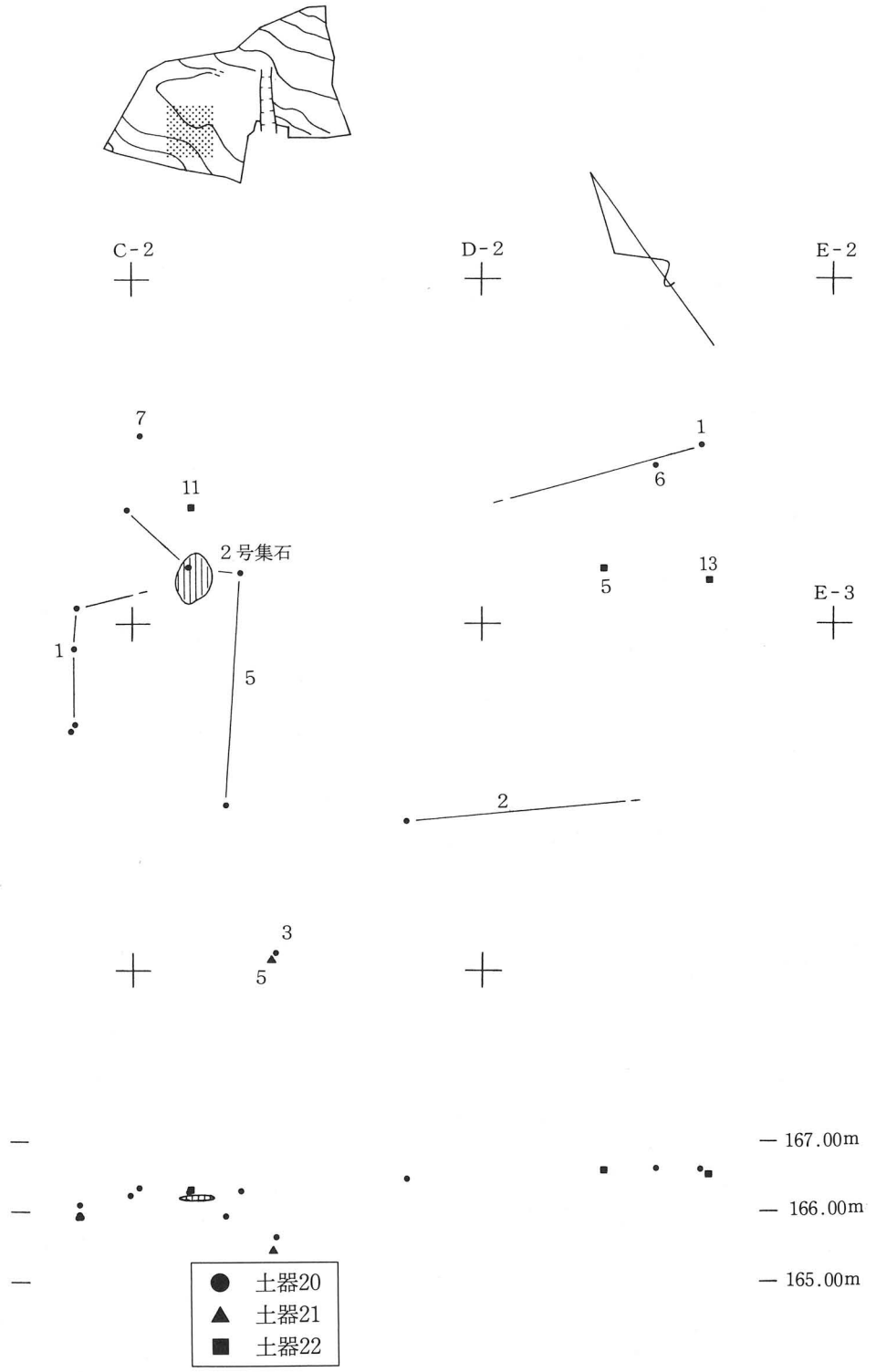
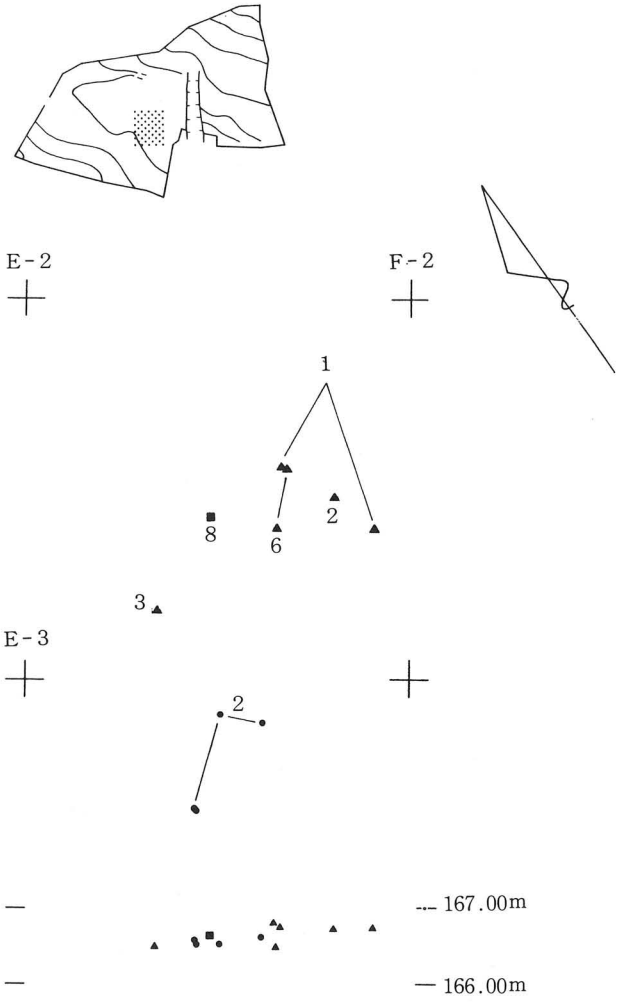


Fig. 19　遺物分布図(7)（1／200）



● 土器20
▲ 土器21
■ 土器22

Fig. 20　遺物分布図(8)（1／200）

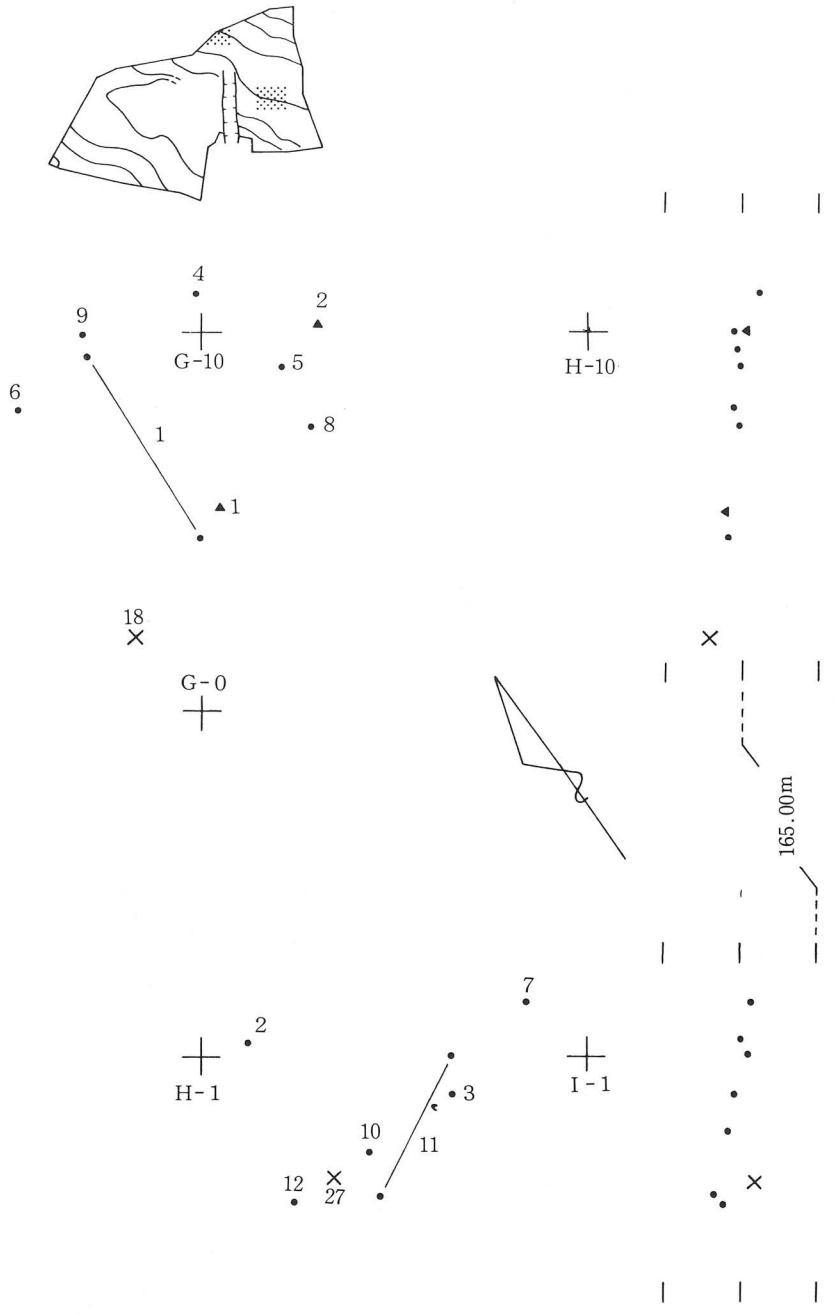


Fig. 21　遺物分布図(9)（1／200）

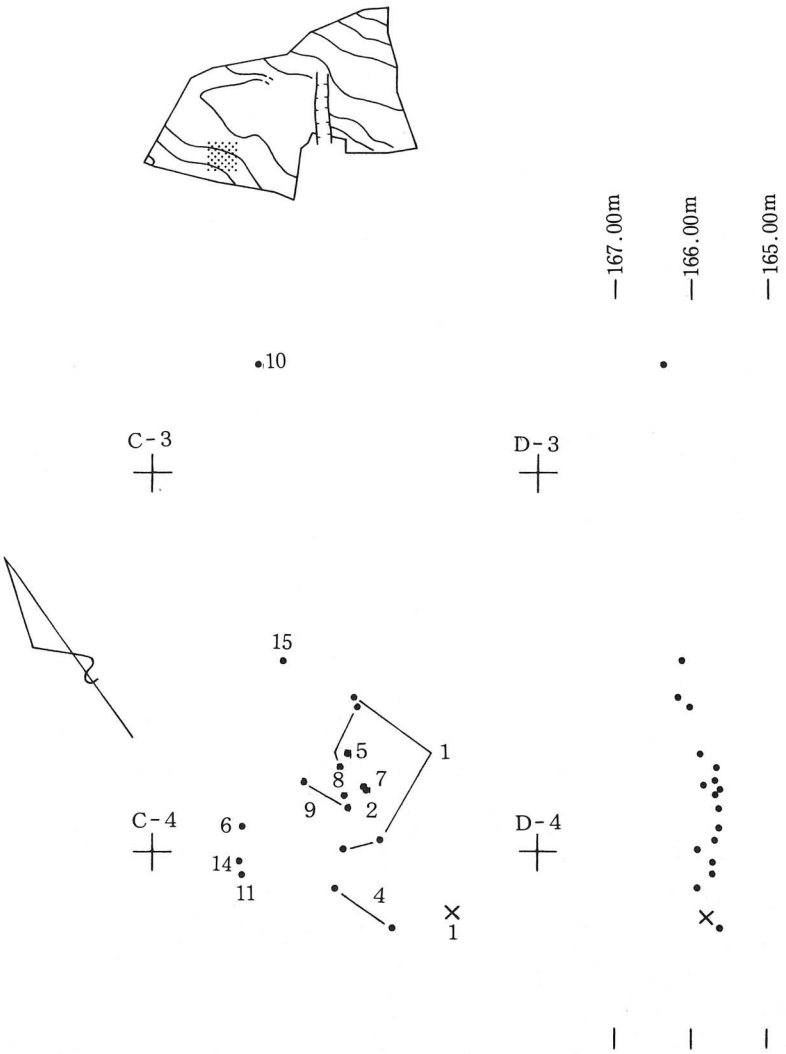


Fig. 22　遺物分布図(10)（1／200）

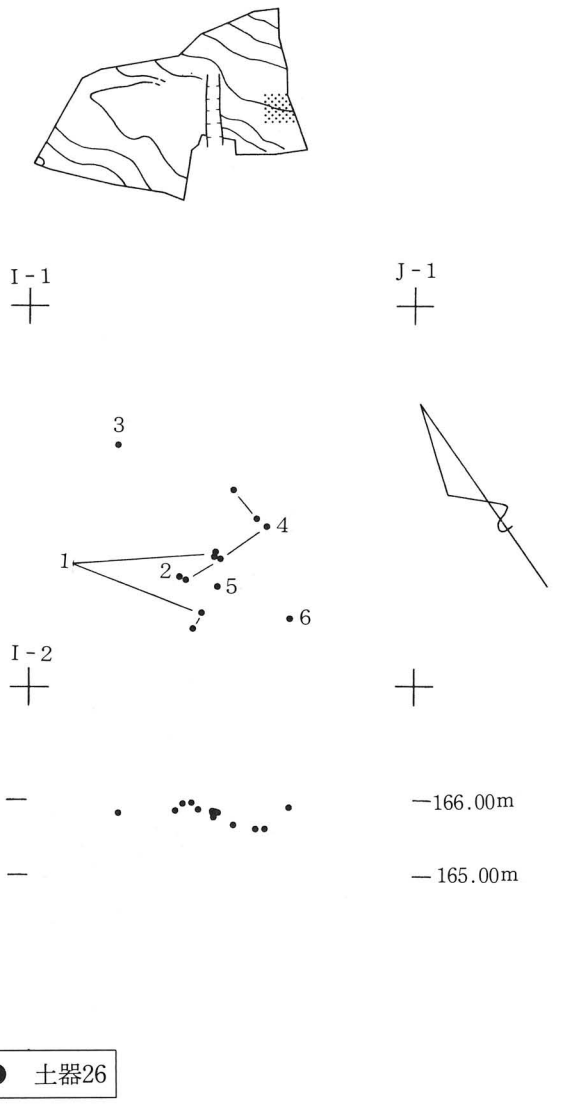


Fig. 23　遺物分布図（10）（1／200）

（補）
1．平面分布図、垂直分布図とも、ドットは遺物の中心点を示す。
2．平面分布図：垂直分布図＝1：2としている。

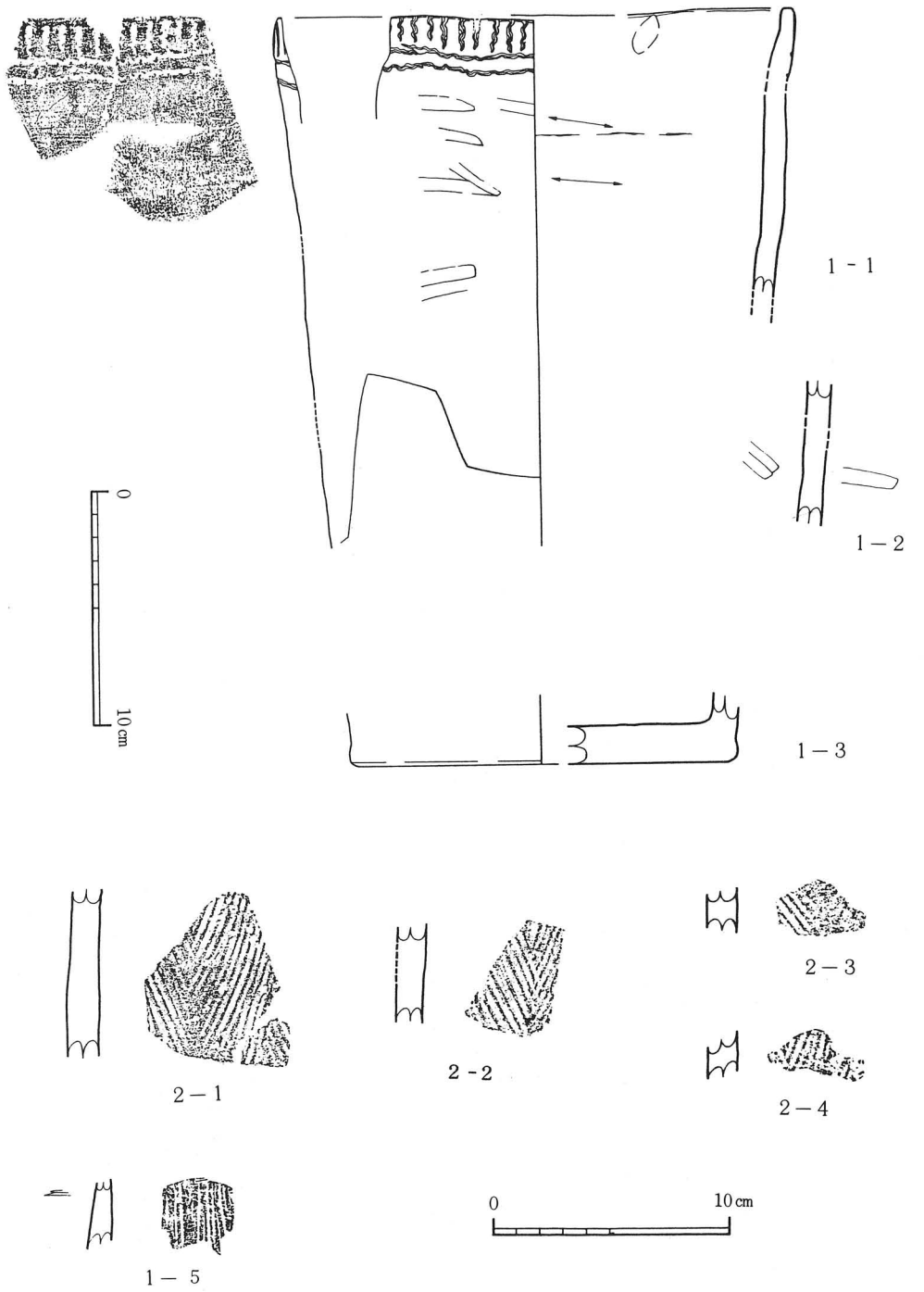


Fig. 24　土器実測図 (1)（1／3）

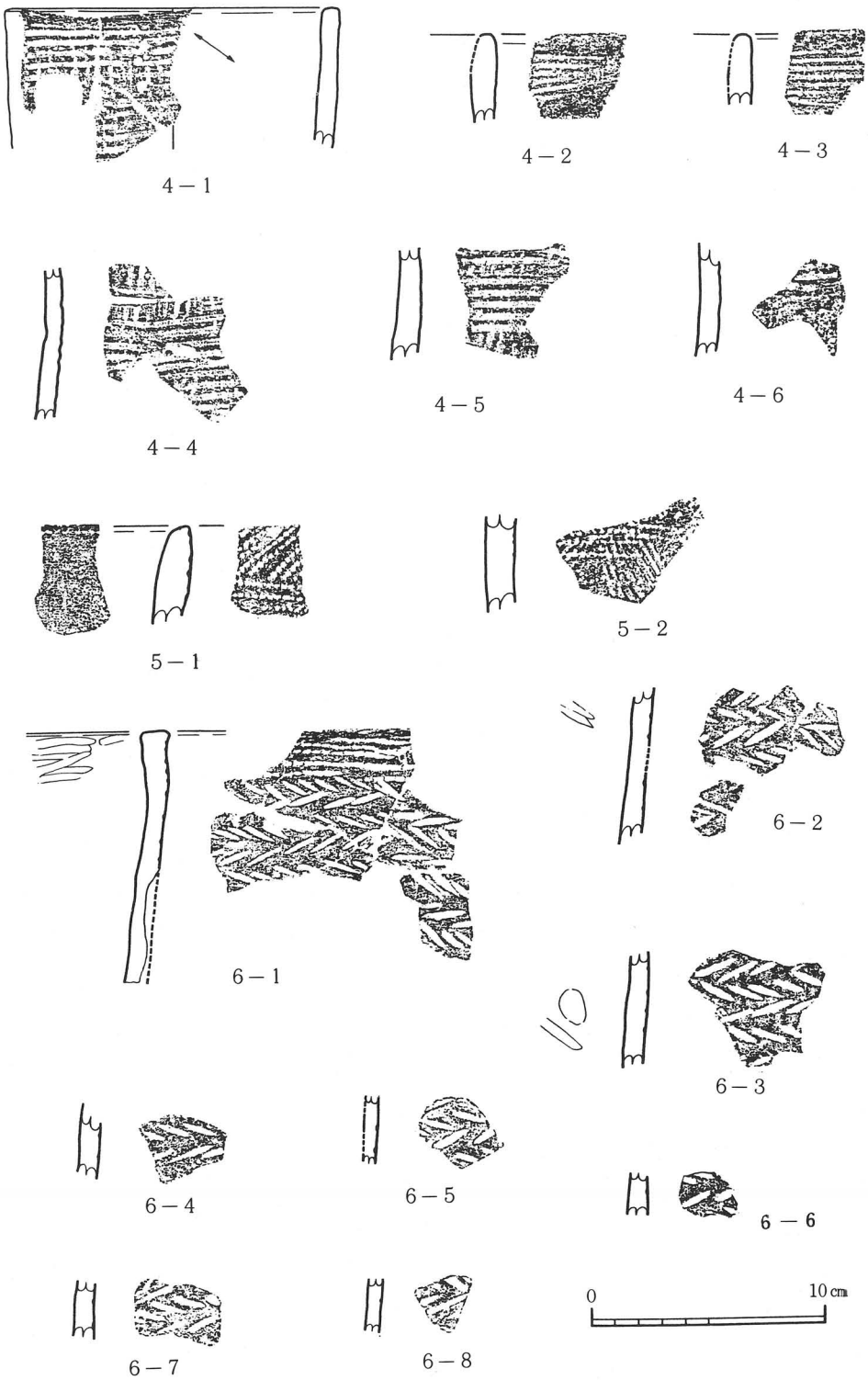


Fig. 25　土器実測図(2)（1／3）

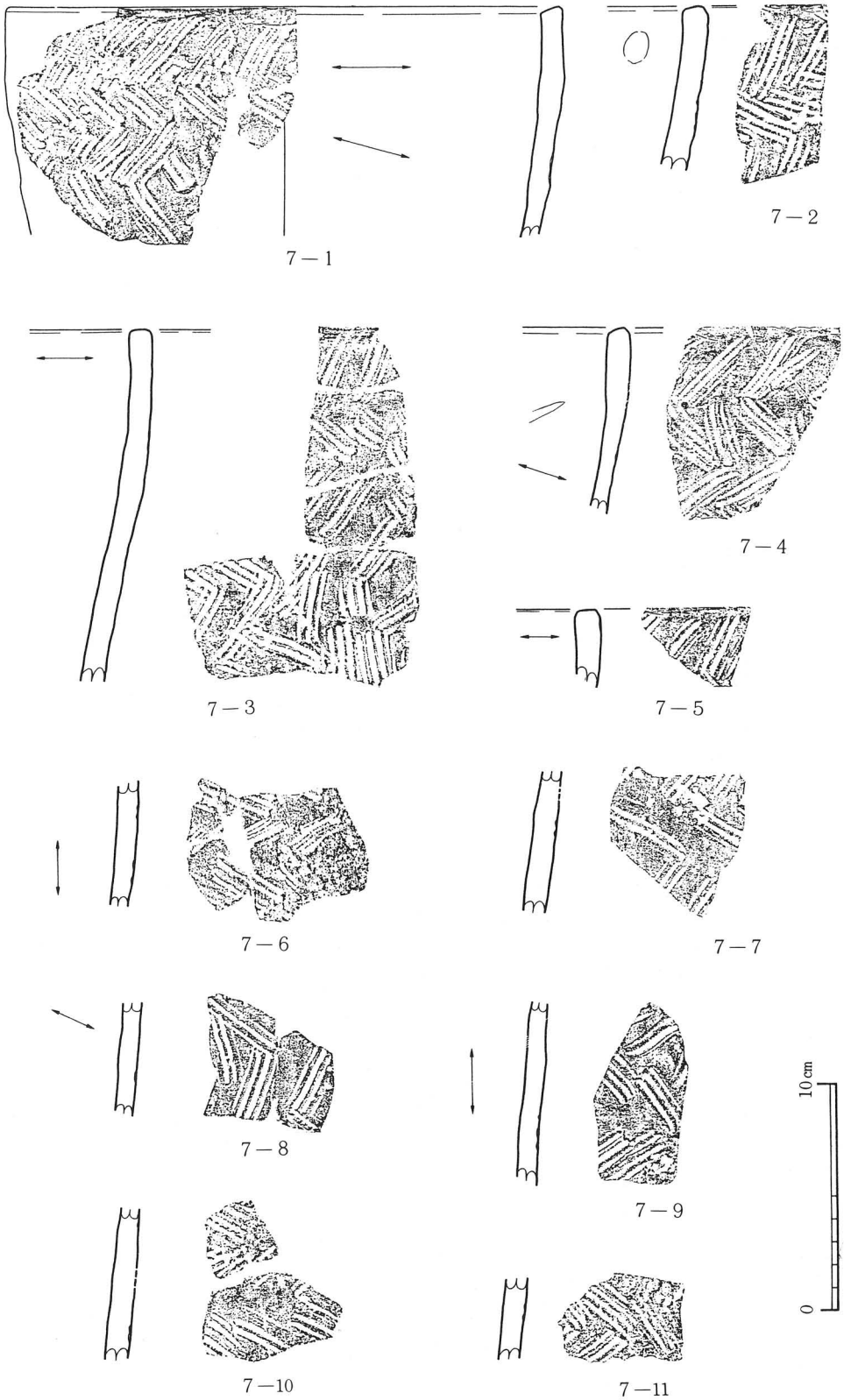


Fig. 26　土器実測図 (3) (1／3)

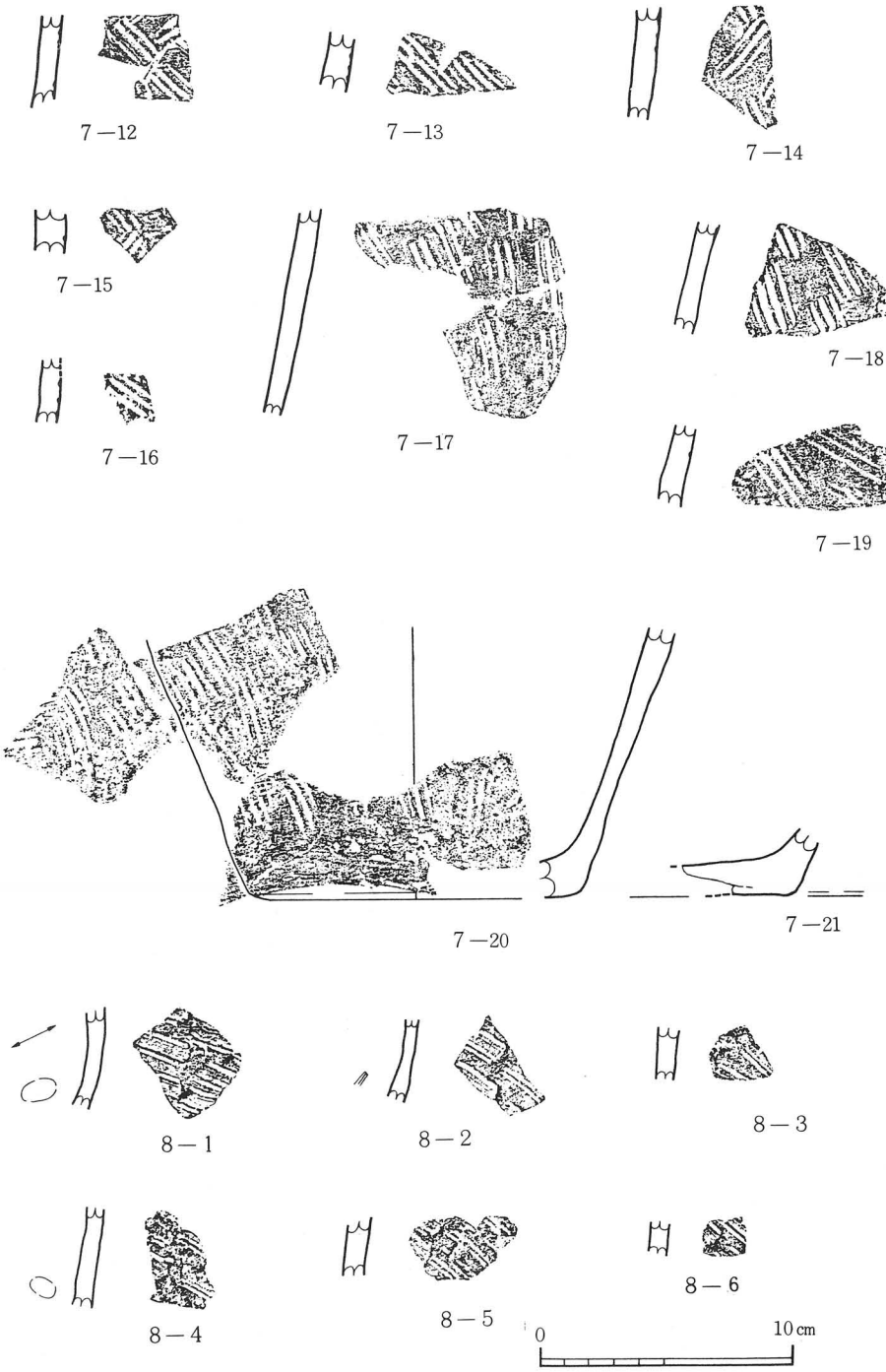


Fig. 27　土器実測図(4)（1／3）

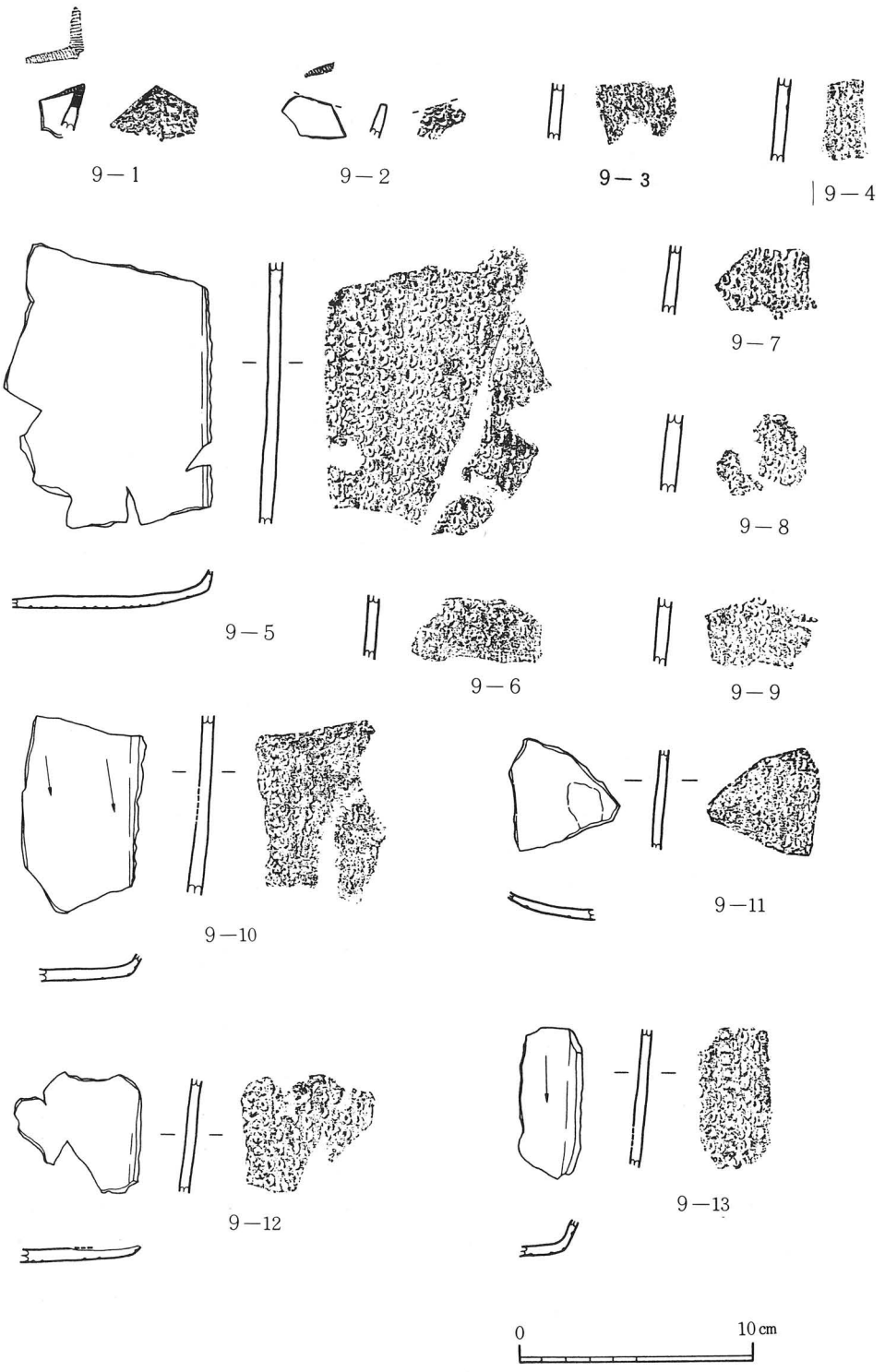


Fig. 28　土器実測図 (5)（1／3）

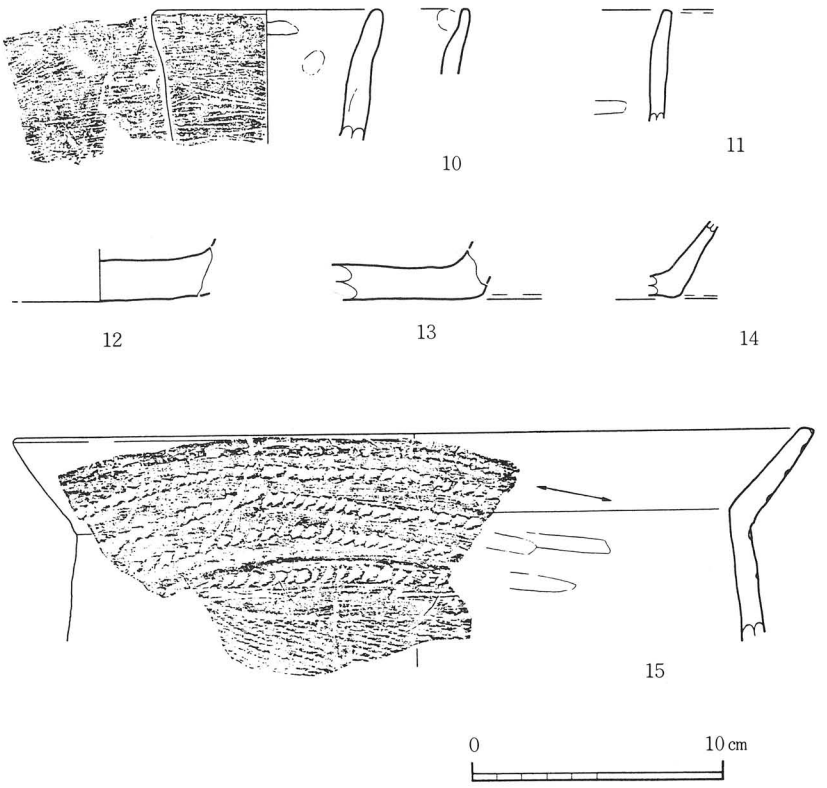


Fig. 29　土器実測図(6)（1／3）

が施される。尚、6には穿孔が見られる。

土器18（Fig. 18・23）

C・D-3・4区に散在する。土器17と分布域が重なり、押型文、色調、胎土等の特徴も土器18に似るが、山形の頂部がよりシャープである。口縁部、底部の出土はない。

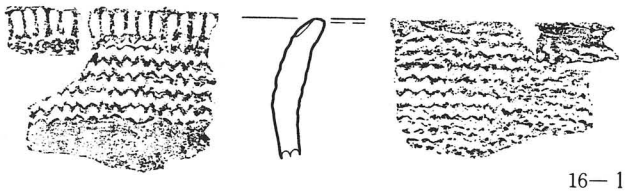
土器19（Fig. 18・34）

D-3・4区を中心に分布する。これも土器17・18と分布域が重なる。レベル値もそれらと大差はないが、かなりの高低差が認められる。

1～3が口縁部で、若干外反している。底部はないが、15の様子から平底と推定される。6には穿孔がなされている。外面には横方向の山形押型文が施される。

土器20（Fig. 19・20・35）

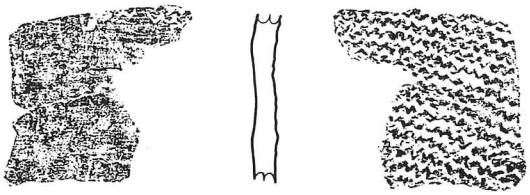
C～F-3・4区に広く分布する。2はD-2区とF-4区の破片が接合したものである。垂直方向の高低の幅も大きい。Ⅲ層出土の破片もある。



16—1

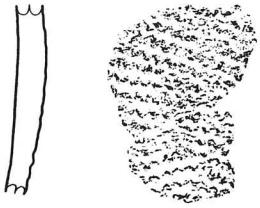
16—2

16—3



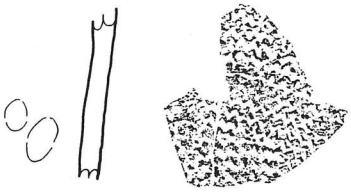
16—4

16—5



16—6

16—7



16—8

16—9

16—10

16—11

Fig. 30　土器実測図(7)（1／3）

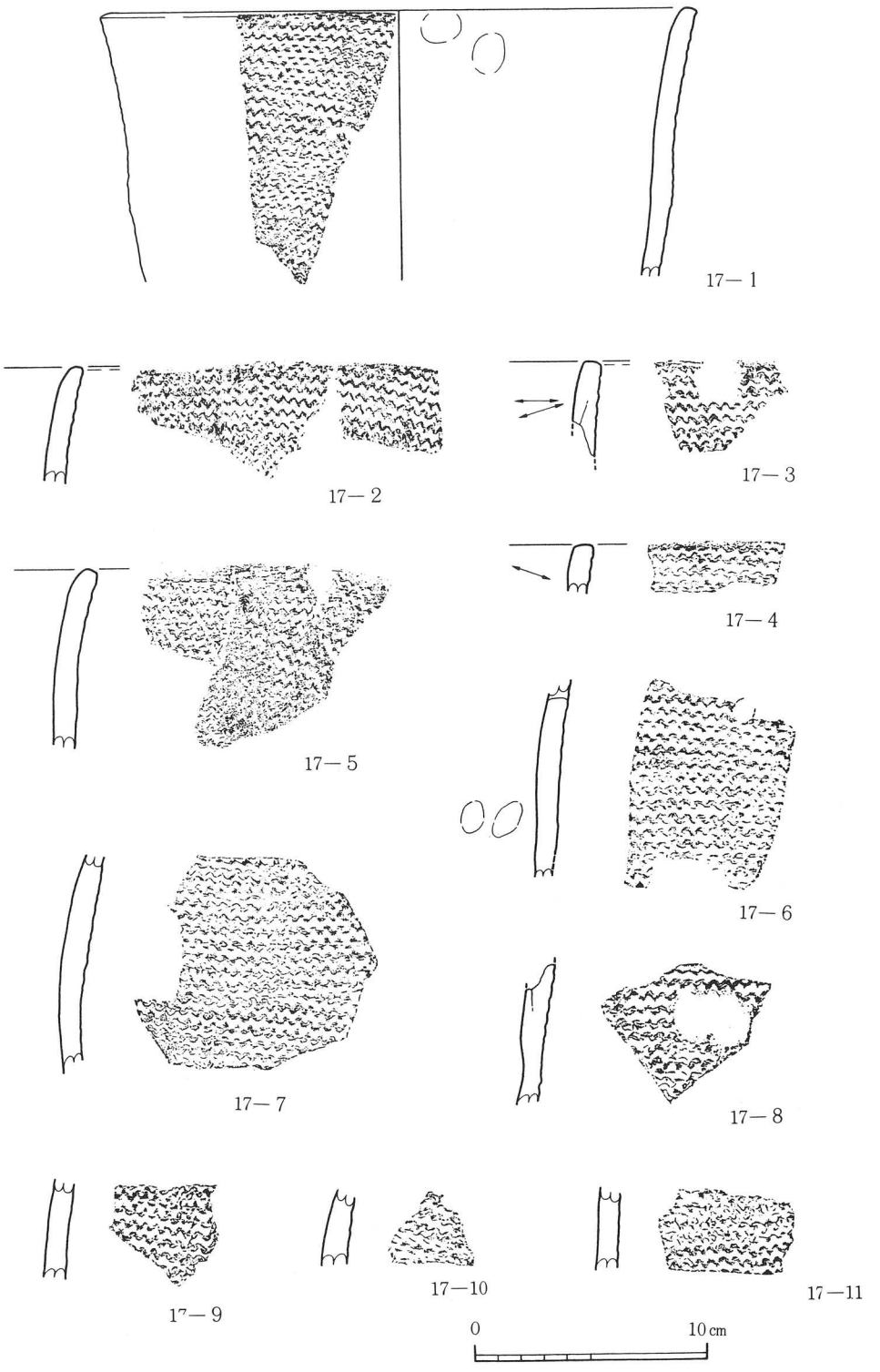


Fig. 31　土器実測図(8)（1／3）

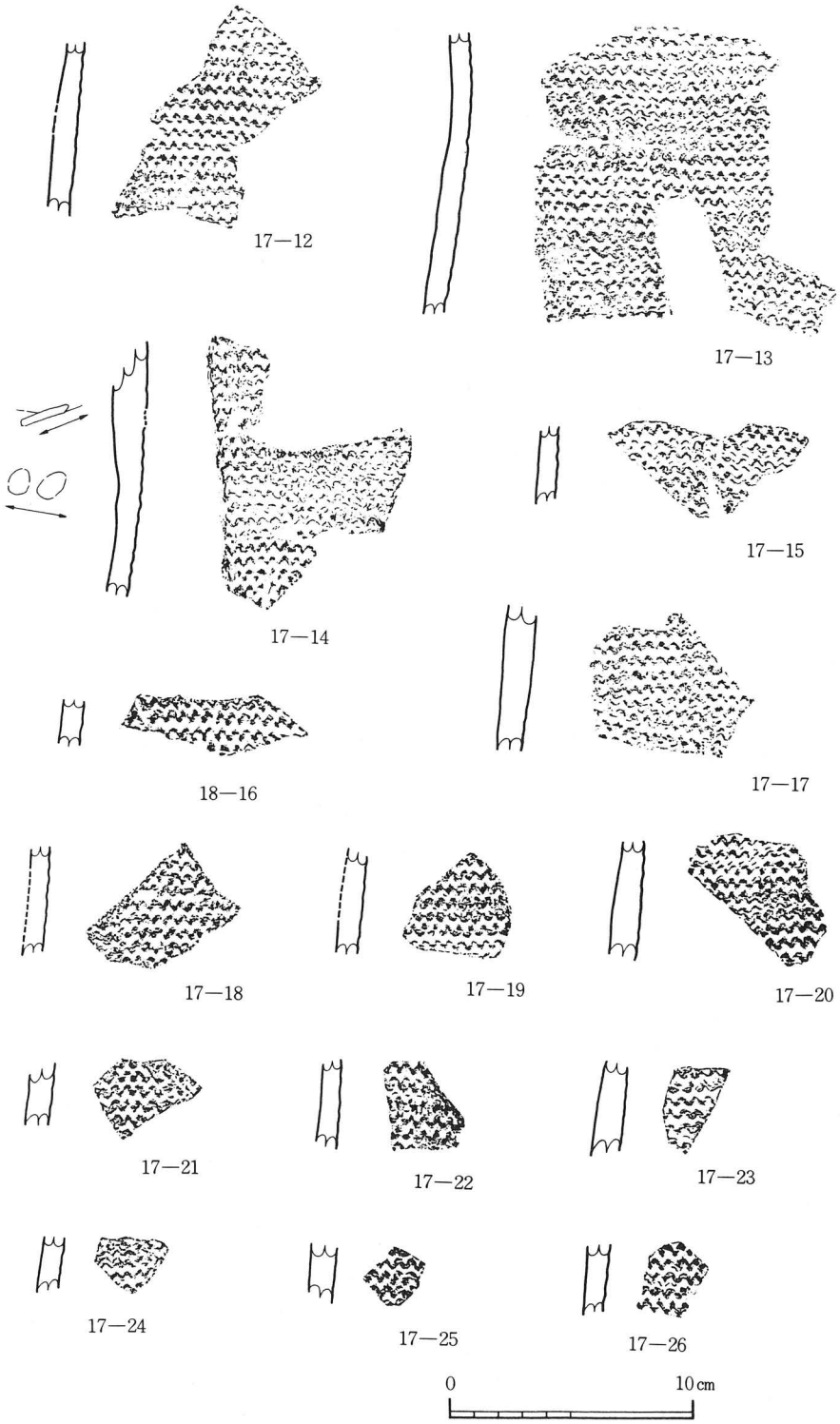
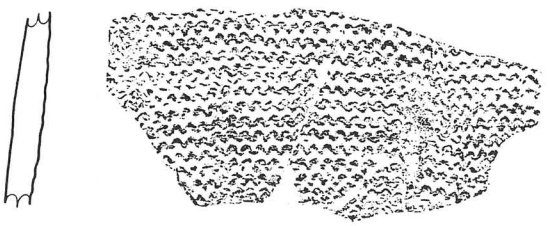
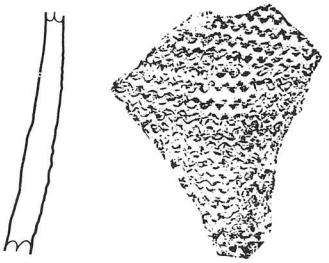


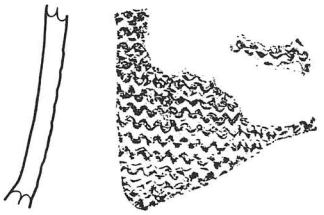
Fig. 32　土器実測図 (9) (1 ／ 3)



17—27



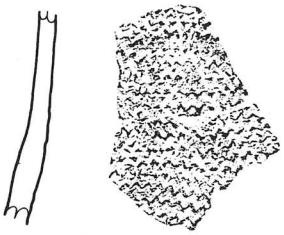
17—28



17—29

17—30

17—31

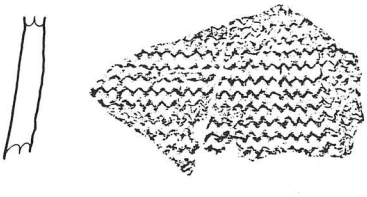


18— 1

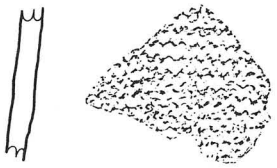
18— 2

18— 3

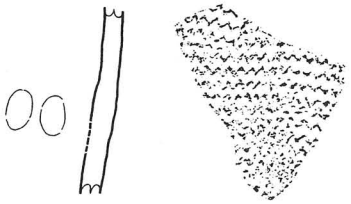
18— 4



18— 5



18— 6



18— 7

Fig. 33　土器実測図 (10)（1／3）

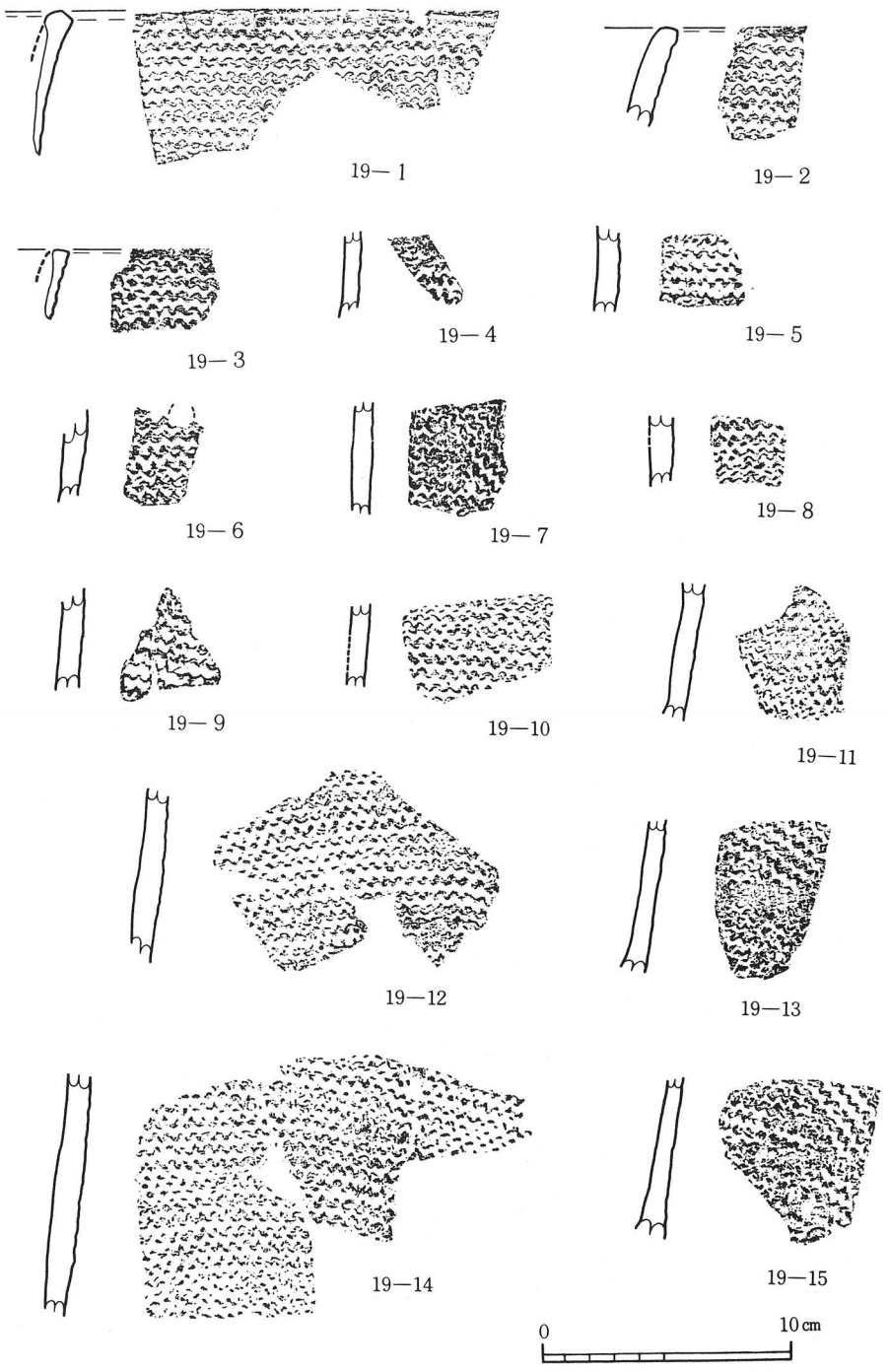
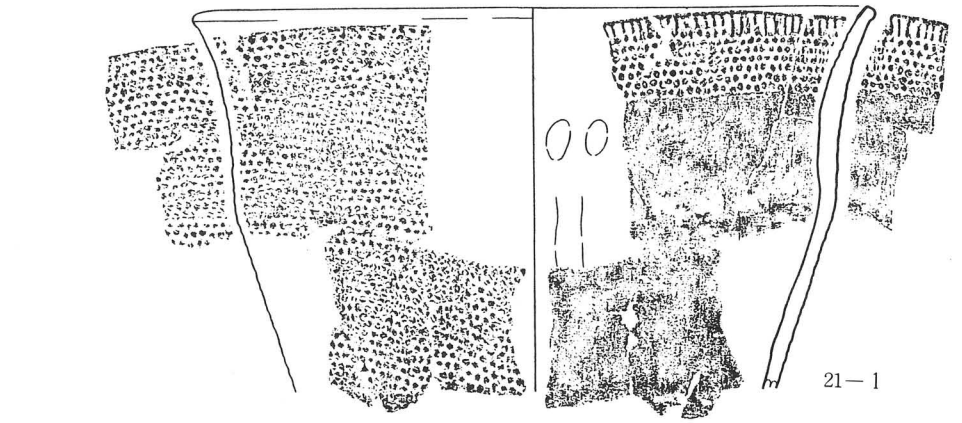
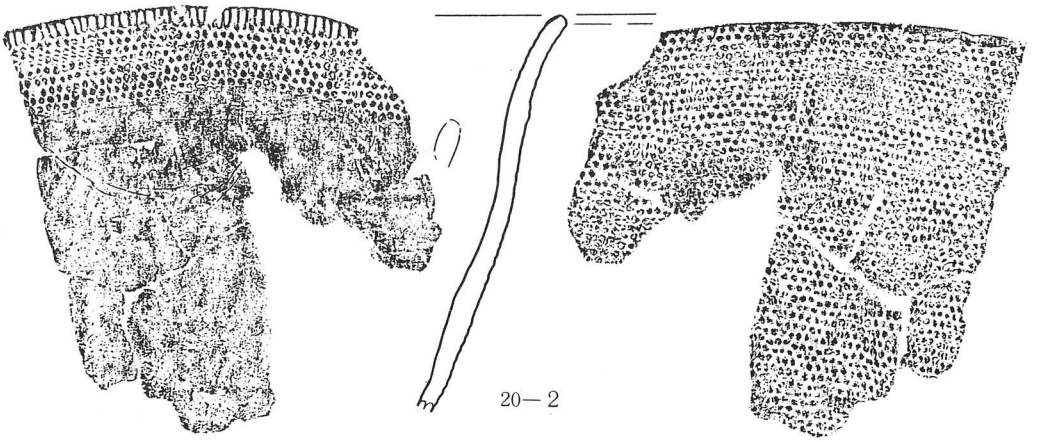
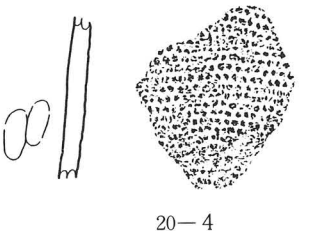


Fig. 34　土器実測図 (11)（1／3）







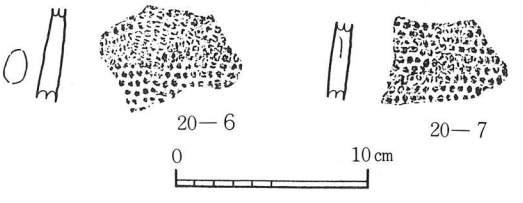


Fig. 35　土器実測図 (12)（1／4）

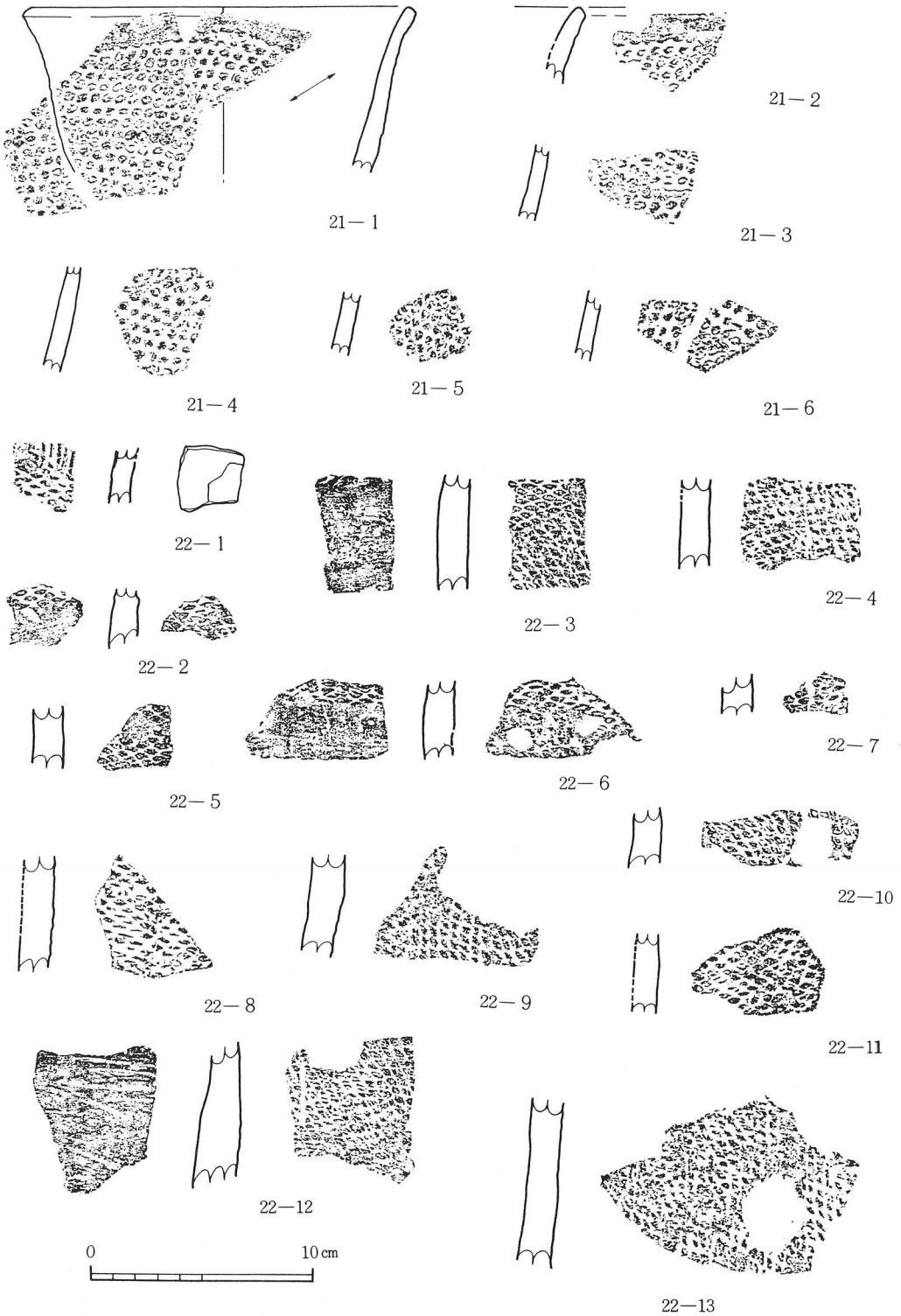


Fig. 36　土器実測図 (13)（1／3）

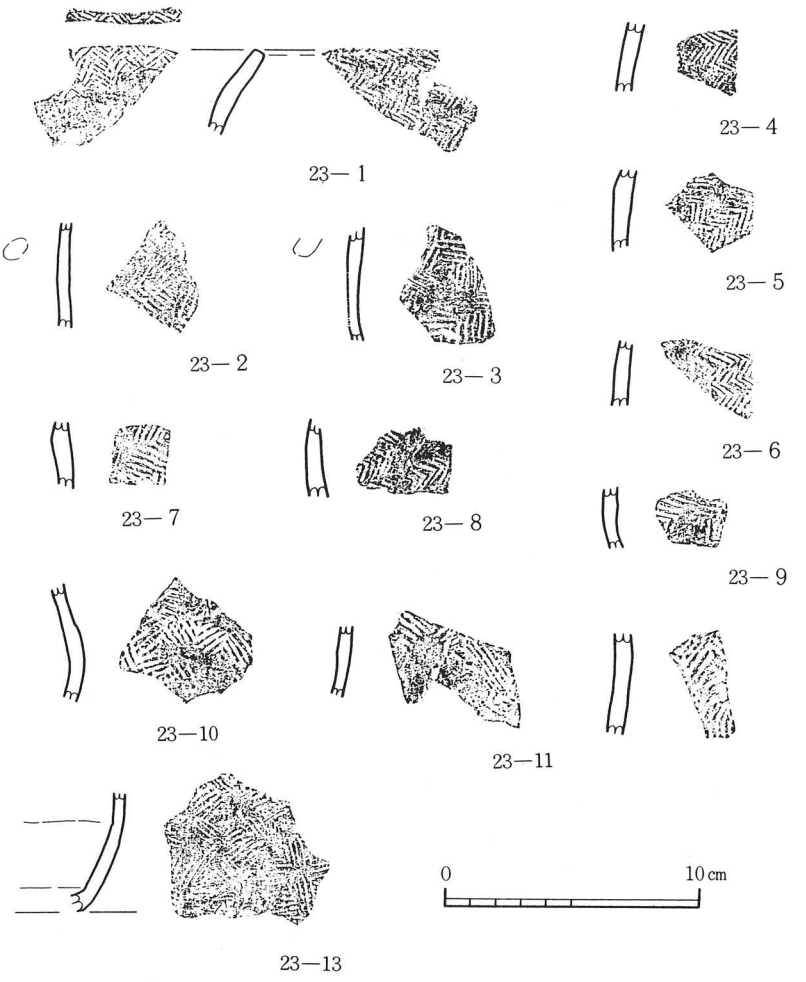


Fig. 37　土器実測図 (14)（1／3）

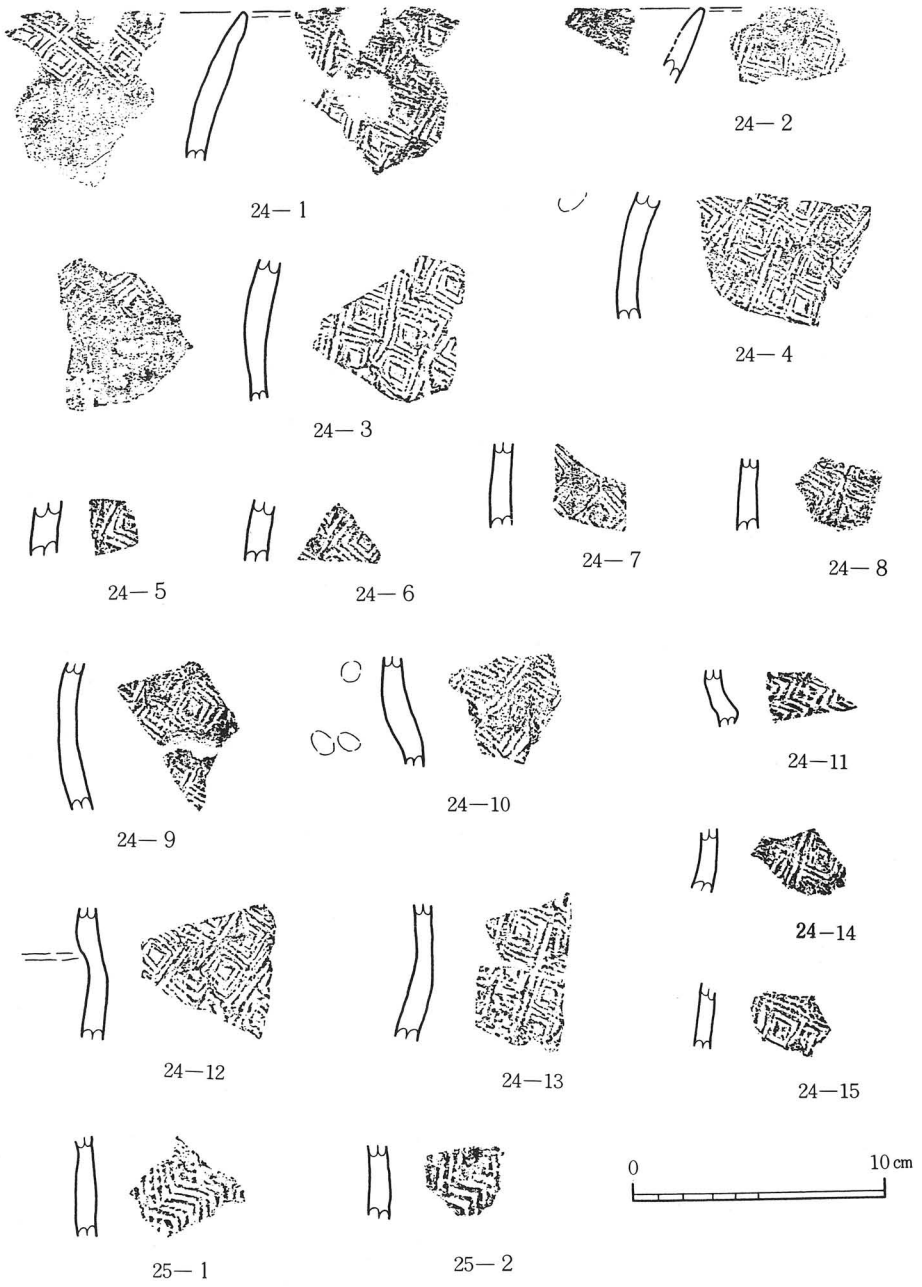


Fig. 38　土器実測図 (15)（1／3）

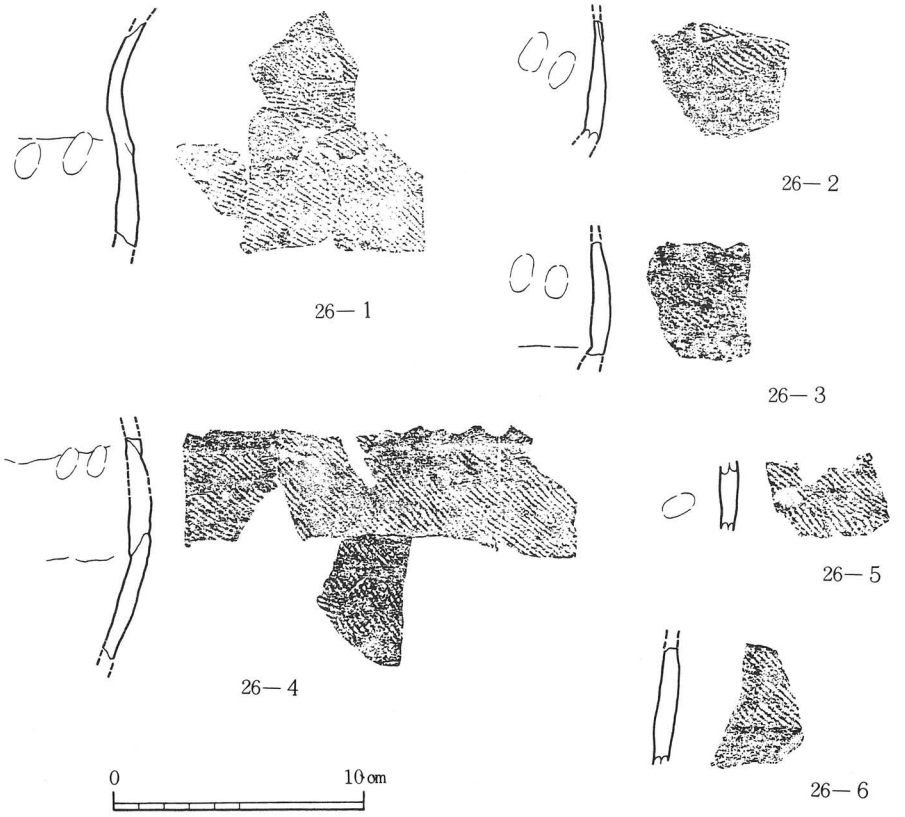


Fig. 39　土器実測図 (16)（1／3）

1・2は口縁部の比較的大きな破片である。口縁部は外反し、胴部がわずかに張る器形を呈する。口唇部はほぼ丸くおさまり、内面には原体条痕が付される。外面と、内面の口縁部には横方向の楕円押型文が施される。内面の胴部以下には指頭によるナデの痕跡が残る。胎土は花崗岩質で、ウンモが混入する。尚、Fig. 35のみは縮尺1／4であり要注意。

土器21（Fig. 19・20・36）

D-4・E-2・F-3区に広く分布する。土器20と分布城が重なる。

横・斜方向の楕円押形文土器で、ごくわずかに口縁部は外反し、胴部が張る。口唇部はヨコナデが施され、平坦面を形成する。内面はナデ調整がなされる。

土器22（Fig. 19・20・36）

B～E-2・3区で出土しており、土器20・21と分布域が重なる。

1は口縁部で、内面に原体条痕が見られる。外面は、口縁部上部を除いて横方向の楕円押型文が施される。厚手で、器形は円筒形になると推測される。

土器23（Fig. 21・37）

G・H-0区とI-2区の2つの集中区がある。ただし、底部の13のみB-4区と、離れた地点で出土している。層位的にはⅣ層上部から多く出土している。

口縁部が大きく外反し、胴部が張る器形で、13に見るように平底となる。文様は、口唇部、外面、内面の口縁部、および平坦になる口唇部に浅めの山形押型文が施される。施文の方向は、外面が縦（部分的に横の箇所有り）、口唇部と内面が横である。胎土は花崗岩質で、ウンモが混入する。

土器24（Fig. 22・38）

D-3～5区に分布する。レベル値は高低の差が大きい。器形は23と同様のものであろう。また、施文部位も23に似る。ただし胎土中のウンモの混入は認められない。外面と内面の口縁部に菱形を呈する押型文が施される。

土器25（Fig. 21・38）

2片のみであり、土器23の分布域中に混在している。外面に縦方向の山形押型文を施すものである。

土器26（Fig. 23・39）

調査区の南東隅のJ-2区に分布する。付近は遺物の分布が疎なところである。

口縁部が外反し、胴部が張る器形のようであるが、口縁部と胴部下半部から底部にかけてが欠けているため、全体像は不明である。胴部の最大径付近から上は外傾、下は内傾、頸部以上は内傾に接合していった様子が窺える。外面には、横位の1段Rの縄文が施される。原体の長さは1㎝程度と見られる。内面には接合痕、指頭痕が明瞭に残る。また、胎土は花崗岩質で、ウンモを含むことも特徴として挙げられる。

※　出土位置を別図で示したものについては、出土区の欄は○としている。
　　部位は口縁部、底部のみ示しており、それ以外は胴部片である。

Tab. 1　土器観察表 (1)

番号	出土区	部位	調整および文様		胎土	色調		備考
			外面	内面		外面	内面	
1-1	○	口縁～胴部	口縁部　貝殻腹縁刺突文 粗いナデ	ナデ	5㎜程度の赤褐色粒	にぶい黄橙 橙	黄橙 にぶい橙	Ⅲ層出土のものあり 胴部下半　二次的火熱を受け赤変
1-2	○		粗いナデ	同上	5㎜程度の赤褐色粒	にぶい黄橙 橙	黄橙 にぶい橙	
1-3	○	底部	ナデ？	ナデ？	5㎜程度の赤褐色粒	橙	橙	
2-1	○		綾杉状の貝殻条痕	丁寧なナデ	1～3㎜の黄橙色粒	橙	にぶい赤褐 赤灰	
2-2	D-4		同上	不明	1～3㎜の黄橙色粒	橙	暗赤灰	
2-3	○		同上	丁寧なナデ	1～3㎜の黄橙色粒	にぶい橙	橙	
2-4	B-4		同上	同上	1～3㎜の黄橙色粒	橙	にぶい赤褐	
3	不明		縦位の貝殻条痕	丁寧なナデ	1㎜程度の透明粒	橙	灰褐	Ⅰ層出土
4-1	○	口縁部	縦位の貝殻条痕の後、横位の貝殻条痕　口唇部　ヨコナデ	ナデ	0.5～2㎜の灰白・褐灰・透明粒 黒色の光沢粒	浅黄橙	浅黄	外面　二次的火熱を受け赤変
4-2	○	口縁部	横位の貝殻条痕	不明	0.5～1㎜の灰白・褐灰・透明粒	浅黄	浅黄	
4-3	○	口縁部	同上	不明	0.5～1㎜の灰白・乳白色粒	淡黄	不明	
4-4	○		縦位の貝殻条痕の後　横位の貝殻条痕	ナデ	0.5～2㎜の黒・灰白・褐灰・ 灰褐色粒	浅黄橙	淡黄 灰黄	Ⅲ層出土のものあり
4-5	○		横位の貝殻条痕	同上	0.8～4㎜の乳白・灰褐色粒、黒色の光沢粒　0.5㎜～1㎜の透明粒	橙 にぶい黄橙	浅黄橙	
4-6	○		同上	同上	0.8～4㎜の乳白・灰褐色粒、黒色の光沢粒　0.5㎜～1㎜の透明粒	にぶい橙	にぶい黄橙	外面　二次的火熱を受け赤変
5-1	○	口縁部	斜位、横位の貝殻腹縁刺突文による連点文	丁寧なナデ	1㎜の半透明・乳白色粒 0.5㎜の黒色の光沢粒	にぶい黄橙	橙	
5-2	○		斜位の貝殻条痕の後　貝殻腹縁刺突文による連点文	同上	1㎜程度の乳白・黒・透明粒	橙	黄橙	
6-1	○	口縁部	ナデ後、横位の貝殻腹縁刺突文による連点文　綾杉状沈線文	口縁部　横位のミガキに近いナデ　ナデ	2㎜の白色粒、1㎜の黒色の光沢粒 2～3㎜の雲母	にぶい橙	橙	外面　スス付着
6-2	○		ナデ後　綾杉状沈線文	丁寧なナデ	2㎜の白色粒、1㎜の黒色の光沢粒 2～3㎜の雲母	にぶい橙	にぶい黄褐	
6-3	○		同上	同上	2㎜の白色粒、1㎜の黒色の光沢粒 2～3㎜の雲母	橙	にぶい黄橙	
6-4	○		同上	丁寧なナデ？	2㎜の白色粒、1㎜の黒色の光沢粒 2～3㎜の雲母	橙	にぶい黄橙	内面　炭化物付着？

Tab. 2　土器観察表（2）

番号	出土区	部位	調整および文様 外面	調整および文様 内面	胎土	色調 外面	色調 内面	備考
6-5	○		ナデ後　綾杉状沈線文	不明	2㎜程度の白色粒、1㎜程度の黒色の光沢粒　2～3㎜の雲母	にぶい橙	不明	
6-6	○		同上	丁寧なナデ	2㎜程度の白色粒、1㎜程度の黒色の光沢粒　2～3㎜の雲母	にぶい橙	にぶい黄褐	
6-7	○		同上	同上	2㎜程度の白色粒、1㎜程度の黒色の光沢粒　2～3㎜の雲母	にぶい橙	にぶい黄褐	
6-8	○		同上	同上	2㎜程度の白色粒、1㎜程度の黒色の光沢粒　2～3㎜の雲母	にぶい橙	にぶい橙	
7-1	○	口縁部	鋸歯状の平行沈線文	ナデ	0.5～3㎜の黒色・灰白・黄橙・褐灰色粒	灰黄褐	にぶい黄橙 灰黄褐	外面　スス付着
7-2	○	口縁部	同上	同上	1㎜程度の透明・乳白色・褐色粒　2㎜程度の灰色粒	にぶい黄橙	浅黄橙	
7-3	○	口縁部	同上	同上	1㎜程度の透明・乳白色・褐色粒　2㎜程度の灰色粒	浅黄橙 明黄褐	浅黄橙 灰黄褐	
7-4	○	口縁部	同上	同上	0.5～3㎜の黒色・灰白・黄橙・褐灰色粒	灰黄褐	にぶい黄橙 灰黄褐	
7-5	G-4	口縁部	同上	同上	1㎜程度の黒・白色粒、黒色の光沢粒	にぶい黄橙	浅黄	
7-6	○		同上	同上	0.5～3㎜の灰白・黒・褐灰色粒	にぶい黄橙	にぶい黄橙	外面　二次的火熱を受け赤変
7-7	E-2		同上	同上	1～2㎜の乳白・透明粒　1㎜程度の黒色粒	橙	にぶい黄褐	外面　スス付着
7-8	D-4		同上	同上	0.5～1.5㎜の灰白・黒・灰褐色粒	浅黄橙	浅黄橙	
7-9	D-4		同上	同上	1～2㎜の乳白・透明粒　1㎜程度の黒色粒	にぶい黄橙 橙	灰黄褐	
7-10	不明		同上	同上	1～2㎜の乳白・透明粒 1㎜程度の黒色粒	橙	にぶい黄橙 灰黄褐	Ⅰ層出土
7-11	F-4		同上	同上	1㎜程度の乳白・透明粒、黒色の光沢粒 5㎜程度の褐色粒	にぶい黄橙 灰黄褐	にぶい黄橙	
7-12	○		同上	同上	1㎜程度の乳白・透明粒、黒色の光沢粒	にぶい黄橙	にぶい黄褐	
7-13	E-3		ナデ後　斜位の平行沈線文	ナデ	0.5～1.5㎜の灰白・褐灰・黒色粒	浅黄橙	淡黄	
7-14	F-4		ナデ後　鋸歯状の平行沈線文	同上	0.5～2㎜の灰白・灰褐・黒・褐灰色粒	浅黄橙	浅黄	
7-15	○		同上	同上	1㎜程度の透明・褐色粒　3～5㎜の乳白色粒　2個	にぶい黄橙	浅黄橙	
7-16	○		同上	同上	0.5～2㎜の灰白・褐灰色粒	浅黄橙	にぶい黄橙	
7-17	○	底部近く	ナデ後　斜位の平行沈線文	同上	0.5～3㎜の灰白・黒・褐灰色粒	にぶい黄橙	灰黄褐	外面　二次的火熱を受け赤変
7-18	○		同上	同上	0.5～3.5㎜の灰白・褐灰・灰褐色粒	浅黄橙	褐灰	Ⅲ層出土

Tab. 3　土器観察表（3）

番号	出土区	部位	調整および文様 外面	調整および文様 内面	胎土	色調 外面	色調 内面	備考
7-19	不明		ナデ後　斜位の平行沈線文	丁寧なナデ	0.5～２㎜の灰白・灰褐・褐灰色粒	にぶい黄橙	にぶい黄橙	Ⅰ層出土
7-20	○	底　部	ナデ後　斜位の平行沈線文　横位のミガキに近いナデ	同上	１～２㎜の透明・乳白色粒、黒色の光沢粒　１～３㎜の白色粒	黄橙 にぶい橙	灰黄褐 浅黄	内面　炭化物付着
7-21	E-2	底　部	横位のミガキに近いナデ	同上	１㎜程度の透明・乳白色粒、黒色の光沢粒	橙 にぶい黄橙	にぶい黄橙	
8-1	○		ナデ後　斜位の平行沈線文	丁寧なナデ	0.5㎜の雲母 １㎜の乳白色粒	にぶい褐	褐灰	上下逆の可能性あり
8-2	D-2		同上	同上	１㎜程度の雲母、浅黄橙色粒	にぶい赤褐	灰褐	
8-3	○		同上	同上	１㎜程度の雲母、浅黄橙色粒	にぶい褐	にぶい褐	
8-4	○		同上	同上	0.5～１㎜の浅黄橙色粒	にぶい褐	にぶい赤褐	
8-5	○		同上	同上	１㎜程度の褐色、乳白色粒	にぶい褐	褐	
8-6	○		同上	同上	0.5㎜程度の雲母、浅黄橙色粒	にぶい褐	褐	
9-1	○	口縁部	口唇部刻み、貝殻腹縁刺突文	同上	0.5～１㎜の雲母 １～２㎜の乳白色粒	褐	褐	
9-2	○	口縁部	同上	同上	0.5～１㎜の雲母 １～２㎜程度の乳白色粒	褐	にぶい褐	
9-3	○		貝殻条痕（?）後ナデ 縦位の貝殻腹縁刺突文	ナデ	0.5～１㎜程度の雲母 １～２㎜程度の乳白色粒	にぶい黄褐	にぶい黄橙	Ⅲ層出土
9-4	○		同上	ナデ（?）	0.5～１㎜程度の雲母 １～２㎜程度の乳白色粒	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
9-5	○		同上	ナデ（?）	0.5～１㎜程度の雲母 １～２㎜程度の乳白色粒	にぶい黄褐 褐	にぶい黄橙	角部のみ刺突が横方向となる
9-6	○		同上	ナデ	0.5～１㎜程度の雲母 １～２㎜程度の乳白色粒	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
9-7	○		同上	同上	0.5～１㎜程度の雲母 １～２㎜程度の乳白色粒	にぶい褐	明褐	
9-8	○		同上	同上	0.5～１㎜程度の雲母 １～２㎜程度の乳白色粒	褐	明褐	
9-9	○		同上	同上	0.5～１㎜程度の雲母 １～２㎜程度の乳白色粒	にぶい橙	にぶい黄橙	
9-10	○		同上	同上	0.5～１㎜の雲母 １～２㎜の乳白色粒	にぶい黄褐	にぶい黄褐	角部のみ刺突が横方向となる
9-11	○		同上	同上	１～２㎜の乳白色・透明粒	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
9-12	○		同上	同上	0.5～１㎜の雲母 １～２㎜の乳白色粒	褐	明褐	角部のみ刺突が横方向となる
9-13	○		同上	同上	0.5～１㎜の雲母 １～２㎜の乳白色粒	にぶい黄褐	にぶい黄褐	角部のみ刺突が横方向となる

Tab. 4　土器観察表（4）

番号	出土区	部位	調整および文様		胎土	色調		備考
			外面	内面		外面	内面	
10	C-2 D-2	口縁部	横、斜位の工具によるナデ	丁寧なナデ	1㎜程度の黒色の光沢粒 2～5㎜の茶色粒	にぶい赤褐 橙	にぶい赤褐 暗赤灰	
11	C-5	口縁部	ナデ	ナデ	1㎜程度の黒色の光沢粒	橙	にぶい黄橙 橙	外面　二次的火熱を受け赤変
12	D-4	底　部	ナデ	ナデ	1㎜程度の黒色の光沢粒 3㎜程度の白・灰色粒	にぶい黄橙 浅黄橙	淡黄	
13	C-2	底　部	ナデ	ナデ	1㎜程度の黒色の光沢粒、乳白・半透明粒	橙 にぶい橙	にぶい橙	
14	D-5	底　部	粗いナデ	ナデ	1㎜程度の黒色の光沢粒、灰・透明粒	浅黄橙	にぶい黄橙	
15	F-4 G-4		ナデ後4条の連続刺突文 縦位の刻み目、網目状撚糸文	屈曲部以上　丁寧なナデ 屈曲部以下　工具によるナデ	1㎜程度の白・半透明粒、黒色の光沢粒	浅黄橙	にぶい橙 にぶい褐	外面　スス付着
16-1	○	口縁部	口唇部　ナデ 山形押型文	縦位の原体条痕　山形押型文 ナデ	1～2㎜の黒色の光沢粒 1㎜程度の透明粒	黄橙	明黄褐	
16-2	○	口縁部	同上	縦位の原体条痕　山形押型文	1㎜程度の黒色の光沢粒、透明粒 2㎜程度の褐色粒	橙	にぶい橙	
16-3	○		山形押型文	山形押型文	0.5㎜程度の黒色の光沢粒、透明粒	橙	にぶい褐 黒褐	
16-4	○		同上	ナデ	1～2㎜の褐・灰白粒、黒色の光沢粒	にぶい橙	にぶい黄褐	
16-5	C-3		同上	同上	1㎜程度の黒色の光沢粒、透明・白色粒	にぶい橙	にぶい黄橙	外面　二次的火熱を受け赤変
16-6	D-2		同上	同上	1㎜程度の透明粒、黒色の光沢粒	黄橙 明黄褐	灰褐	
16-7	○		同上	同上	1㎜程度の透明粒、黒色の光沢粒	橙	にぶい橙	
16-8	C-3		同上	同上	1㎜程度の透明粒、黒色の光沢粒	明黄褐	にぶい黄橙 にぶい黄褐	
16-9	○		同上	同上	1㎜程度の黒色の光沢粒	にぶい橙	浅黄	外面　二次的火熱を受け赤変
16-10	○		同上	同上	1㎜程度の透明粒　黒色の光沢粒	黄橙	にぶい黄橙	
16-11	D-3		同上	同上	1㎜程度の透明・乳白色粒、黒色の光沢粒	にぶい橙	淡黄	
17-1	○	口縁部	山形押型文	ナデ	1㎜程度の透明・白色粒 2㎜程度の黒色の光沢粒	淡黄	淡黄	
17-2	○	口縁部	同上	同上	1㎜程度の透明・白色粒 2㎜程度の黒色の光沢粒	淡黄	淡黄	
17-3	○	口縁部	同上	同上	0.5㎜～1㎜の黒・透明粒 0.5～2㎜の灰白・黒色の光沢粒	にぶい黄褐	にぶい橙	
17-4	○	口縁部	同上	同上	0.5～2㎜の灰白・灰褐・透明粒 黒色の光沢粒	黒褐	にぶい橙	
17-5	○	口縁部	同上	同上	1㎜程度の透明・白色粒 3㎜程度の灰色粒、黒色の光沢粒	浅黄橙 灰黄	淡黄	

Tab. 5　土器観察表 (5)

番号	出土区	部位	調整および文様		胎土	色調		備考
			外面	内面		外面	内面	
17-6	○		山形押型文	ナデ	0.5～3㎜の灰白・褐灰・透明粒 黒色の光沢粒	明黄褐	浅黄橙	穿孔あり
17-7	○		同上	同上	0.5～1㎜の黒色の光沢粒	浅黄	にぶい黄橙	
17-8	○		同上	同上	0.5～3㎜の灰白・褐・褐灰・透明粒 黒色の光沢粒	褐灰	にぶい黄橙	
17-9	○		同上	同上	0.5～1㎜の黒色の光沢粒 2～3㎜の灰白色粒	浅黄橙	にぶい黄	
17-10	○		同上	同上	0.5㎜程度の灰白・黒色の光沢粒	にぶい黄褐	にぶい黄橙	
17-11	○		同上	同上	1～2㎜の黒・透明粒、黒色の光沢粒 2㎜程度の浅黄橙色粒	浅黄橙 にぶい橙	にぶい黄橙 にぶい黄褐	
17-12	○		同上	同上	0.5～1㎜の黒色の光沢粒 2～3㎜の灰白色粒	浅黄橙	灰黄褐	
17-13	○		同上	同上	0.5～3㎜の灰白・褐灰・透明粒 1～3㎜の黒色の光沢粒	にぶい黄橙	灰黄褐	
17-14	○		同上	同上	1㎜程度の透明粒 2㎜程度の黒色の光沢粒	にぶい黄橙 明黄褐	橙	
17-15	○		同上	同上	1㎜程度の透明粒 1～2㎜の黒色の光沢粒	明黄褐	にぶい褐	
17-16	○		同上	同上	1㎜程度の透明粒、黒色の光沢粒 2㎜程度の乳白色粒	明黄褐	にぶい黄橙	
17-17	○		同上	同上	0.5～2㎜の褐色粒、黒色の光沢粒	淡黄	淡黄	
17-18	○		同上	同上	1㎜程度の透明粒、黒色の光沢粒	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
17-19	○		同上	同上	1㎜程度の透明粒、黒色の光沢粒	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
17-20	○		同上	同上	1㎜程度の透明粒 1～2㎜の黒色の光沢粒	明黄褐	にぶい黄橙	
17-21	○		同上	同上	0.5㎜程度の灰白色粒、黒色の光沢粒	にぶい黄褐	にぶい黄橙	
17-22	○		同上	同上	2㎜程度の乳白色粒、黒色の光沢粒	浅黄橙	黄灰	
17-23	○		同上	同上	0.5～2㎜の褐色粒、黒色の光沢粒	浅黄橙	浅黄橙	
17-24	○		同上	同上	1㎜程度の透明・乳白色粒、黒色の光沢粒	浅黄橙	淡黄	
17-25	○		同上	同上	1㎜程度の透明粒　1～2㎜の黄橙粒、 黒色の光沢粒	にぶい赤褐	にぶい褐	
17-26	○		同上	同上	1～2㎜の黒・透明粒、黒色の光沢粒 2㎜程度の浅黄橙色粒	にぶい橙 褐灰	褐灰 にぶい黄橙	
17-27	○		同上	同上	2㎜程度の乳白色粒、黒色の光沢粒	浅黄橙	淡黄	

Tab. 6　土器観察表（6）

番号	出土区	部位	調整および文様 外面	調整および文様 内面	胎土	色調 外面	色調 内面	備考
17-28	D-2		山形押型文	ナデ	1㎜程度の透明粒 1～2㎜の黒色の光沢粒	浅黄橙	にぶい黄橙	
17-29	○		同上	同上	0.5～3㎜の黒色の光沢粒 4㎜程度の褐色粒	浅黄	淡黄	
17-30	○		同上	同上	1㎜程度の透明粒、黒色の光沢粒 2㎜程度の白色粒	淡黄	灰黄	
17-31	○		同上	同上	0.5～2㎜の褐色粒、黒色の光沢粒	浅黄橙	淡黄	
18-1	○		山形押型文	ナデ	0.5㎜程度の浅黄橙色粒、黒色の光沢粒	淡黄	淡黄	
18-2	○		同上	同上	0.5～1㎜の透明粒、黒色の光沢粒	浅黄橙	浅黄橙	
18-3	○		同上	同上	0.5㎜程度の浅黄橙色粒、黒色の光沢粒	浅黄橙	浅黄橙	
18-4	○		同上	同上	0.5㎜～2㎜の透明粒　1～2.5㎜の黒色の光沢粒　2㎜程度の浅黄橙色粒	にぶい橙 浅黄橙	にぶい橙	
18-5	○		同上	同上	0.5㎜～2㎜の透明粒　1～2.5㎜の黒色の光沢粒　2㎜程度の浅黄橙色粒	浅黄橙 黄橙	淡黄	
18-6	○		同上	同上	0.5㎜程度の黒色の光沢粒 0.5～2㎜の浅黄色粒	黄橙	淡黄	
18-7	C-3		同上	同上	0.5～3㎜の黒色の光沢粒（黒曜石？）	浅黄橙	淡黄	
19-1	○	口縁部	口唇部　ヨコナデ 山形押型文	口唇部　ヨコナデ	1㎜程度の白色粒、黒色の光沢粒	浅黄橙	不明	
19-2	D-2	口縁部	同上	口唇部　ヨコナデ・ナデ	1㎜程度の白色粒、黒色の光沢粒　2～3㎜の褐色粒	浅黄橙	浅黄橙	
19-3	○	口縁部	同上	不明	0.5～1㎜の黒色粒、黒色の光沢粒 2㎜程度の浅黄色粒	黄橙	不明	
19-4	D-2		同上	ナデ	1～2㎜の浅黄橙色粒　1㎜程度の透明粒　1～2.5㎜の黒色の光沢粒	橙	浅黄橙	
19-5	○		同上	同上	1～2.5㎜の黒色の光沢粒　2㎜程度の浅黄橙色粒　1㎜程度の黒・透明粒	にぶい橙	にぶい橙	
19-6	○		同上	同上	1～2.5㎜の黒色の光沢粒　1㎜程度の浅黄橙色粒	橙	褐灰	穿孔あり
19-7	○		同上	同上	1㎜程度の透明粒、黒色の光沢粒	橙	にぶい黄橙	
19-8	○		同上	同上	0.5㎜程度の黒・浅黄橙色粒	にぶい橙	浅黄	Ⅲ層出土
19-9	○		同上	同上	1㎜程度の黒色の光沢粒	浅黄橙	淡黄	
19-10	○		同上	不明	1㎜程度の黒・透明粒 1～2㎜の浅黄橙色粒	にぶい橙	不明	
19-11	○		同上	ナデ	1㎜程度の黒・透明粒　1～2.5㎜の黒色の光沢粒　2㎜程度の浅黄橙色粒	にぶい橙	褐灰	

Tab. 7　土器観察表（7）

番号	出土区	部位	調整および文様 外面	調整および文様 内面	胎土	色調 外面	色調 内面	備考
19-12	○		山形押型文	ナデ	1㎜程度の黒色の光沢粒 0.5～2㎜の乳白色粒	浅黄橙	淡黄	
19-13	D-1		同上	同上	1㎜程度の透明・白・灰白色粒、黒色の光沢粒	橙	にぶい黄橙 にぶい黄褐	
19-14	○		同上	同上	1㎜程度の黒色の光沢粒 0.5～2㎜の乳白色粒	浅黄橙	淡黄	
19-15	○		同上	同上	1㎜程度の透明粒 1～2㎜の黒色の光沢粒	橙	にぶい黄橙	
20-1	○	口縁部	楕円押型文	縦位の原体条痕 楕円押型文　ナデ	1㎜程度の雲母、黒色の光沢粒 2～5㎜の白・灰色粒	にぶい黄橙	にぶい橙	外面　スス付着（?）
20-2	○	口縁部	同上	同上	1㎜程度の雲母、黒色の光沢粒 2～5㎜の白・灰色粒	橙 にぶい黄橙	にぶい橙	外面　スス付着（?）
20-3	○		同上	ナデ	1㎜程度の雲母、黒色の光沢粒 2～5㎜の白・灰色粒	にぶい黄橙	にぶい橙	
20-4	○		同上	ナデ　（指頭痕）	1㎜程度の雲母、黒色の光沢粒 2～5㎜の白・灰色粒	にぶい黄橙	にぶい橙	
20-5	○		同上	ナデ	1㎜程度の雲母、黒色の光沢粒 2～5㎜の白・灰色粒	にぶい橙	にぶい黄橙	
20-6	○		同上	ナデ　（指頭痕）	1㎜程度の雲母、黒色の光沢粒 2～5㎜の白・灰色粒	にぶい黄橙	橙	
20-7	○		同上	ナデ	1㎜程度の雲母、黒色の光沢粒 2～5㎜の白・灰色粒	にぶい黄橙	にぶい橙	
21-1	○		口唇部　ヨコナデ 楕円押型文	ナデ	1～2㎜の白色粒、黒色の光沢粒	にぶい黄橙	橙	
21-2	○		同上	同上	1㎜程度の乳白色粒　1～2㎜の白色粒、黒色の光沢粒	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
21-3	○		楕円押型文	同上	1～2㎜の黒・白色粒、黒色の光沢粒	にぶい黄橙	浅黄	
21-4	E-2		同上	同上	1～2㎜の黒・白色粒、黒色の光沢粒	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
21-5	○		同上	同上	0.5㎜程度の雲母 1㎜程度の乳白色粒	橙	にぶい黄橙	
21-6	○		同上	同上	1～2㎜の黒・白色粒、黒色の光沢粒	黄橙	浅黄 明灰黄	
22-1	D-2	口縁部	ヨコナデ	縦位の原体条痕	1㎜程度の乳白色粒	浅黄橙	浅黄橙	
22-2	D-2		楕円押型文	楕円押型文 ナデ	0.5㎜程度の透明粒、黒色の光沢粒　2㎜程度の褐色粒	にぶい褐	にぶい黄橙	
22-3	不明		同上	丁寧なナデ	1㎜程度の透明粒、黒色の光沢粒	黄橙	にぶい黄橙	Ⅰ層出土
22-4	B-3		同上	ナデ	1～2㎜の浅黄橙・褐灰・赤褐色粒	橙	浅黄橙	外面　二次的火熱を受け赤変
22-5	○		同上	同上	1㎜程度の褐色粒 2㎜程度の透明・橙色粒	橙	にぶい橙	

Tab. 8　土器観察表（8）

番号	出土区	部位	調整および文様 外面	調整および文様 内面	胎土	色調 外面	色調 内面	備考
22-6	不明		楕円押型文	楕円押型文 ナデ	1㎜程度の透明粒、黒色の光沢粒	橙	にぶい黄褐	Ⅰ層出土
22-7	C-3		同上	ナデ	0.5㎜程度の黒色の光沢粒 2～3㎜の褐灰色粒	にぶい褐	にぶい褐	
22-8	○		同上	同上	0.5～1㎜の灰白・黒色粒 1～2㎜の灰・透明粒	黄橙	浅黄橙	
22-9	C-2		同上	同上	0.5～1.5㎜の灰白・褐灰・透明粒	にぶい橙	にぶい橙	
22-10	D-2		同上	同上	0.5～1.5㎜の褐灰・褐色粒 1㎜程度の灰白色粒	浅黄橙	浅黄橙	
22-11	○		同上	不明	0.5～2㎜の褐灰・灰白色粒 1～1.5㎜の透明粒	橙	不明	
22-12	C-2	底部近く	同上	工具によるナデ	1㎜程度の灰白・褐灰色粒 1～2㎜の透明・黒色の光沢粒	にぶい橙	にぶい橙	
22-13	○		同上	ナデ	0.5～2㎜の灰白・褐灰色粒	橙 にぶい橙	黄灰	
23-1	○	口縁部	山形押型文（口唇部も）	山形押型文 ナデ	0.5～1㎜の雲母、乳白・黒色粒	灰黄褐 にぶい黄	にぶい黄橙	外面　スス付着
23-2	○		山形押型文	ナデ	0.5㎜程度の浅黄橙色粒 1～2㎜の雲母	橙	にぶい橙	
23-3	○		同上	同上	0.5～1㎜の雲母、乳白色粒	橙	にぶい橙	
23-4	○		同上	丁寧なナデ	1㎜程度の雲母、透明粒、黒色の光沢粒 2㎜程度の茶・白色粒	にぶい黄橙	浅黄橙	
23-5	○		同上	ナデ	0.5～1.5㎜の雲母、1㎜程度の黒色粒 1～2㎜の黒色の光沢粒	にぶい橙 褐灰	浅黄橙 にぶい黄褐	
23-6	○		同上	同上	1㎜程度の雲母、浅黄橙・白色粒、黒色の光沢粒	赤灰	灰褐 明黄褐	
23-7	○		同上	同上	1㎜程度の雲母、浅黄橙色粒	にぶい黄橙	明黄褐	
23-8	○		同上	同上	1～1.5㎜の雲母、浅黄橙・白色粒 黒色の光沢粒	にぶい黄橙 褐灰	明黄褐	
23-9	○		同上	同上	0.5～1㎜の雲母、乳白色粒	にぶい黄橙	灰黄褐 黄褐	
23-10	○		同上	同上	0.5㎜程度の雲母、乳白色粒	橙	にぶい橙	
23-11	○		同上	同上	0.5㎜程度の雲母、乳白色粒	橙	にぶい橙	
23-12	○		同上	同上	1～2㎜の雲母、乳白色粒、黒色の光沢粒	橙	にぶい橙	
23-13	B-4	底　部	同上	同上	1㎜程度の雲母、浅黄橙色粒	にぶい褐	にぶい黄橙	
24-1	○	口縁部	菱形押型文	菱形押型文 ナデ	0.5㎜程度の黒色粒 2㎜程度の赤褐色粒	浅黄橙 橙	にぶい黄 橙	

Tab. 9　土器観察表（9）

番号	出土区	部位	調整および文様 外面	調整および文様 内面	胎土	色調 外面	色調 内面	備考
24-2	○	口縁部	菱形押型文	菱形押型文 ナデ	0.5㎜程度の黒色の光沢粒	褐灰	黒褐	
24-3	A-3		同上	同上	1～2㎜の浅黄橙色粒	浅黄橙 灰褐	にぶい橙 褐灰	
24-4	○		同上	ナデ	1～2㎜の浅黄橙色粒	にぶい橙 黒褐	にぶい黄橙 褐灰	外面　スス付着
24-5	○		同上	同上	1㎜程度の透明粒、黒色の光沢粒	にぶい黄橙	褐灰	
24-6	○		同上	同上	1㎜程度の黒色の光沢粒 3㎜程度の茶色粒	にぶい橙	にぶい黄橙	
24-7	○		同上	同上	1㎜程度の乳白色粒、褐鉄鉱	灰黄褐	にぶい黄橙	
24-8	○		同上	同上	0.5㎜程度の乳白色粒、褐鉄鉱	にぶい赤褐	浅黄	
24-9	○		同上	同上	0.5㎜程度の乳白色粒、黒色の光沢粒	にぶい褐	にぶい黄橙	
24-10	○		同上	ナデ （指頭痕）	0.5㎜程度の乳白色粒、黒色の光沢粒	にぶい橙	淡黄	
24-11	○		同上	ナデ	1㎜程度の透明粒、黒色の光沢粒	にぶい橙	にぶい橙	
24-12	○		同上	同上	1～2㎜の浅黄橙色粒	黒褐 にぶい橙	にぶい橙 浅黄橙	
24-13	○		同上	同上	0.5㎜程度の乳白色粒、黒色の光沢粒	橙 にぶい橙	浅黄橙 にぶい黄橙	
24-14	○		同上	同上	0.5㎜程度の黒色粒、褐鉄鉱	淡黄	浅黄橙	
24-15	○		同上	同上	0.5㎜程度の乳白色粒、褐鉄鉱	にぶい橙	にぶい黄橙	
25-1	○		山形押型文	ナデ	1㎜程度の黒・白色粒、黒色の光沢粒	にぶい橙	浅黄橙 灰褐	
25-2	○		同上	同上	1㎜程度の黒色粒 1.5㎜程度の黒色の光沢粒	橙	浅黄橙 褐灰	外面　二次的火熱を受け赤変
26-1	○		縄文R{ℓ/ℓ}	ナデ	0.5～2㎜の雲母 1.5㎜程度の黄灰色粒	明赤褐 黒褐	黄褐 黒褐	外面　スス付着
26-2	○		同上	ナデ （指頭痕）	0.5～2㎜の雲母 1.5㎜程度の黄灰色粒	灰褐 褐灰	褐灰 黒褐	
26-3	○		同上	ナデ	2㎜程度の雲母 1.5㎜程度の黄灰色粒	明褐灰 にぶい褐	褐灰 にぶい橙	擬口縁
26-4	○		同上	同上	0.5～2㎜の雲母 1.5㎜程度の黄灰色粒	明赤褐 褐灰 にぶい橙	にぶい黄褐 褐灰　黄橙	
26-5	○		同上	同上	0.5～2㎜の雲母 1.5㎜程度の黄灰色粒	灰黄褐	明黄褐 暗褐	
26-6	○		同上	ナデ （指頭痕）	0.5～2㎜の雲母 1.5㎜程度の黄灰色粒	にぶい褐 浅黄橙	灰黄褐 黄橙　黒褐	

3．石器

石器１～14（Fig. 40）

石鏃は14点出土している。石材別の内訳を見ると、黒曜石（透明度の高いものと黒味の強いものが見られる）が６点（１・２・５・７・８・９・12)、流紋岩と考えれる暗灰色の岩石（以下流紋岩と記す）が３点（４・６・10)、チャートが３点（３・11・13)、姫島産の黒曜石が２点（７・14）となっている。形態からは、正三角形を呈し、基部をわずかに凹ませるもの（１・２)、基部をわずかに凹ませるもの（３・４・５・７・13)、基部を凹ませ、脚を作り出すもの（６・８・９・10・11・12・14）と大きくは３類型にまとめられよう。14はいわゆる異形局部磨製石器に似る。姫島産黒曜石製で、側縁部以外は剥離が不明瞭である。E-２区の５号集石の近くから出土している。６のスクリーントーン部分は摩滅していると見られる箇所を示している。

石器15・16・18・19（Fig. 41・42）

石匙である。このうち横形の15は、E-２区のⅠ層とⅣ層の層界付近で出土しており、所属時期の判定について注意を要する。16はⅠ-２区出土の流紋岩製、18はG-０区出土のチャート製、19はⅠ-０区出土の姫島産黒曜石製のもので、いずれも主要剥離面が残る。

石器20・21（Fig. 42）

20は、F-５区出土のチャート製の円形掻器で、左側側縁部から下端部にかけて刃部を設けている。刃部は、両面からの剥離で形成されている。21は、F-３区出土のチャート製削器で、三角形を呈し、その一辺に刃部を設けている。これも両面からの剥離によって刃部を作り出している。

石器25（Fig. 43）

頁岩製の磨製石斧で、土器６の分布域近くのF-３区より出土している。整形剥離後、両側縁も含めて研磨を施しているが、刃部以外は研磨の及ばないところが多い。

石器26（Fig. 43）

砂岩製の敲石である。F-３区より出土しており、石器25と同じく土器６・15の分布域内より出土している。欠損品で、残存している一方の端部に敲打痕が認められる。

石器27（Fig. 43）

Ⅰ-２区出土。頁岩製の石核(礫石器としての使用された可能性有り)である。一部、礫皮面が残る。

石器17・22・23・24（Fig. 41・42・43）

17はF-２区出土のチャート製、22はB-４区出土の黒曜石製、23はA-４区出土の頁岩製、24はD-２区出土の砂岩製の、いずれも剥片である。このうち24は、円礫を用いたもので、左側縁部から下端部にかけて使用の痕跡が見られる。

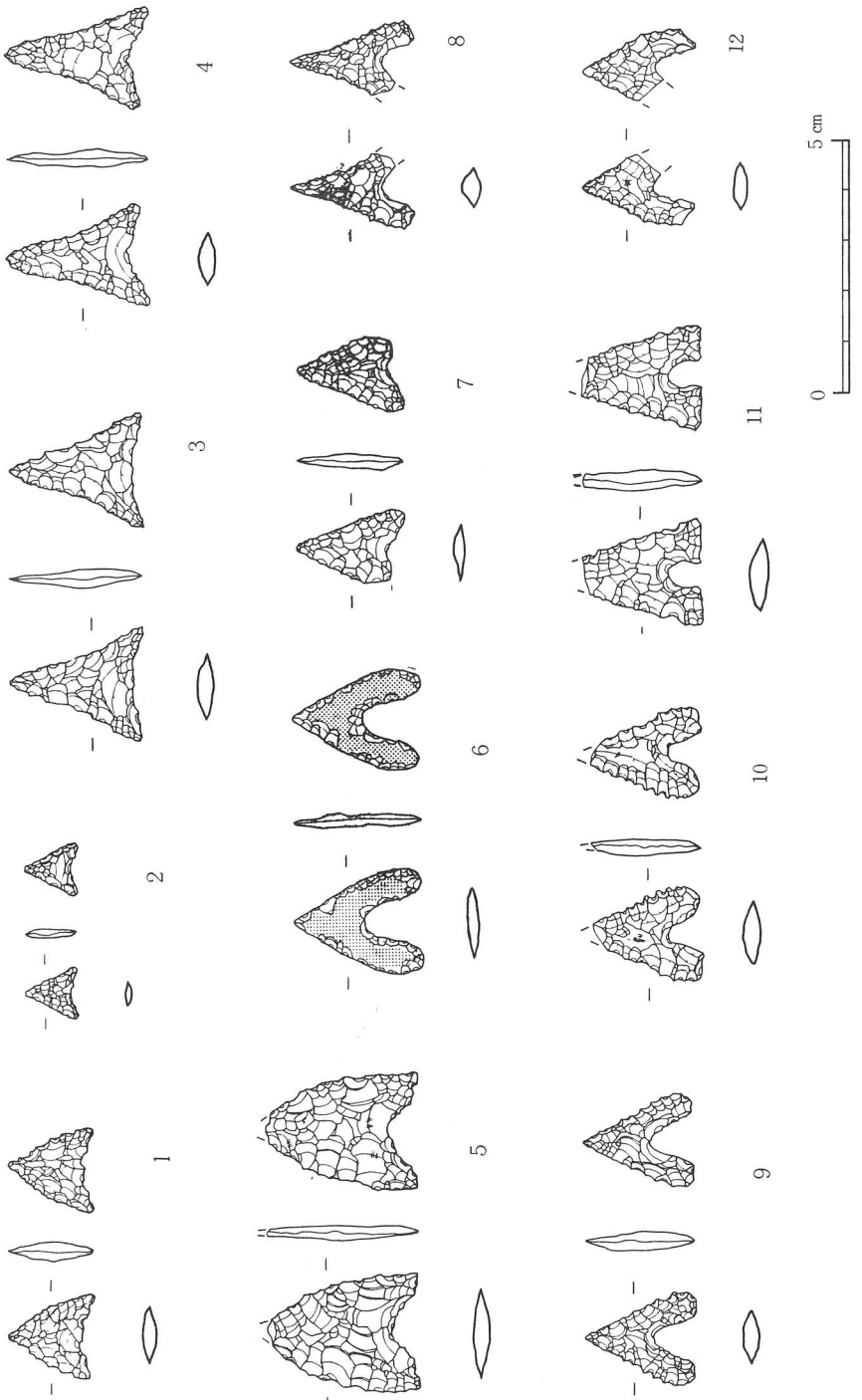


Fig. 40　石器実測図 (1) (2 ／ 3)

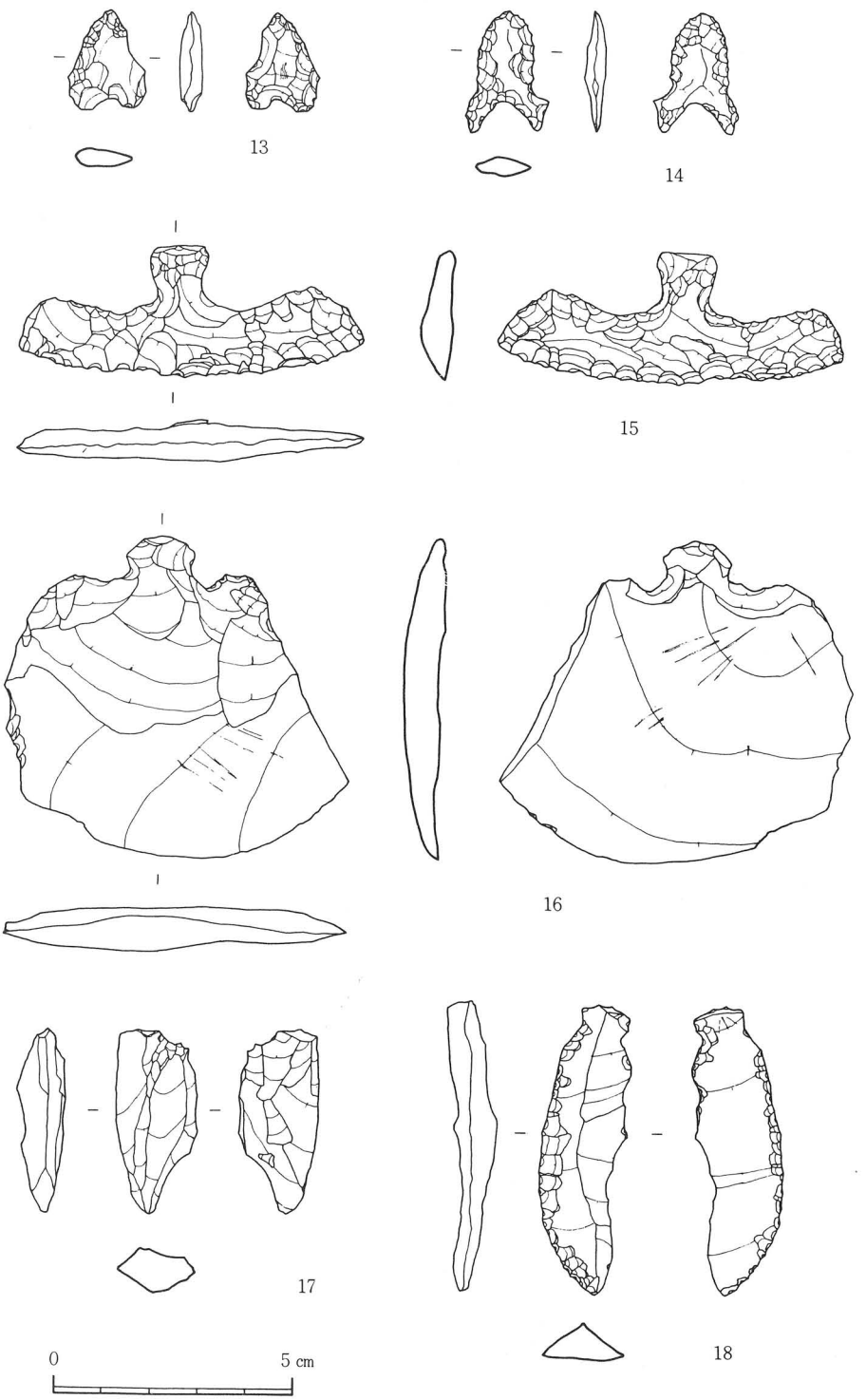


Fig. 41　石器実測図 (2) (2 ／ 3)

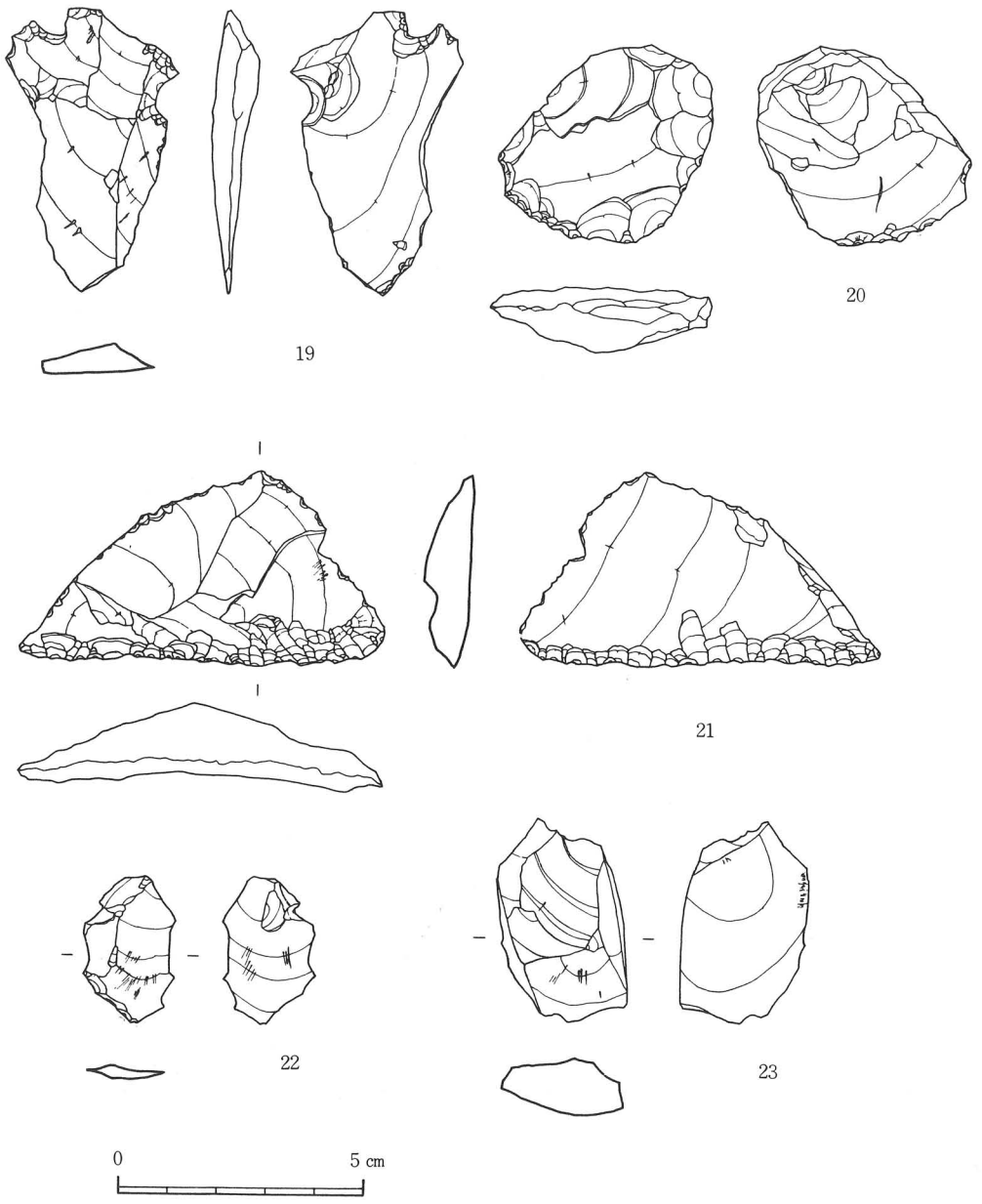


Fig. 42　石器実測図 (3) （1／3）

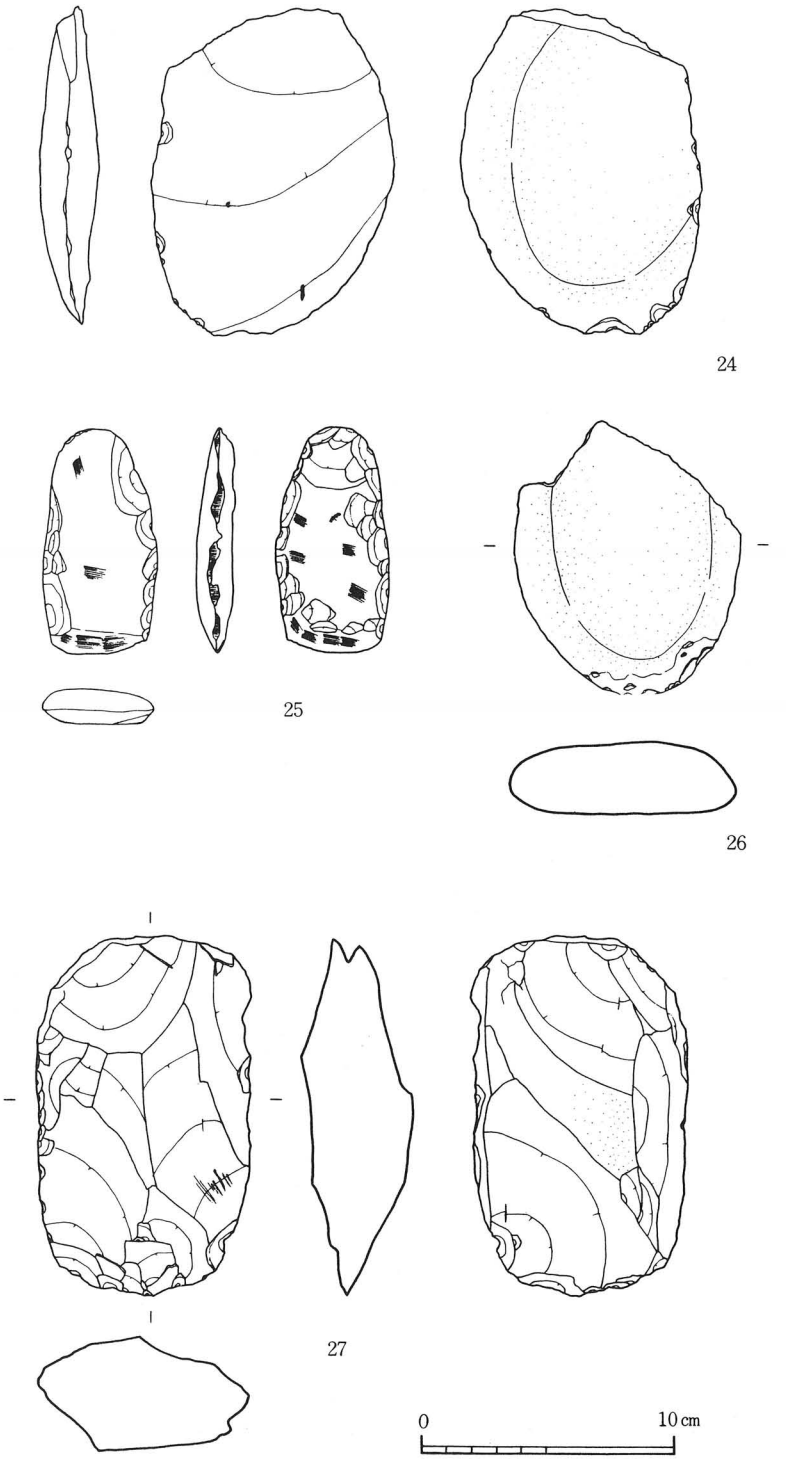


Fig. 43　石器実測図(4)（1／3）

Ⅶ　まとめと考察

1．遺構と遺物

ここまでの章では特に触れなかったが、今回報告を行なったアカホヤ層下の文化層の所属時期については、アカホヤ層の供給源である鬼界カルデラの噴出（C年代で約6300ｙＢＰ.）という自然現象を画期として認める、新東晃一の説に拠り、縄文時代早期としている[1]。

さて、本遺跡は、縄文時代早期以降、主たる生活の場として利用されてないこともあり遺構、遺物が廃絶されてからの撹乱があまり見られなかったことが窺え、そのために今後当該期の土器編年が確立されれば、遺跡内での共時的な分布論的考察や、遺跡を形成した集団の行動の復元といった、遺跡に立ちかえった研究が可能になろう。また、具体的な数値は示し得ないが、遺物の出土の密度も高いとは言えないことや、後に述べる石器組成からも、狩猟のためのTemporary Siteとしての在り方が想定でき[2]、近隣する他遺跡との比較も課題となろう。以下、遺構、遺物の順で問題点を挙げ、可能な限り考察を試みたい。

遺構については、竪穴住居跡が見られなかった点、集石遺構が検出された点など、近隣（より広く東部九州南半としても現段階では可）の遺跡の在り方と共通する。特に注目したいのは、５号集石遺構のような集石遺構を含む礫群が、遺跡内の（旧地形の）最高所に分布する点で、高鍋町・大戸ノ口第２遺跡においてもゆるやかな尾根上に同様の礫群が見られるという[3]。本遺跡と大戸ノ口第２遺跡の例は、尾根上が火処として利用されていたことを示す訳で、さらに遺跡内における分布論および集石遺構の機能論に関して、５号集石遺構の付近（特に南西側のＥ－３区）は土器の出土が希薄であったことも指摘しておこう。大戸ノ口第二遺跡の報告中では、「生活面に相当すると考えられる」平坦部に礫群が存在することに対する疑問が投げかけられている。ここでそれらについて掘り下げて考察することは不可能であるが、今後の調査・分析に際して、共通の問題として認識されるべきであろう。尚、集石遺構については、時間的変化に関する若干の考察を次節で試みている。

出土土器は、今後、縄文時代早期中葉から後葉の土器編年作業を行なう際の基礎資料たりえると確信するが、ここでは以下の事実を指摘するにとどめたい。

まず、円筒形土器系統に関しては、土器２・５一土器１という垂直分布に注目したい。特に土器１は出土に比較的まとまりが見られる点、Ⅲ層の牛の脛ローム層中からも出土している点からも、Ⅳ層の示す時間幅の中では新相に位置すると捉えられる。既存の型式では前平式土器に類似しようが、胴部以下に貝殻条痕を施さない点で検討を要する[4]。土器２は綾杉状の貝殻条痕から石坂式土器に比定される[5]。その他、平面・垂直分布から時間的に近い関係が指摘されるのは、土器７～９、土器17～20、土器６・15・21・22、土器23・25である。このうち土器７～９はいずれも円筒形土器系統で、土器９を除いてその中でも比較的新しく位置

付けられているものである[6]。B～F-2～4区に広く分布する土器6・15・17～21は、出土量も多く、分布域も遺跡の中心を占める。土器20は早水台式土器に該当し[7]、土器15を除く他の土器もほぼ同時期と考えられよう。土器26については、宮崎学園都市遺跡群の清武町・入料遺跡に関連資料が見られる[8]。入料遺跡例は、外反する口縁部の破片で、外面と内面の上部に二段RLの縄文を施す。いずれも押型文土器に伴う縄文系の土器であろうか。

石器については、繰り返し述べる通り、磨石・石皿が皆無であった点が重要である。また、磨製石斧が1点のみであることも挙げねばならない。いわゆる鍬形鏃、異形局部磨製石器に類似するものなど、押型文土器に伴うとされる石器が出土しているが、土器の型式（様式）と共伴する石器の形態、組成の関係も今後詳細に検討していかねばならない。

2．縄文時代早期の集石遺構について —東部九州南半地域の資料の検討—

今まで使用してきた、そして以下で言う東部九州南半は、ほぼ現在の宮崎県域を指し、早期を中心とする九州の縄文時代の集石遺構について考察した、徳永貞紹による地域区分を踏襲している[9]。徳永は、当地域については不確定要素も多いものの、掘り込みを持ち、配石を持たないAⅡ類から掘り込みの無いB類への時間的変化が読み取れるとしている。

不確定要素は主に土器編年であるが、その精度の問題もさることながら、集石遺構の性格上、土器による所属時期決定が困難であることや、複数の生活面の重複も問題の解決を困難にしていると言えよう。また、調理される食物の種類により集石遺構の形態が異なるという民族例からは、それらの共時的な追求を迫られる[10]。さらには個々の礫群が、いかなる作業段階に所属するのかという弁別が技術的に困難なことも挙げられる。作業過程への照射は、早いところでは小薬一夫によってなされたが[11]、当地域においても近年、種々の段階の集石遺構の検出例の指摘がなされるようになった。Fig. 44は宮崎学園都市遺跡群の宮崎市・前原西遺跡で検出された土坑である。礫群層の下部、集石遺構に近接して存在し、埋土中に炭化物を含むが焼礫は見られない[12]。同様の遺構は東隣の前原北遺跡においても検出され、報告者は「集石の形成そして廃絶の過程の各段階を示す」可能性を指摘している[13]。さらに同じく宮崎学園都市遺跡群の清武町・田上遺跡においても、検出された集石遺構について、それぞれ準備礫から廃棄礫に至る各段階に想定している[14]。それらの指摘を受け、まとめるならば、前述の視点の欠如した分類・編年では、結果として、例えば集石遺構の完成形態と準備礫・廃棄礫の集積を同一の組列上で扱うといった誤りをおかす危険性が大きい、と言えよう。

以下においては、その点を踏まえ、さらに、田野町・前平地区遺跡群[15]のように、出土土器から複数の期間にわたって存続したと考えられる遺跡を避け、形成期間の短い当地域の遺跡の集石遺構を見ていくことによって各土器型式の段階ごとの特徴を捉えていきたい。

宮崎市・前原西遺跡[16]（Fig. 44—1・2）

前出の遺跡である。アカホヤ層下の黒褐色ロームから前平式土器を中心とする縄文早期土

器が出土した。集石遺構は12基で、全て土坑を持つものである。前述の焼礫をほとんど含まない土坑もその中に計上されている。また土坑の最下部に扁平礫を置くものが３基存在する。

野尻町・梯遺跡[17]（Fig. 44－３）

Ⅱ章で触れた、本遺跡の近隣の遺跡で、アカホヤ層下の暗褐色ローム層で23基の集石遺構が密集して検出されている。土器は山形・楕円の押型文土器、櫛目状の貝殻腹縁による平行沈線を施すものなどが出土しており、本遺跡と遺跡形成の時期が一部重なる。集石遺構は、掘り込みを持つものと持たないものの両者が見られるが、数的には前者の方が多いようであり、その中には掘り込み最下部に配石を有するものもある。

高鍋町・水谷原遺跡[18]（Fig. 44－４）

アカホヤ層直下で集石遺構が６基検出され、それに伴って土器片が出土しているが、ほとんどが塞ノ神式土器であったという。集石遺構は、全て明瞭な掘り込みを持たず薄く焼礫が堆積する形態のもので、うち５基は披熱の度合いが低く使用頻度があまり高くないものとされ、６号の１基のみ、礫の下部に灰の堆積層があり、その場で加熱した痕跡があるとされる。また、１号は円礫主体であり、６号には円礫が多数混じるが、他は破砕された角礫のみであった。以上のことから、報告者は６号が礫供給源として機能し、他所に運搬され使用された可能性を指摘している。

以上、３遺跡の集石遺構の在り方について見てきた。前原西遺跡を縄文時代早期前葉、梯遺跡を早期中葉、水谷原遺跡を早期後葉と位置付けると[19]、掘り込みを持つものから、持たないものへ変化するという徳永の見解が追認できる。また、宮崎学園都市遺跡群の宮崎市・堂地西遺跡の調査では、熱ルミネッセンスによる年代測定から同様の結果を得ている[20]。ただし、円筒形土器系・押型文土器期までの資料は比較的多く見られるものの、塞ノ神式土器期の資料は少なく、水谷原遺跡例も、６号以外は廃棄礫、再使用のための準備礫を含むと考えられる。ここでは参考例として串間市・開尾遺跡の例を追加しておこう[21]。開尾遺跡からは若干の円筒形土器も出土しているが、主体となるのは塞ノ神式土器であり、28基検出された集石遺構のうち掘り込みを有するものは２基のみであった。薄いレンズ状の堆積を示すものが多い。

このように、現段階では塞ノ神式土器期の集石遺構については掘り込みの不明瞭化の傾向が認められよう。その現象の背景については今回の論題からはずれるが、塞ノ神式土器における、大形土器の出現を含む形式（器種）分化に注目しておきたい。これについては雨宮瑞生・松永幸男が法量の数量化を行ない、用途の多様化の可能性を指摘しているが[22]、塞ノ神式土器期における集石遺構のより簡略な在り方を、形式（器種）の多様化という現象と重ね合わせると、食文化における礫の相対的な比重の低下と捉えることが可能になろう。あるいは、集石遺構が「食」の中でも祭祀的位置を占めるものであったとする上田典男の見解[23]を検証していくことで、この遺構の継続期間の長さの解釈が可能になるかも知れない。

紙数の関係もあり、考察と銘打ちながら粗いものになってしまった。機会を見つけて再考したい。また文中では敬称を略している。末尾ながら先学諸氏に対する非礼を心よりお詫び申し上げたい。

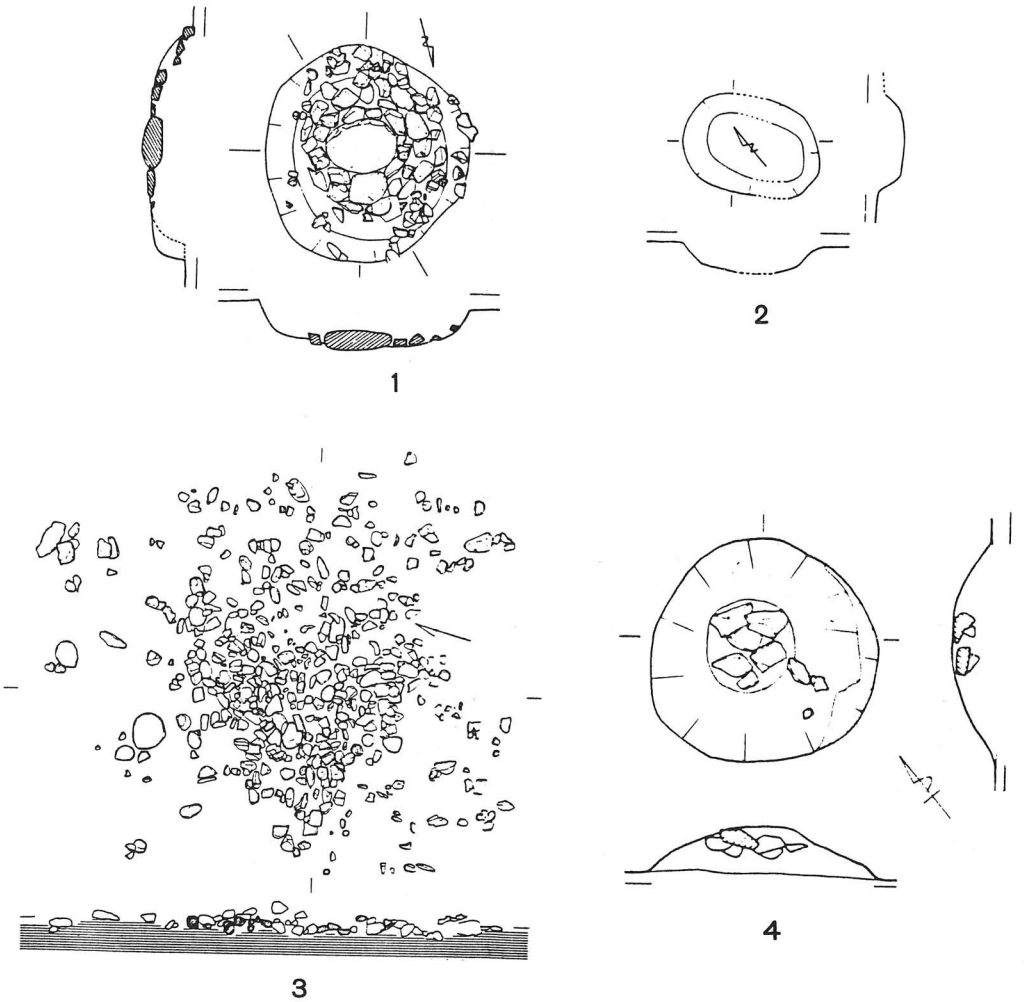


Fig. 44 各地出土集石遺構（縮尺不同 出典は各報告書 一部改変）

〔註〕

(1) 新東晃一　1980　「火山灰からみた南九州縄文早・前期土器の様相」『鏡山猛先生古稀記念古文化論巧』　同書刊行会
ただし、幸屋火砕流の及ばなかった当地域においては「死滅」といった影響ではなく、気温の低下による生態系の変化といった、二次的な影響があったのではないか。

(2) 米倉秀紀　1984　「縄文時代早期の生業と集団行動―九州を例として―」『文学部論叢』15　熊本大学文学会
本遺跡の石鏃／磨石・敲石の指数は、14.00とかなり高くなる。

(3) 戸高真知子他　1991　『高鍋町文化財調査報告書第５集　大戸ノ口第２遺跡』　高鍋町教育委員会

(4) 河口貞徳　1955　「鹿児島のおいたち　―先史時代―」『鹿児島市史』
新東晃一　1989　「早期九州貝殻文系土器様式」『縄文土器大観』１　小学館
今回当該期の基礎編年として新東（1989）編年を用いたが、それによれば、前平式土器は古く位置付けられる。土器１の位置付けは検討を要するところである。口縁部に文様を集約させるものは、複数の型式が存在し、比較的長期間存在したということは考えられないだろうか。

(5) 新東晃一　1989　「早期九州貝殻文系土器様式」『縄文土器大観』１　小学館

(6) (5)に同じ

(7) 1983　『大分県史』先史編Ⅰ　大分県

(8) 岩永哲夫他　1980　『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報（１）』　宮崎県教育委員会

(9) 徳永貞紹　1990　「九州の縄文時代集石遺構　―研究の現状と課題―」『肥後考古』　肥後考古学会

(10) 印東道子　1976　「トラック諸島の石焼料理」『えとのす』７　新日本図書

(11) 小薬一夫　1979　「縄文時代における焼石遺構」『小田原考古学研究会会報』８　小田原考古学研究会

(12) 面高哲郎　1988　「前原西遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第４集』　宮崎県教育委員会

(13) 北郷泰道　1988　「前原北遺跡」同上

(14) 菅付和樹・谷口武範　1985　「田上遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第３集』　宮崎県教育委員会

(15) 面高哲郎・寺師雄二　1986　『田野町文化財調査報告書第３集　芳ケ迫第１・第２・第３遺跡・札ノ元遺跡』　田野町教育委員会

(16) (11)に同じ

(17) 面高哲郎　1981　「梯遺跡発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』24　宮崎県教育委員会

(18) 近藤　協　1988　『水谷原遺跡』　宮崎県教育委員会

(19) (5)に同じ

(20) 永友良典他　1985　「堂地西遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第２集』　宮崎県教育委員会

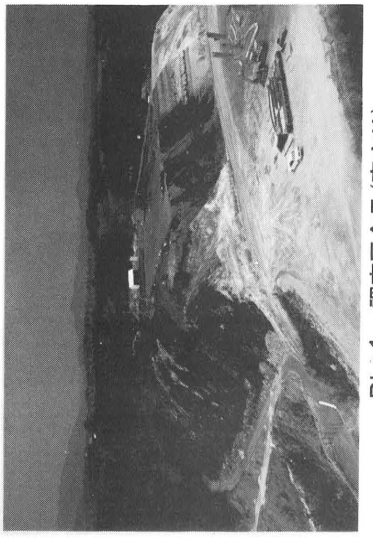
(21) 吉本正典　1989　『串間市文化財調査報告書第２集　開尾遺跡・留ケ宇戸遺跡』　串間市教育委員会

(22) 雨宮瑞生・松永幸男　1991　「縄文早期前半・南九州貝殻文円筒形土器期の定住的様相」『古文化談叢』26　九州古文化研究会

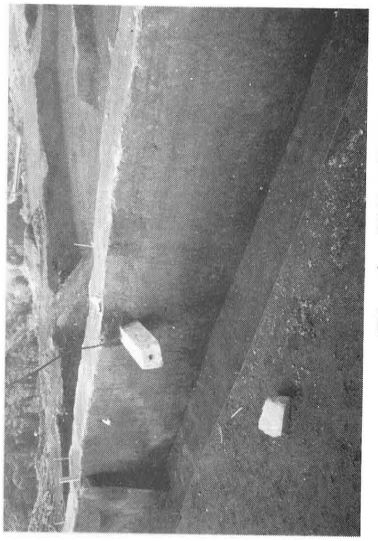
(23) 上田典男　1983　「縄文時代焼礫集積遺構の形態的把握」『物質文化』41

Ⅷ. 写真図版

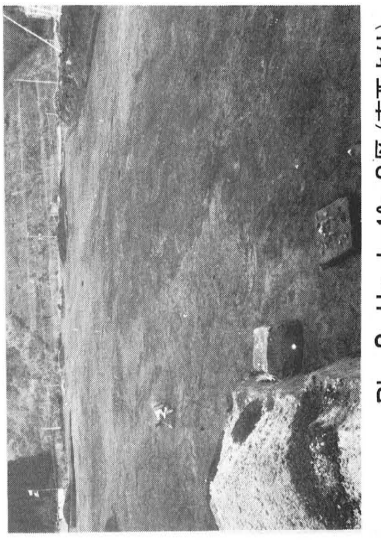
PL. 2　A～E－1～5区（東より）



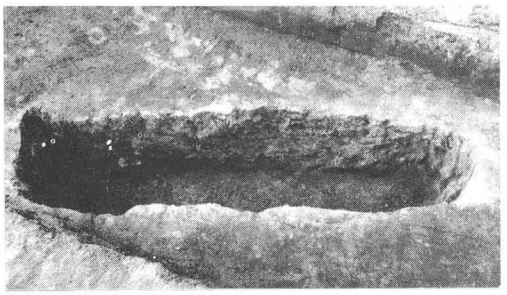
PL. 1　調査区全景（東より）



PL. 4　層位の状況



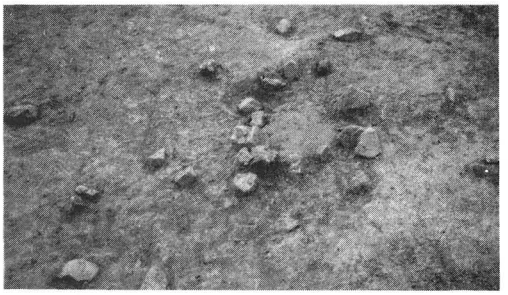
PL. 3　H～J－10～3区（南西より）



PL．5　1号土坑(南より)

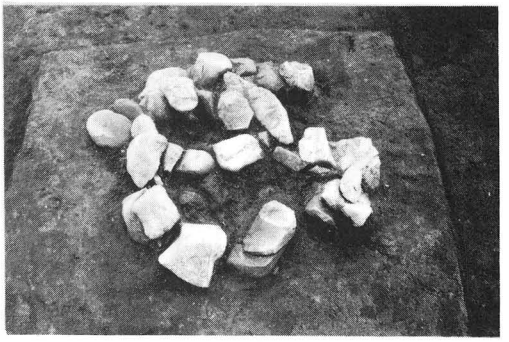
PL．6　C.D-1・2区　Ⅳ層遺物出土状況

PL．7　1号集石(南より)



PL．8　2号集石(南東より)

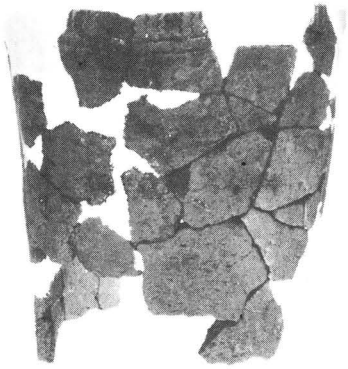
PL．9　3号集石(南東より)



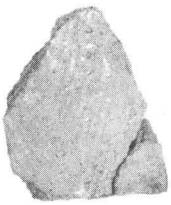
PL．10　4号集石(北東より)

PL．11　5号集石(掘り込みを有する箇所)(北西より)

PL．12　6号集石(南西より)

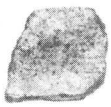


1－1

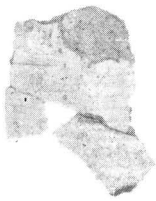


2－1

2－2

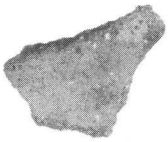


4－2

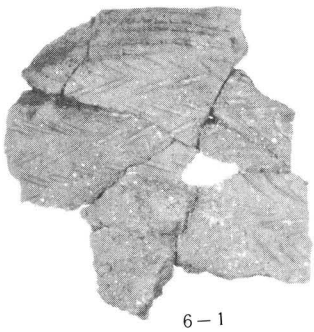


4－4

5－1



5－2

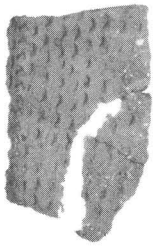


6－1

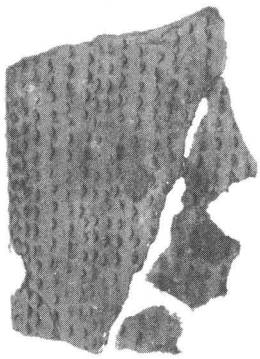
6－3

7－1

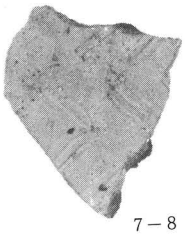
9－1



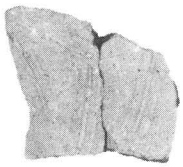
9－10



9－5



7－8

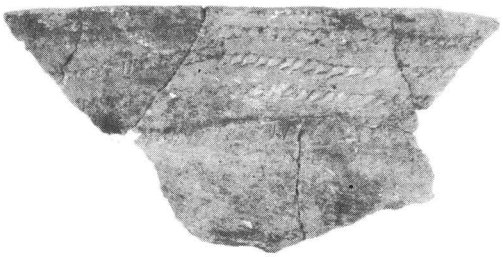


7－7

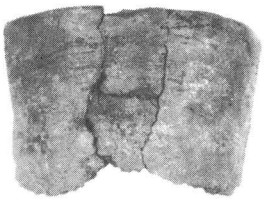
8－2

8－1

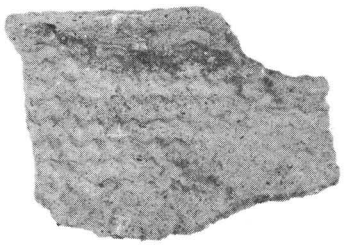
PL. 13　出土土器(1)



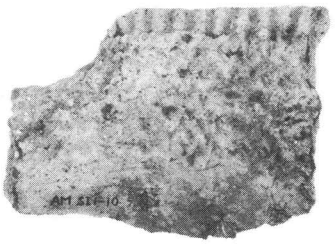
15



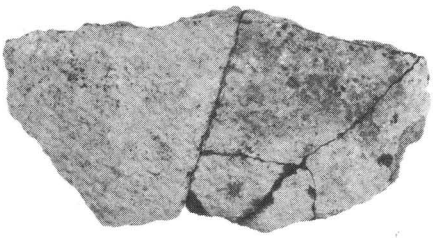
10



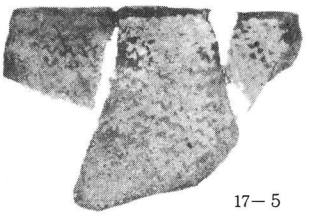
16－1



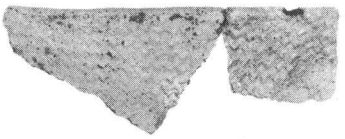
16－1 （内面）



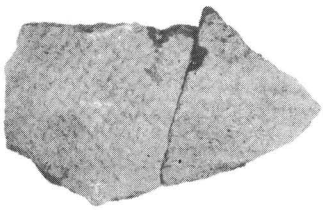
17－27



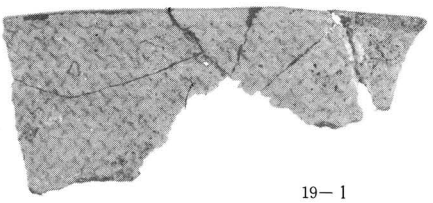
17－5



17－2

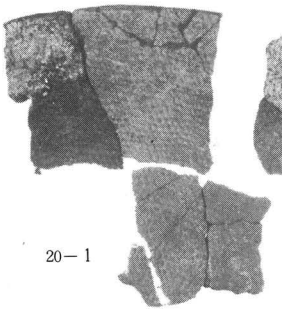


18－5

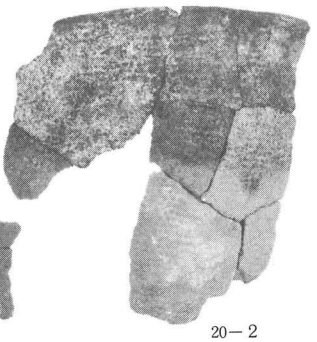


19－1

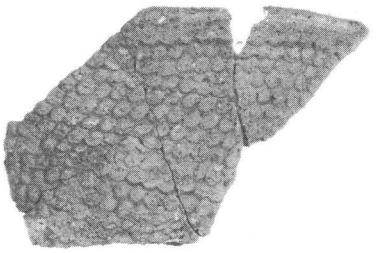
PL. 14 出土土器(2)



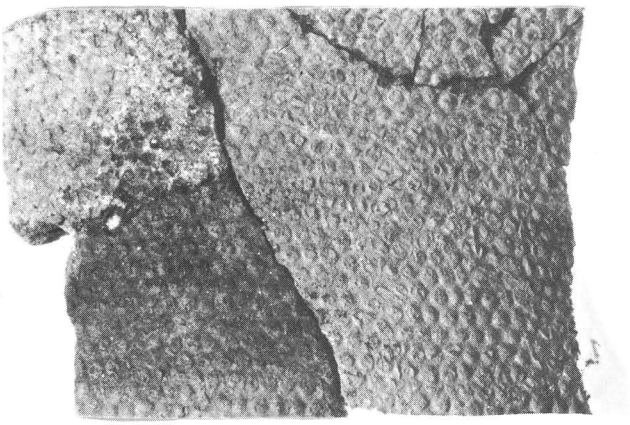
20－1



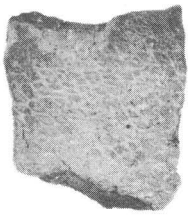
20－2



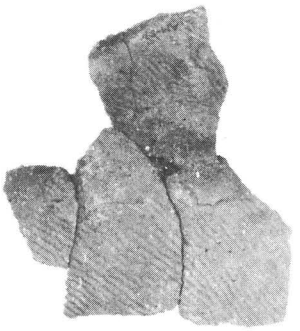
21－1



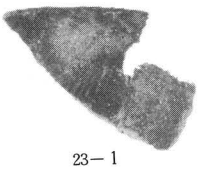
20－1



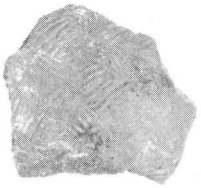
22－12



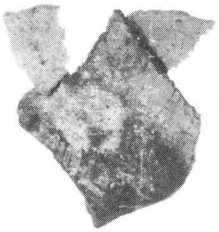
26－1



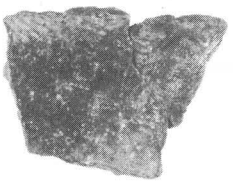
23－1



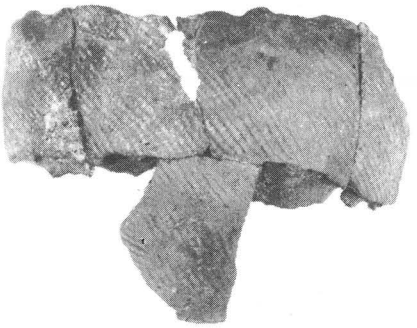
23－13



24－1

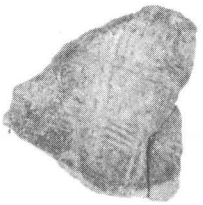


24－4



26－4

24－12



24－3

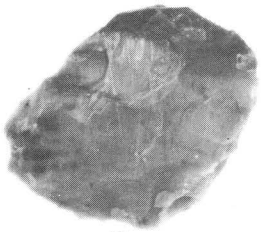
PL. 15 出土土器(3)

1

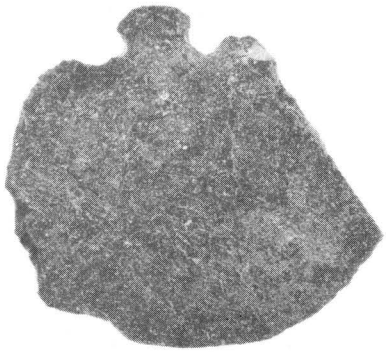
9

14

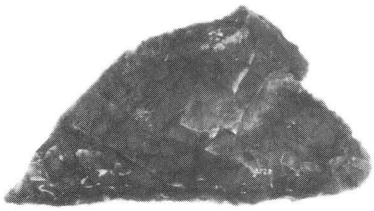
15



20



16



21

18

19

25

PL. 16 出土石器

野尻町文化財調査報告書第５集

天ケ谷遺跡

平成４年３月

野尻町教育委員会

印刷所　田丸印刷所